

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和54年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001207

昭和54年度

国立国語研究所年報

—31—

国立国語研究所

1980

刊 行 の こ と ば

ここに『国立国語研究所年報—31—』を刊行する。本書は、昭和54年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものである。

本年度から、日本語教育センターに第三研究室が設けられ、また国語辞典編集の具体的計画を定めるための国語辞典編集室を開設した。

当研究所の研究及び事業を進めるに当っては、例年のように地方研究員をはじめ、各種委員会の委員、各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得ている。また、調査について、各地の県及び市町村教育委員会、学校、幼稚園、図書館等の御配慮を仰いでいる。その他、長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意を深く謝するとともに、今後とも御支援が得られることを切に願う次第である。

昭和55年7月

国立国語研究所長

林 大

目 次

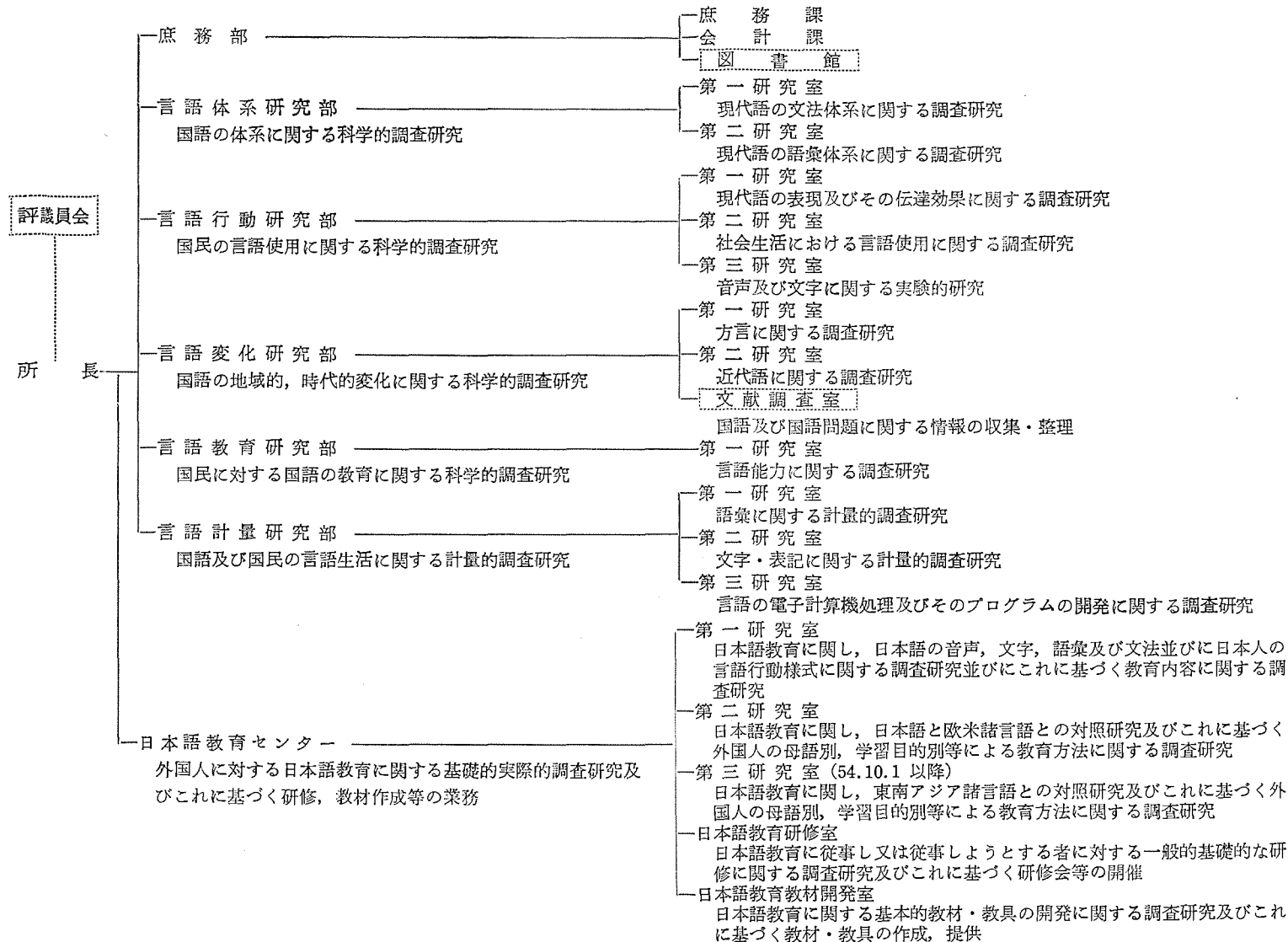
刊行のことば

昭和54年度の調査研究のあらまし	1
昭和54年度刊行報告書の概要	10
現代語文法の記述的研究	16
現代語彙の概観的調査	18
敬語の社会的研究	20
現代語の表現の文体論的研究	22
所属集団の差異による言語行動の比較研究	24
言語行動様式の分析のための基礎的研究	26
図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究	27
動的人工口蓋による発音過程に関する研究	29
方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究	31
明治初期における漢語の研究	40
現代人文関係用語の成立過程に関する研究	44
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究	49
高校教科書の用語・用字調査	52
現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究	56
現代の文字・表記に関する研究	58
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	60
日本語の対照言語学的研究	62
日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究	73
日本語教育のための基本的な語彙に関する比較対照研究	75
日本語教育の内容と方法についての調査研究	77
日本語教育に関する情報資料の収集・提供	80

日本語教育研修の内容と方法についての調査研究	81
日本語教育教材開発のための調査研究	84
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	85
文部省科学研究費補助金による研究	94
日本語教育研修の実施	120
日本語教育教材および教授資料の作成	131
国語辞典の編集準備	136
図書の収集と整理	147
庶務報告	148

昭和 54 年度の調査研究のあらまし

研究所の機構は次のとおり（55年 3月31日現在）。



なお、国語辞典の編集に関して、辞典編集準備室を設けている。

本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

言語体系研究部

- (1) 現代語文法の記述的研究 第一研究室

現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。本年度は、動詞のカードによって、主としてムードに関する分析を行い、また副詞のカードによって、主として陳述副詞の分析を行った。(16ページ参照)

- (2) 現代語彙の概観的調査 第二研究室

雑誌についての経年的語彙調査を継続し、集計結果の検査にはいった。格支配を中心に、基本的な和語動詞の用法を分析。機械工学用語について使用度数と明治以後の変化とを調査。雑誌九十種資料の外来語表記の分析に着手した。(18ページ参照)

言語行動研究部

- (3) 敬語の社会的研究 第一研究室

一般企業における敬語の実態を把握する目標で、52年度までの3年間にを行った調査の整理を進めた。東京、茨城、関西の事業所を対象にした、面接、アンケート、録音などの各種調査について、個別的・対比的な集計・整理を進め、それらの分析・検討をまとめながら、調査報告書の原稿執筆に着手した。(20ページ参照)

- (4) 現代語の表現の文体論的研究 第一研究室

文学作品を中心とした現代文章資料にあらわれる各種の表現法を体系的にとらえることをとおして現代日本語のレトリックを考える研究である。本年度は、修辞学・文体論・表現批評の分野の文献から関連情報を収集することと、比喩表現の内容面の分析を進めるための用例補充作業とを、継続して行った。(22ページ参照)

- (5) 所属集団の差異による言語行動の比較研究 第二研究室

昭和47年度に愛知県岡崎市で、49年度に東京都区内・大阪市で行った二つの社会言語学的調査の資料の整理・集計および一部の分析を行った。その結果について、学会やシンポジウムなどで発表した。(24ページ参照)

(6) 言語行動様式の分析のための基礎的研究 第二研究室

前年度に引き続き、大阪地区および東京地区（国立国語研究所内）で録画・録音資料を収集し、この資料について文字化（片かな、文節分かち書き）作業を行った。また、言語形式と非言語的行動を対照するための方式を検討し、それに基づいてテキストを作成した。（26ページ参照）

(7) 図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究

第二研究室

視覚情報処理の立場から、短時間提示条件における単語の知覚過程に関するモデルを検討し、また眼球運動を指標とする読みの過程についての実験を分析した。（27ページ参照）

(8) 動的人工口蓋による発音過程に関する研究 第三研究室

ダイナミックパラトグラフィを分析法の主軸として、現代日本語の音声調音的、音響的、機能的な側面から明かにすることを目指す。第一年次に当たる今年度は、まず、資料収集に重点をおき、2名の被験者から調音時における舌と口蓋の接触情報を収集すると共に、観測システムの一部の電算機による自動処理化をすすめた。（29ページ参照）

言語変化研究部

(9) 方言における音韻・文法の諸特徴についての全国的調査研究

第一研究室

5か年計画の第3年次である。「方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究」は、本調査の第1年次として、共通調査票を用いて全国275地点で臨地調査を実施した。「方言研究法に関する基礎的研究」については、新潟県中越地方および佐渡島に分布するオ段長音の開合の区別についての実験的調査および録音を行った。なお資料集3点を刊行し、また、沖縄県において方言による会話の録音・文字化の補充を行った。

（31ページ参照）

(10) 明治初期における漢語の研究 第二研究室

明治初期の翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』

(和文体)との漢語について比較考察するため対応語一覧表および用例集を作成した。東京日日新聞の用語・用字調査は前年度につづき昭和12・22・32・42年の語表記集計カードを作成し、明治10年から昭和2年まで10年間隔で漢字含有率を調査した。また、近代語研究資料の調査を行った。

(40ページ参照)

(1) 現代人文関係用語の成立過程に関する研究 第二研究室

現代の人文関係用語の成立と、定着の過程を明らかにする。そのため明治初期の学術用語集「哲学字彙」の中から今日に定着した人文関係用語(訳語)を抽出した。その成立過程を英和辞典で究明するため文化8年(1811)～昭和52年(1977)までの英和辞典目録を作成し、その中から代表的な英和辞書61種を選び記入用の対照一覧表を作成した。また、坪内逍遙の作品から訳語・外来語の採集を行った。(44ページ参照)

言語教育研究部

(12) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 第一研究室

幼児・児童における母国語の習得過程、及び言語の習得と幼児・児童の人間的能力の発達との関係を明らかにするため、本年度は、昨年に引き続き(1)幼児における範疇語の概念発達に関する研究、(2)一男児の言語の録音の文字化及び分析、(3)小学校の国語教育に関する準備的研究の三課題を行った。(49ページ参照)

言語計量研究部

(13) 高校教科書の用語・用字調査 第一、二、三研究室

国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高等学校の社会科・理科の教科書を対象として調査・分析を行うものである。本年度は第6年次で、約60万語のデータの同語異語判別作業と、その計算機処理を行った。

(52ページ参照)

(14) 現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究 第二研究室

現代語の表記のゆれや誤用について、それが、①どのような語に現れる

か、②どのような要因でひきおこされるか、③どのような意識を一般国民がもっているかなどの観点から、三年計画で調査研究を行っている。本年度は、最終年度として、①と②については、まとめの作業を行い、③については、一般成人約 300 人を対象とした、表記意識に関する検証調査を実施した。(56ページ参照)

(15) 現代の文字・表記に関する研究 第二研究室

現代の文字・表記の実態を記述するとともに、そこに含まれる諸問題について、種々の観点から、理論的な検討を行うことを目的に、本年度から開始した。本年度は、漢字の基本度、漢字の機能、表記行動、文字・表記の計量的調査の方法などについて、研究に着手した。(58ページ参照)

(16) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 第三研究室

電子計算機 (HITAC-M 150 レンタル開始昭和54.12.1), 高速漢字プリンタ (NEAC-N 7370, レンタル開始昭和55.1.5) 及び漢字テレタイプ (NEAC-N 6300-50N, レンタル開始昭和55.1.5) への切り替えに伴い、新システムへのソフトウェアの移行と用語用字調査及び言語の自動処理に関する基礎的研究を行った。

また、日本語を含む言語を理解する、人工知能に関するアルゴリズムを研究し、計算シミュレーションのためのプログラムを開発した。そのほか、モデル化の基礎となる言語の基礎的データを収集した。(60ページ参照)

日本語教育センター

(17) 日本語の対照言語学的研究 第一・二・三研究室

外国人に対する日本語教育の基礎となる、日本語の対照言語学的研究の方法論を研究し、それに基づく個別言語との具体的な対照研究を展開しようとするもので、「対照文法記述のための概観的研究」、「日独語の対照言語学的研究」、「日英対照による日本語の発話行為の研究」の三つを具体的な課題として研究を進めた。(62ページ参照)

(18) 日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究 第一研究室

日本人の言語行動様式の類型を体系的に把握しようとする研究である。

言語行動の具体例をまずテレビ番組のドラマの中から採集し、比較対照的観点からの検討をも加えて整理したあと、実際の生活場面の中での類型との差異についても調査を進めている。本年度は前年度に引き続き資料収集を行ったほか、従来の、日本のドラマの外国人の観点からの分析に加え、外国のテレビドラマの日本人の観点からの分析を行った。(73ページ参照)

(19) 日本語教育のための基本的な語彙に関する比較対照研究 第一研究室

昭和53年度までの「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」の成果として得られた、「日本語教育基本語彙第一次集計資料」(2,000語, 6,000語)について、これに各種の観点から検討を加えて、日本語教育のための学習基本語彙の選定を行おうとするもので、54年度は主に2,000語について、検討と選定を進めた。(75ページ参照)

(20) 日本語教育の内容と方法についての調査研究 第二研究室

外国人に対する日本語教育の内容と方法について現状を把握するために、年少者に対する日本語教育機関からの委員を委嘱し、研究連絡協議会を開き、教育上の諸問題の分析を行った。教育の現場に直接還元できる研究としては年少者(小学校3～5年)の初級50時間のための基本的文型の検討を行った。また、機関(琉球大学・在日米軍附属沖縄久場崎ハイスクールほか)訪問による実態調査を実施した。(77ページ参照)

(21) 日本語教育に関する情報資料の収集・提供 第二研究室

外国語としての日本語教育を有効に行うために、これまでに国内・国外で研究され、出版された日本語教育に関する教科書・副教材・辞書および対照研究に用いられるべき外国語教育および言語研究に関する文献を収集整理した。また、関連分野の専門家3名より、国外における日本語教育・日本語研究の実態に関する情報を得た。(80ページ参照)

(22) 日本語教育研修の内容と方法についての調査研究 日本語教育研修室

研修に必要な教育内容の明確化、教授資料・教材等の整備充実、また研修受講者の能力・専門・受講期間等に応じた研修制度のあり方、カリキュラムの設定などについて、基礎的な調査研究を行う。本年度は、研修のた

めの教授資料・教材の整備の一環としてプログラム教材「四段活用と非四段活用」「カタカナの筆順」を試作し、また日本語教育界における研修の要望を把握するために特に南九州地域の調査を実施した。(81ページ参照)

- (23) 日本語教育教材開発のための調査研究 日本語教育教材開発室
- 既存教科書における語彙・構文について、特に視聴覚教材に資する目的からE・Jorden の Beginning Japanese および A. Alfonso の Japanese Language Patterns の語彙・文型のカード化と、日本語教育映画基礎篇(53年度までのもの)の語彙のカード化を行った。上記の作業等をもとに「談話における『はい』と『ええ』の機能」を執筆発表した。そのほかビデオ教材「おくりもの」を実験制作した。(84ページ参照)

- (24) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 文献調査室
- 例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し、情報の収集整理を行った。(85ページ参照)

なお、上記の研究のほかに、文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

特定研究(1) 言語運用メカニズムの発達的研究(代表 上野田鶴子)

文を単位とする言語運用メカニズムの研究のまとめとして、日本語における文理解の発達の一般的法則を明らかにすることを目的とし、視点に関しては指示詞を含む文の理解(3～12歳、146名を対象とする)を、文構造の観点からは補文構造の理解(成人35名を対象とする)を課題としてとりあげ、言語心理学的手法による実験的研究を行った。(94ページ参照)

特定研究(1) 談話行動の実験社会言語学的研究(代表 渡辺友左)

この研究は、コミュニケーション行動としての言語行動を言語表現と非言語的行動との両側面から総合的に把握することを目的とするものである。本年度は、大阪和泉地区(岸和田・堺)で座談場面を、東京地区(国立国語研究所内)で対話場面をそれぞれ録画・録音し、資料を得た。この資料をもと

に『談話行動の総合テキスト』を作成し、分析結果を国立国語研究所研究発表会その他で発表した。(97ページ参照)

特定研究(2) 日本語教育のための言語能力の測定 (代表 野元菊雄)

3年間の研究の最終年度として、本年度は、得られた言語資料の分析をした。また、その成果を研究報告『日本人の知識階層における話しことばの実態』全4冊として年度末に刊行した。(100ページ参照)

特定研究(2) 児童の概念形成過程における言語の役割と言語教育の効果
(代表 村石昭三)

普通児に加えて、視聴覚に障害をもつ児童が、概念形成にとって必要な特定の語彙の意味を、どのように理解しているのか、それらの意味構造を認知テストと関連づけながら検討した。また、53年度調査(飯島)の検証調査を行い、データを補充した。以上の他に、関連調査として小学校児童用教科書における概念語の使用の実態を分析した。(114ページ参照)

一般研究(C) 言語解析を応用した日本語文修正処理の効率化に関する研究
(代表 斎藤秀紀)

電子計算機を使用した日本語データ修正処理に関し、次の四点から検討を行った。

- 1) 修正処理装置に関するハードウェア構成の検討
- 2) インテリジェント端末用スクリーン・エディタ機能の検討
- 3) データ自動修正処理用機械辞書の検討
- 4) 日本語文章を対象とした各種統計用プログラムの作成 (118ページ参照)

昭和54年度刊行報告書の概要

研究報告書(2)(報告65)

- 1 宮島達夫「意味分野と語種」——「現代雑誌九十種の用語用字」調査の上位7000語につき、『分類語彙表』の意味分野に応じて和語・漢語・外来語・混種語等の分布を明らかにした。
- 2 村木新次郎「日本語の機能動詞表現をめぐって」——「連絡をとる」の「とる」のように実質的意味を名詞にあずけて、みずからは文法的な機能をはたしている動詞とその結合の特色について考察した。
- 3 南不二男・江川清・米田正人・杉戸正樹「談話行動の総合テキストについて」——談話行動研究の基礎資料として、言語的及び非言語的両側面から談話を記録するテキストを作成する上での問題点について述べた。
- 4 高田正治「文章朗読における調音上の特徴について」——X線映画資料の文章朗読の部分について、主として直音節の母音の調音の実態を観察し調音器官の機能に考察を加えた。
- 5 大久保愛「幼児の使用語と語の意味の理解—満2歳当日の一日調査から—」1幼児の満2歳誕生日における全言語活動の録音を資料として、自立語の使用について分析した。
- 6 岩田純一「語の意味発達—最近の研究動向から—」——言語心理学の分野で近年重視されてきた幼児における語の意味の発達過程について、意味素性仮説を中心にその研究の動向を論じた。
- 7 日向茂男「談話における『はい』と『ええ』の機能」——日本語教材映画のシナリオを材料として「はい」「ええ」の基本的機能とその間の相違について検討した。
- 8 石井久雄「音韻論における日本語五母音体系」——現代日本語の母音体系につき、形態音素を考える立場からは四母音とする解釈は成り立たず、五母音が是認されることを論じた。

幼児の語彙能力（報告66）

就学前の4，5歳児クラスの幼児が日常使用する基本的な語彙について、どのような理解の水準に達しているかを明らかにするため、特別研究「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の一部として、実施した結果の報告である。調査は第二研究部国語教育研究室（現在、言語教育研究部第一研究室）が担当し、その執筆は村石昭三が行った。

本報告に含まれる諸調査は、性状語テスト、時間・空間語テスト及び動詞テストであり、性状語は13対26語、時間・空間語は17対46語、動詞は220語を選んだ。そして、理解の水準として、単語・単語の水準、単語・事物の水準、事物・事物の水準を設け、主として対語、対文、発語、誘発、認知の各テストを実施した。調査地域は東京、東北（宮城、岩手）、近畿（京都、和歌山）であり、性状語テストは18幼稚園225名、時間・空間語テストは18幼稚園225名、動詞テストは36幼稚園840名を被験者とした。こうして、各語につき、理解の程度を明らかにしたが、そのなかで性状語に関しては、普遍的な意味を持つ＜大きい、小さい＞が最も理解が容易であり、特定の限定された意味を持つ＜厚い、薄い＞＜広い、狭い＞は理解が困難である。また、各対語内では、長い＜短い、広い＜狭い、のように、量的な多さを示す語の方が理解が容易である。時間・空間語に関しては、時間を表す語よりも空間を表す語の方が理解が容易である。そして、時間を表す語のなかでは系列関係にある語より循環関係にある語の方が理解が容易である。日の経過を表す語では未来を表す語の方が過去を表す語より理解が容易である。動詞に関しては、より一般的・普遍的な意味を持つ語の方が特殊的・限定的な意味を持つ語よりも理解が容易である。また、各対語内では、上げる＜下げる、点く＜消える、のように、動作、行為、現象について時間的に先立ち、次の動作、行為、現象の因となる語の方が理解が容易であることが指摘された。

なお、別に、被験者の家庭環境を含む言語生活の特性をアンケートによって把握し、これと語彙能力との関係を考察した。そして、幼児の年齢、言語活動等に有意な関係を認め、地域差、性差は一部を除いて認められなかった。

電子計算機による国語研究X（報告67）

- 土屋信一・中野洋「高校教科書用語調査システムとその設計思想」（1～19ページ）

語彙調査システム論の立場から高校教科書調査の方法について考えた。

- 鶴岡昭夫「高校教科書用語調査の言語単位について」（20～51ページ）

今回の調査に採用したW単位・M単位について、考え方と問題点を述べた。

- 土屋信一「言語情報処理における語の把握」（52～64ページ）

電子計算機を使った語彙調査の「語」の記述方法について述べた。

- 鶴岡昭夫「漱石『坊っちゃん』と鷗外『雁』における助詞「へ」と「に」の比較」（65～72ページ）

前者が「へ」、後者が「に」を多用することを明らかにした。

- 斎藤秀紀「分散処理システムへの試み」（73～88ページ）

54年度末に導入した HITAC-M 150 システムの基本的な考え方を述べた。

- 中野洋「文献検索システム IRON」（89～106ページ）

文献検索のための実験システム IRON の考え方について述べた。本報告書所収の文献目録は、これによったものである。

- 田中卓史「文字の統計—グラフィック端末による分析—」（107～141ページ）

漢字仮名まじり文を構成する文字の機能を明らかにするため、各種の集計を行い、グラフの形に表示し、分析を試みた。

- 佐竹秀雄「表記行動のモデルと表記意識」（142～168ページ）

表記行動のモデルを設定し、表記行動と表記意識とのかかわりを、四百余名を対象とした調査を実施し、分析した。

- 野村雅昭「漢字のパターン分類」（169～186ページ）

多変量解析の一方法である数量化理論第Ⅲ類を用いて、多くの観点から漢字を分析し、漢字のパターン分類をこころみた。

- 付録「言語計量研究部 部内資料文献目録」（187～213ページ）

部内資料に発表された研究文献の目録および索引（件名・著者名）である。

方言談話資料(3)―青森・新潟・愛知―(資料集10―3)

同上 (4)―福井・京都・島根―(資料集10―4)

言語変化研究部(第一研究室)は、昭和49年度から3か年計画で「各地方言資料の収集および文字化」を実施した。この研究は、現今急速に失われつつある全国各地の方言を生のままに記録(録音・文字化 標準語訳および注付)集成し、国語研究の基礎的な資料とすることを目的として、当研究所地方研究員の協力を得つつ進められたものである。この二書は、昭和50年度に(全国23の府県から各1地点を選定して)実施した老年層話者による会話資料のうち「青森」「新潟」「愛知」および「福井」「京都」「島根」の地点分について刊行(カセットテープ付)したものである。なお、編集担当者は飯豊毅一・佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄・白沢宏枝であり、この研究企画には、以上のほか徳川宗賢(現大阪大学教授)が参加した。

各書に収めた地点名と収録・文字化の担当者および収録内容は、次の通り。

(3) I 青森県青森市大字牛館

収録・文字化担当者(協力者) 松本宙(佐々木隆次)

収録内容 1)田打ちの頃 2)縄緬い 3)つらい農作業 4)堆と小作米 5)牛館橋 6)川のさかなとり 7)お山(岩木山)の参詣 8)ボサマ 9)青森空襲

II 新潟県柏崎市大字折居字餅粮

収録・文字化担当者 剣持隼一郎

収録内容 1)昔の労働 2)冬の仕事 3)養蚕 4)雪の中の生活 5)冬の楽しみ

III 愛知県北設楽郡富山村中の甲

収録・文字化担当者 山口幸洋

収録内容 1)身辺雑事 2)うわさ話など 3)盆唄のこと、亡き夫のこと

(4) I 福井県武生市下中津原町

収録・文字化担当者(協力者) 佐藤茂(加藤和夫)

収録内容 1) 薬師如来の信仰 2) お地藏様の話 3) 道具持ちの話
4) 祝儀の話(1) 5) 同(2) 6) 精勤章(軍隊での)の話 7) 幣貨改正
8) 戦友の話 9) 娘の結婚 10) 酒屋の話

Ⅱ 京都府綾部市高槻町字観音堂・桜

収録・文字化担当者 佐藤虎男

収録内容 1) 黒谷の紙すき 2) こどものころの衣服 3) 小学校と
こどもの遊び 4) こどものおやつ 5) こどものころ 6) 家族のこと
7) 結婚当時のこと 8) 祭りの日のこと 9) 農家の主婦の苦しみ
楽しみ

Ⅲ 島根県仁多郡横田町大字大馬木

収録・文字化担当者 広戸惇

収録内容 1) いつも襦袢を着て欲のなかった人の話 2) こっての
にへい 3) 田植・草取 4) 盆と祭 5) 稲刈 6) 亥の子さん 7) 膝
塗り餅・とろへん・ほとほと 8) どんど焼・ひとひ正月・こと祭
なお、この方言談話資料は、今後、順次刊行していく予定である。

日本語地図語形索引(資料集11)

『日本語地図』(全6巻・昭和41～49年刊行)の凡例に掲げた約3万の見出し語形(ローマ字表記)をアルファベット順に排列し、それぞれの語形を登載する地図名(地図番号)とともに示したもの。本書は意味分野を限定したアルファベット順の方言辞典とも言うべきものであり、とくに、同一の語形が複数の意味分野の地図に現れることを一瞥して知ることができることに利点がある(たとえば、語形 BERO が「唇」「舌」「唾」「よだれ」「垢」「とさか」の各図に見られることなど)。ただし、それぞれの語形の使用地域を知るためには『日本語地図』を見なければならない。

本書の編集の実務は、言語変化研究部第一研究室の白沢宏枝が担当した。

中・上級の教授法（日本語教育指導参考書7）

『日本語教育指導参考書』は、外国人に対する日本語教育に携わっている人たちの指導上の参考に供することを目的として刊行されている。

今回刊行された『中・上級の教授法』は、高木きよ子（アメリカ・カナダ・十一大学連合日本研究センター副所長・教授）・水谷信子（同研究センター教授）・斎藤明（同研究センター助教授）の各氏がそれぞれ分担執筆したものである。

本書の内容は、「中・上級の読解教育」「中・上級の話しことば教育」「視聴覚教材の利用によるはなしことばの指導」の三部から成り、いずれも同日本研究センターにおける具体的な教授体験を本にまとめたものである。

日本語教育の分野では、近年初級段階のものについてはかなり充実してきているが、中・上級については、まだ多分に充実改善の余地が残されている。本書は、今後、中・上級の問題を検討する場合に、一つの素材を提供するものといえよう。

現代語文法の記述的研究

A 目的と内容

現代日本語文法の体系的な記述を目的とし、実際に使用された言語作品を資料として、それをカード化して分析するものである。本年度も、前年度にひきつづき、次の三つの題目（a～c）の研究をすすめるとともに、文献カードの補充（e）をおこなった。また、文の陳述性の研究（d）について検討をはじめた。

- a) 動詞の形態論的な分析
- b) 陳述副詞の用法の分析
- c) コソアドの用法の分析
- d) 文の陳述性の探索的な研究
- e) 文法に関する研究文献目録カードの作成

B 担 当 者

言語体系研究部第一研究室

部長 南不二男 d 室長 高橋太郎 a, c, d 研究員 工藤
浩 b, d, e 研究補助員 鈴木美都代 a, b, c, e

C 本年度の作業

- (1) aでは、動詞のムード（法）について、主としてテンス（時制）とのかみあいに関心をあてて分析した。
- (2) bでは、陳述副詞のうち、ムードの副詞（「けっして」「たぶん」「もし」など）と、とりたての副詞（「とくに」「むしろ」「すくなくとも」など）との分析をひととおり終えた。
- (3) cでは、前年度にひきつづいて、直接的な用法の分析をおこなった。本

年度は、文献調査によってこれまでの研究のながれをおさえ、また、話し手、聞き手、対象を教室にいろいろに配置した、大学生をつかったの実験によってコ・ソ・アのはりあい関係をしらべ、前年度までにおこなったシナリオによるテキスト分析の結果とてらしあわせて、コ・ソ・アの指示領域に関して、原稿のかたちにとまとめた。

(4) dでは、構文、動詞述語、陳述副詞、応答詞の要求のしかたなどから、分析の方向について検討をはじめた。

(5) eでは、『国語年鑑』(54年版)によって昭和53年に出た文法関係の論文をえらび、カード化した。また、本年度からは、欧文の文法関係論文にも範囲をひろげるべく、当研究所図書館にある洋雑誌から、文法関係論文をリストアップする作業を開始した。

D 今後の予定

aについては、来年度、のこされた諸問題に接近して、再来年度に報告書
の原稿をまとめる予定である。bについては、陳述副詞ののこりの部分——
主として注釈副詞と、感情的(陳述的)な色彩のこい、「ようやく・ついに」
や「けっこう・じつに」などのときや程度の副詞について分析する予定であ
る。cについては、コ・ソ・アのはりあいに影響する指示対象のカテゴリカ
ルな性質やゆびさし等の指示行動について分析する。dについては、各種の
側面から接近法の検討をつづける予定である。eについては、本年度の作業
を継続する。

現代語彙の概観的調査

A 目的と内容

現代日本語の語彙体系を、いろいろな観点から調査記述することを目的とする。本年度は、次の四つの仕事を行った。すべて前年度からの継続である。

- a) 雑誌用語の変遷に関する研究
- b) 現代語彙成立過程の調査
- c) 単語の意味と結合性の研究
- d) 専門語の調査
- e) 雑誌九十種の語表記の調査

B 担 当 者

言語体系研究部第二研究室

室長 宮島達夫 a, b, d, e 研究員 村木新次郎 c 高木翠
a, e

C 本年度の作業

- (1) a では『中央公論』の1906年から1976年にいたる10年おき8年分から、各年度1万語ずつ抽出したサンプルについて、集計結果の検査をした。本年度内には未完。
- (2) b では、雑誌九十種の調査結果による語種の比率と意味分野との関係をまとめて、『研究報告集2』（報告65）に発表した。阪本一郎『教育基本語彙』の初出年代の調査は、記入結果の検査を継続中。
- (3) c では小説、シナリオなどから採集した用例を中心に、実質的意味を欠く機能動詞の用法と文法的・意味的・文体的特徴を考察し、中間報告として、『研究報告集2』（報告65）に発表した。前年度に採集した用例カードを分類

し、基本的な和語動詞の格支配を中心に記述的分析を進めた。

(4) dでは、機械工学用語について小規模の語彙調査を行った。また明治以後の変化をするために術語集のつきあわせをした。報告書『専門語の研究』の原稿をはばまとめた。

(5) eでは、外来語の表記、とくに、ゆれのあるものについての調査に着手、いちいちの外来語の原語をしらべた。

D 今後の予定

aについては、ひきつづき集計結果の検査をする。bでも、検査をつづけるとともに、一部の基本的語彙をぬきだして、明治以前までふくめた初出年代の調査をする。cでは、単語の意味と他の単語などと結びつく能力 (valency) について調査する。dについては、これまでの調査を報告書にまとめる。eでは、原語のどのような発音が日本語のどのような表記と対応するかをしらべる。

敬語の社会的研究

A 目 的

現代日本の一般企業という職場で、敬語がどのように意識され、使用されているかについて、昭和50年度から3年間、実態調査をおこなった。調査は次の二つの観点を中心にして実施した。

1. 職場の中で敬語はどう使われ、どう意識されているか。敬語意識・敬語使用にかかわる要因として、地域社会では性、年齢、学歴、職業などが注目されるが、職場の中では何が、どのようにかかわっているか。
2. 企業と、その背景をなす地域社会との間の、言語上の関連はどのようなものか。後者は、どのように、またどの程度、前者の言語の後背地であるか。

実施した調査の種類・対象・内容・規模などについては、『年報30』および、それぞれの調査実施年度版の『年報27～29』に詳しく示したので参照されたい。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長 渡辺友左 室長 中村 明 研究員 杉戸清樹 研究補助員
塚田実知代

C 本年度の研究経過

本年度は、前年度に引き続き、調査結果の整理・集計・分析を進め、調査結果報告書の原稿の執筆に着手した。一部の中間的結果についての報告もおこなった。

1. 調査結果の集計・整理

各事業所内のアンケート調査結果については、電子計算機(HITAC-8250, M-150)により集計を進めた。前年度までにおこなった単純度数集計や性別・職階別の集計をふまえて、学歴別・在社経歴別・年齢層別などの各種クロス集計をおこなった。電子計算機処理の中には、言語行動研究部第二研究室・江川 清、米田正人の作成した「社会調査用統計処理プログラム」を必要に応じて補正し適用したものが含まれる。これらの結果を整理し、図表などにまとめる作業を進めるとともに、一部について報告書用原稿の執筆および中間的報告をおこなった。

事業所、社宅、店舗などでの面接調査結果についても、前年度までに得た各種の集計結果をもとに分析・検討を進め、報告書用原稿の執筆に着手した。

2. 集計結果の中間的発表

アンケート調査の一部について、整理・集計が進んだ時点で以下の中間的な発表をおこなった(54年度発表分)。

イ. 「職場敬語の一実態一日立製作所での調査から」(『言語生活』54年4月号・杉戸)

ロ. 「複雑きわまる会社の敬語」(『マネジメント』54年5月号・杉戸)

D 今後の予定

55年度は、これまで進めた各調査の整理・集計作業をまとめ、全体的な調査結果報告書の原稿執筆を完了させる予定である。

現代語の表現の文体論的研究

A 目的・方法

この研究テーマは、広く現代日本語の表現法をさぐり、そこにとらえられた事実を記述するところに、その最終目標をおいている。研究全体の構想の大略はつぎのとおりである。

- 1) 現代における文章観・文体論・表現批評の実態を調べるため、既刊の文献から関連情報を収集し、整理する。
- 2) 現実の言語作品から各種の表現法をさぐりだし、1)の情報を補充する。
- 3) 1)と2)によって得られた情報を総合し、各表現法のもっている言語的な性格とその表現効果との対応を軸として整理することにより、現代レトリックの全貌を大きく体系化する。

以上のうち、現代語資料（主として文学作品）にあらわれる表現法を概観し、比喩表現の分野をとくにくわしくあつかうことをとおして、現代日本人のレトリックを考えるのが当面の研究課題である。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

室長 中村 明 研究補助員 塚田実知代

C 本年度の経過

- 1) 修辞学・表現論・文体研究・文章批評に関する既刊文献を新たに42冊購入して通覧し、情報採集部分の第一次検討をおこなった。
- 2) すでに刊行した『比喩表現の理論と分類』（報告57）で、比喩表現に対する理論的考察と、形態面を中心とした分析・分類をおこなったのにひきつづいて、比喩表現の内容面を中心とした分析・分類をおこなうため

の用例補充作業を継続した。本年度末までの進行状況はつぎのとおりである。

用例採集を終えた作品数 504

そのうち、抽出・点検を経てカード化を終えた作品数 318

D 今後の予定

- 1) ① c1)の文献資料の入手点数をふやし、関連分野の既知情報を収集・整理し、カードに記録する。
- ② 文学作品を中心とした現代日本語資料から、多様な表現法の実例を収集・整理し、カードに記録する。
- ③ 1)と2)で得られた両カード資料を総合し、各表現法の言語的手づきとその表現効果との関連をおさえつつ、現代日本文のレトリックの問題を考える。
- 2) ① c2)の用例補充作業を継続して実施する。
- ② 比喩表現の内容面の分析を進め、主として A. たとえる概念 B. たとえられる概念 c. 共通性 の3点を軸に、トピックを考慮しつつイメージを中心に分類し、その対応の姿を体系的にとらえる。

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人々の言語行動は、その人が置かれている社会的諸状況に依存する面が大きい。性・年齢などの自然的生得的な変数を始めとし、血縁的（たとえば、家族）、地縁的（居住地）、社会的（階層や職業）あるいは心理的（仲間意識・パーソナリティ）などの条件が絡み合って、人々にあるタイプの言語行動をとらせていると考えられる。このことを中核として、種々の観点から社会言語的な調査研究を行っている。

B 担 当 者

言語行動研究部第二研究室

室長 江川 清 研究員 米田正人 研究補助員 堀江よし子
日本語教育センター・センター長 野元菊雄

C 本年度の研究

a) 愛知県岡崎市での敬語使用および敬語意識の調査——昭和47年度に文部省科学研究費を受けて実施した試験研究(1)「社会変化と言語生活の変容」（代表者 岩淵悦太郎）の調査結果につき、遅れていた敬語の段階づけの作業をほぼ終了した。

b) 東京都および大阪市での言語生活の実態調査——昭和49年度に文部省科学研究費を受けて実施した総合研究(A)「大都市における言語生活の実態調査」（代表者 野元菊雄）の結果につき、電子計算機により集計表を作成し、一部の分析を行った。なお、結果の一部を「ICU言語社会学シンポジウム」（8月25日。於 国際基督教大学）および「日本行動計量学会第7回総会」（9月6日。於 大阪市立大学）で発表した。

D 今後の予定

a) 55年度中に、電子計算機による集計作業を行い、報告書の原稿執筆にとりかかる。

b) 55年度中に、報告書（仮題 大都市の言語生活）および資料集を刊行する。

以上の二つのテーマの集計は、国立国語研究所の電子計算機（HITAC-M 150）を用いて行った。

言語行動様式の分析のための基礎的研究

A 目 的

コミュニケーションとしての言語行動を総合的に把握するための基礎として、身振りや動作などの「行動」を記述するための枠組み作りを主目的とする。合わせて、発話の分析やコミュニケーション・ネットワークの解明およびこれらの計量的分析のための方法論を検討する。

B 担 当 者

言語行動研究部

第二研究室 室長 江川 清 研究員 米田正人 研究補助員 堀江
よし子 第一研究室 研究員 杉戸清樹

この他、言語行動研究部長の渡辺友左、言語体系研究部長の南不二男、および、大阪外国語大学の吉田弥寿夫教授、大阪樟蔭女子大学の杉藤美代子教授、大阪府立大学の輝博元助手など多くの方々の協力を得た。

C 本年度の経過

- 1) 大阪和泉地区および東京地区国語研究所内で数グループの録画・録音資料を得て、片かな、文節分かち書きの形式での文字化作業を終えた。
- 2) 以上の資料をもとに、文字化の方式および非言語的行動の記述の枠組みについての検討を行い、一部分をテキスト化した。
- 3) 参考資料として、株式取引き・放送などの身振り資料を採録した。

D 今後の予定

現在までに得られた資料を整理し、言語的表現と非言語的行動の関連性についてより詳細な検討を行う。

図形・文字の視覚情報処理過程および 読書過程に関する研究

A 目 的

図形および文字が、感覚伝送系での情報処理、および大脳における神経系の活動の結果として知覚される過程について視覚心理学的立場から実験研究を行う。これにあわせて、読書過程に関する実験研究を行う。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

室長 神部尚武 非常勤職員 和気典二(宇都宮大学教授54.10.1～55.3.31)

C 本年度の経過

本年度は、二年間の中断(52.3.15—54.3.14, 担当者神部外国出張のため)のあとをうけて、主としてこれまでに実施した実験的研究のまとめと、今後の仕事のための実験装置等の準備に費やされた。なお、本年度中にまとめられた報告には下記のものがある。

- (1) 眼球運動測定方法の相互比較——読みの研究に用いる場合——

所内の研究会にて報告(55.6.13)

- (2) 短時間提示条件における漢字二字からなる単語の知覚過程

第13回知覚コロキウム(55.3.19—21)

- (3) 読みの眼球運動における停留時の情報受容範囲

日本心理学会第44回総会にて報告予定(55.8.27—29)

D 次年度の予定

次年度は、このテーマの研究計画の最終年次にあたるため、これまでに取り上げることができなかった「漢字かなまじり文」を対象に、つぎの実験を

進める予定である。

- (1) 眼球運動を指標とする漢字かなまじり文の読みやすさに関する実験。
- (2) 読みの過程における文脈依存性の要因に関する実験。

（動的人工口蓋による発音過程に関する研究）

A 目 的

標記の研究は、言語行動第三研究室が継続的にこなっているところの、現代日本語の音声の、音韻論上の問題、表現的な個々の特徴などを調音的、音響的、機能的な側面から明らかにすることを目的とした一連の研究のなかの一つであり、おもに動的人工口蓋装置（dynamic palatography. 以下DPと略す）による調音運動の観察、分析を通して研究をすすめる。当面は、標準語の音声进行分析の対象とするが、比較の必要から、方言や外国語の音声も今後、取り扱うことを予定している。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

主任研究官 高田正治

C 本年度の経過

1. DP資料の採集手順

専用の人工口蓋を装着した被験者の発話時におけるDP情報および音声を、まず、2チャンネルの磁気テープに収録してから、DP情報を記録用紙にアウトプットする。また、必要に応じて、個々のDPボタンと当該音声との時間的な対応を調べるためのソナグラム採集も適宜おこなうことにした。

2. 発話資料および被験者

標準語でつかわれる音韻のほとんどが含まれているCV:CV型の無意味音節列を、被験者（国語研究所職員5名、その他1名）に2回ずつ発音してもらうことにし、本年度は3名分の磁気テープへの採録をおこなった。

3. 資料収集

本研究の全体計画の中で、第一年次に当たる本年度の作業は、主としてD P資料の採集に重点がおかれ、被験者2名分、延べ10,000フレームのD Pパタンの採集を手作業でおこなった。なお、この作業の進行と並行して、電算機（PDP 11/10）によるD Pパタン採図の自動処理化を計画し、年度内に関連ソフトウェアおよびハードウェアの導入を完了した。

その他、前年度までの研究からえられた成果の一部について次の報告をおこなった。

「文章朗読における調音上の特徴について」（『研究報告集2』〈報告65〉）

D 次年度の予定

昭和55年度は、本年度に採集できなかった残りの被験者のD P資料（約20,000フレーム）の採集をまず完了させ、D Pパタンの分析および一部の被験者についてのD Pパタンの声道正中断面図への変換作業をおこなう予定である。

方言における音韻・文法の諸特徴についての 全国的調査研究

I 方言における音韻・文法の諸特徴に関する全国的調査研究

A 目 的

方言における音韻・文法の諸特徴について臨地調査を行い、その全国的地域差を明らかにする。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

部長 飯豊毅一 室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 沢木幹栄

研究補助員 白沢宏枝

昭和54年度の地方研究員は次の各氏に委嘱し、各担当地域で、当研究室で作成した調査票によって調査を行うことを求めた。

担当地域	氏 名	所属機関〈職〉
北海道Ⅰ	五十嵐三郎	札幌大学〈教授〉
北海道Ⅱ	小野 米一	北海道教育大学旭川分校〈助教授〉
青 森	佐々木隆次	青森県立郷土館〈主任研究員〉
岩 手	彦坂 佳宣	岩手大学教育学部〈講師〉
宮 城	加藤 正信	東北大学文学部〈助教授〉
秋 田	井上 章	秋田大学教育学部〈教授〉
山 形	矢作 春樹	西川町立大井沢中学校〈教頭〉
福 島	三浦 芳夫	安積商業高等学校〈講師〉
茨 城	金沢 直人	茨城大学教育学部〈教授〉
栃 木	大橋 勝男	新潟大学教育学部〈助教授〉
群 馬	永瀬 治郎	専修大学文学部〈助教授〉
埼 玉	井上 史雄	東京外国語大学〈助教授〉
千 葉	加藤 信昭	千葉大学教育学部〈教授〉

東京	大島 一郎	東京都立大学人文学部＜教授＞
神奈川	後藤 和彦	大妻女子大学＜教授＞
新潟	野口 幸雄	県立西新発田高等学校＜教諭＞
富山	川本栄一郎	金沢大学教育学部＜教授＞
石川	岩井 隆盛	金沢女子短期大学＜教授＞
福井	佐藤 茂	福井大学教育学部＜教授＞
山梨	清水 茂夫	
長野	馬瀬 良雄	信州大学人文学部＜教授＞
岐阜	加藤 毅	岐阜大学教育学部附属中学校＜教諭＞
静岡	中條 修	静岡大学教育学部＜助教授＞
愛知	山口 幸洋	
三重	下野 雅昭	金城学院大学文学部＜講師＞
滋賀	熊谷 直孝	県立長浜商工高等学校＜教頭＞
京都	本年度は委嘱せず。	
大阪	山本 俊治	武庫川女子大学＜教授＞
兵庫	和田 實	神戸大学教養部＜教授＞
奈良	佐藤 虎男	大阪教育大学＜教授＞
和歌山	村内 英一	和歌山大学教育学部＜教授＞
鳥取	今石 元久	鳥取大学教育学部＜助教授＞
島根	田籠 博	島根大学法文学部＜講師＞
岡山	虫明吉治郎	
広島	室山 敏昭	広島大学文学部＜助教授＞
山口	杉村 孝夫	福岡教育大学＜助教授＞
徳島	遠藤 潤一	徳島大学教育学部＜助教授＞
香川	近石 泰秋	
愛媛	江端 義夫	広島大学教育学部＜助教授＞
高知	土居 重俊	四国女子大学＜教授＞
福岡	奥村 三雄	九州大学文学部＜教授＞
佐賀	神部 宏泰	佐賀大学教育学部＜教授＞

都道府県別調査実施地点数（54年度）

	A	B	C	<計>		A	B	C	<計>
北海道(1)	5			5	滋賀	3			3
〃 (2)	7			7	京 都		4		4
青 森	8			8	大 阪	2			2
岩 手	7	1	1	9	兵 庫	6			6
宮 城	6			6	奈 良	3			3
秋 田	8	2		10	和 歌 山	4			4
山 形	6	2		8	鳥 取	3			3
福 島	7			7	島 根	6	2		8
茨 城	5			5	岡 山	6			6
栃 木	5			5	広 島	7			7
群 馬	5			5	山 口	6			6
埼 玉	4			4	徳 島	3			3
千 葉	5			5	香 川	2			2
東 京	4			4	愛 媛	5			5
神 奈 川	2			2	高 知	7			7
新 潟	7			7	福 岡	3			3
富 山	3	1		4	佐 賀	2			2
石 川	4		1	5	長 崎	6	2	1	9
福 井	3			3	熊 本	6			6
山 梨	3			3	大 分	5			5
長 野	8	1		9	宮 崎	6		1	7
岐 阜	6	1	1	8	鹿 児 島(1)	9	1		10
静 岡	7			7	〃 (2)		2		2
愛 知	5	1		6	沖 縄	15			15
三 重	5			5	計	250	20	5	275

A：その県の地方研究員が調査した地点数

B：他県担当の地方研究員，または，地方研究員以外の研究者が調査した地点数

C：国立国語研究所員が調査した地点数

長 崎	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部<教授>
熊 本	迫野 虔徳	熊本大学文学部<助教授>
大 分	種 友明	大分大学教育学部<助教授>
宮 崎	比江島修一	県立都農高等学校<教頭>
鹿児島	田尻 英三	鹿児島大学教育学部<助教授>
沖 縄	中松 竹雄	琉球大学教育学部<教授>

以上の地方研究員各氏のほか、岡野信子<梅光女学院大学助教授>、尾崎秩子<東京大学大学院博士課程在学>、鏡味明克<岡山大学助教授>、加藤和夫<都立大学大学院修士課程在学>、剣持隼一郎<長岡工業高等専門学校講師>、中本正智<東京都立大学助教授>、広戸惇<京都家政短期大学教授>の各氏にも、前述の調査票による調査を依頼した。

C 本年度の調査研究

この研究は5か年計画（準備調査2か年、本調査3か年）とし、本年度はその第3年次（本調査第1年次）にあたる。

本年度は、まず、前年度に作成した「本調査のための調査票(案)」に最終的な検討を加え、全部で267項目から成る『方言文法の全国調査・第1調査票』『同・第2調査票』を作成した。そして、地方研究員を中心とする各地の方言研究者にこの調査票による臨地調査を依頼し、国立国語研究所員の担当者も、この調査票を用いて全国数地点で調査を行った。本年度に実施した調査地点の総数は275である（別表参照）。

また、この調査とは別に、52・53年度に行った準備調査の一部を分類整理し、項目別の分布地図を作成した。

D 今後の予定

次年度は、引き続いて、地方研究員そのほかの協力の下に、全国253地点で臨地調査を実施する予定である。昭和56年度（1981年度）までに全国約800地点で調査を行うことを目標としている。

また、本年度に作成した分布地図は『方言文法分布地図集—準備調査の結果による—』（仮称）として刊行し、さらに残りの項目についての地図化を進める予定である。

Ⅱ 方言研究法に関する基礎的研究

A 目 的

方言調査法および調査結果の処理・分析法に関する基礎的な調査研究を行う。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室 室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 沢木幹栄 研究補助員 白沢宏枝

言語行動研究部第三研究室 主任研究官 高田正治

C 本年度の調査研究

各地の方言音韻の特色を録音資料として保存するための基礎的研究の一環として、本年度は、新潟県中越地方および佐渡島に分布するオ段長音の開合の区別についての実験的調査および録音を行った。

調査地区として、佐渡島においては畑野町宮川および同町小倉、中越地方においては長岡市栖吉町を候補とし、3地点計49名の話者について予備的調査を行った上で、畑野町小倉・長岡市栖吉町の2地区から各2名の話者を選んで、種々の音韻的環境における開合の区別にかかわる単語(約170語)を「なぞなぞ式」「カード読み上げ式」その他の方法によって発音してもらい、録音した。また、その一部を8ミリ映画(同時録音)およびスティール写真に記録した。

調査日については、予備調査を10月初旬に佐藤亮一が担当して実施し、本調査は10月下旬に担当者全員が参加して行った。なお、長岡市栖吉町の調査に際しては、調査地区・調査項目の選定や話者の紹介などについて、剣持隼一郎氏(新潟県担当の前地方研究員、長岡工業高等専門学校講師)の助言・協力を得たほか、各地区の話者の紹介などについて、高野市太郎(畑野町教育長)・市嶋三郎(畑野町教育委員会総務課長)・渡部勝昌(畑野町企画商工課長)・

石井武（畑野町立後山小学校長）・加藤茂伝次（宮川地区老人会会長）・加藤瑞穂（小倉地区区長）・水沢茂（栖吉町老人会会長）の各氏にお世話になった。

D 今後の予定

本年度の課題については、録音・撮影の内容を分析した上で、調査地点や話者（発音者）の選定法、発音項目や発音方式、また、この種の録音・映像資料を実験音声学的分析の対象とするための録音・撮影のあり方について検討を加え、将来の本格的な録音資料の作成に備える。

次年度には、別の項目について、基礎的研究および実験的調査を実施する。

Ⅲ 方言資料の整備・出版

A 目 的

これまでの調査研究によって得た資料を、方言研究の基礎的な資料として利用しうるように整備し、または出版する。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 沢木幹栄 研究補助員 白沢宏
枝

C 本年度の調査研究

昭和49年度から同51年度にかけて行った「各地方言資料の収集および文字化のための研究」の成果のうち、50年度に行った老年層話者による会話資料の一部を整備・編集し、『方言談話資料 (3)―青森・新潟・愛知―』（資料集10―3）および『同(4)―福井・京都・島根―』（資料集10―4）として刊行した(13ページ参照)。これは、国立国語研究所地方研究員の協力の下に、県内各1地点で約1時間分の方言による会話を録音し、その内容を、標準語訳・注記つきで、精密に文字化したもので、続刊を予定している。本書の編集には研究室の全員が参加した。また、地方研究員（沖縄県担当）の中松竹雄氏に依頼して、沖縄県首里方言における老年層話者による会話の録音・文字化の補充を行った。

これとは別に、『日本言語地図』（全6巻・昭和41～49年刊行）に登載する約3万の方言語形（ローマ字表記）をアルファベット順に排列・編集し、『日本言語地図語形索引』（資料集11）として刊行した(14ページ参照)。これは、『日本言語地図』全6巻計300面の地図（参考地図を除く）のうち、音声関係地図、意味項目地図、総合図などを除く251面の地図について、それぞれの凡例に掲載した見出し語形を抜き出し、それらをアルファベット順に排列した

上で、それぞれの語形の掲載地図名・地図集(巻)番号・地図番号を示したものである。本書の編集の実務は白沢宏枝が担当した。

明治初期における漢語の研究

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで、明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、さらに大正末期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ、現代語成立の歴史的背景を明らかにする。

B 担当者

言語変化研究部第二研究室

室長 飛田良文 (1)～(3) 主任研究官 梶原滉太郎 (3)～(4) 研究補助員 中山典子 (1)～(4)

C これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度まで近代語研究室）では、昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の用語索引を作成し、48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集9）を刊行した（『年報』21～30参照）。現在、明治初期の代表的翻訳小説『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』の漢語について調査を行っている。

D 本年度の作業

(1) 『花柳春話』における漢語の研究

書き言葉における漢語の使用状態は、文体による相違が著しい。そこで、

同一作品の翻訳で、同一訳者による、文体の異なる作品『欧州奇事花柳春話』(漢文直訳体)と『通俗花柳春話』(和文体)の漢語について比較考察するため、漢文直訳体の漢語が和文体の訳文でどのような語あるいは語句と対応するかを調査した。本年度は、昨年度にひきつづき一字漢語、二字漢語、三字漢語、四字漢語、それ以上の漢語のうち、一字漢語および二字漢語の漢語の対応語用例集を作成した。また、漢語の性格を調査するため、J・C・ヘボン編『和英語林集成』(初版)に、対応語が存在するかどうかの有無を調査した。

(2) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き漢語に関する研究文献を収集し目録に補充した。

(3) 近代語研究資料の調査

昭和55年3月17日～18日の両日にわたって市立米沢図書館所蔵の翻訳文献のうち、特に兵学関係の表記法について調査した。担当は飛田良文、梶原滉太郎。調査にあたっては、菊池伸之館長はじめ館員の方々のお世話になった。

(4) 東京日日新聞の用語・用字調査

前年度に引き続き語表記の実態(かな表記・漢字表記・漢字かな交り表記等)を表す語表記集計カードの作成作業を進め、本年度は昭和12年11月10日(約1,800枚)、昭和22年11月10日(約1,000枚)、同年11月11日(約1,000枚)、昭和32年11月10日(約3,200枚)、および昭和42年11月10日(約3,800枚)の5日分のカードを作成した。これによって明治10年から10年間隔で昭和42年までの100年間にわたる計15日分の語表記集計カード約52,100枚が完成した。

また、漢字含有率の調査を行った。本年度に終えた分は「東京日日新聞」の明治10年11月10・12・13日、明治20年11月10・11日、明治30年11月10日、明治40年11月10日、大正6年11月10日、および昭和2年11月10日の計9日分である。また「東京日日」と並ぶ大新聞である「郵便報知新聞」の明治10年11月10・12・13日の分も調査し参照した。それから明治10年代の小新聞についても比較対照のために調査を進め、「東京絵入新聞」の明治10年1月20日、同年2月10・13・16・17日の分、「仮名読新聞」の明治10年2月8・9日、同年3月12・13・14日の分、「かなよみ」(「仮名読新聞」を改称したもの)の明

治10年3月17・21・22・23・24日の分、および「読売新聞」の明治10年11月10日の分について調査を終えた。それらはいずれも図表・広告を除いた紙面を対象とした。上記の調査の結果、「東京日日新聞」(大新聞)における漢字含有率は明治10年代(平均64.2%)が最高で20年代になると少し下降し(平均61.5%),大正6年(60.5%)～昭和2年(55.5%)の間において最も大きな下降がみられた。この事実、語表記について昨年度に分析を行った結果みられた漢字制限の変遷と同じ傾向を示している。『年報30』35～36頁参照)また大新聞どうしの「東京日日」と「郵便報知」とは漢字含有率が明治10年代の3日分を平均すると、それぞれ64.2%と65.8%であり、よく似ていることが裏付けられた。一方、小新聞は新聞の違いによって漢字含有率も異なっており、かなりの幅がある。たとえば「読売」の明治10年11月10日は55.5%、「東京絵入」の明治10年1月20日は58.7%、同年2月10日は56.4%、同年2月13日は58.1%、同年2月16日は55.2%、同年2月17日は58.9%で、いずれも上記の大新聞よりも含有率が低い。次に「かなよみ」の明治10年3月17日は64.8%、同年3月21日は62.5%、同年3月22日は63.4%、同年3月23日は61.5%、同年3月24日は63.3%で、これらの平均(63.1%)は大新聞二種のそれぞれの平均(64.2%及び65.8%)のいずれよりも少し低いけれども、それに近い数値を示している。そして「仮名読」の明治10年2月8日は65.5%、同年2月9日は68.2%、同年3月12日は66.2%、同年3月13日は61.6%、同年3月14日は65.6%で、それらの平均(65.4%)は大新聞二種の平均(65.0%)をわずかに上回っている。もっとも、小新聞は原則として総ルビであるため大新聞と無条件で比較することはできないが、小新聞といえども概して漢字をよく使ったということは注目に値する。

以上の作業と並行して、既に一応完成している語彙表を再検討し、修正を加えた。固有名詞の読み方で、特に人名・地名は『幕末維新人名事典』『大日本人辞書』『大人名事典』『新撰大人名辞典』『日本近代文学大事典』『実用難読奇姓辞典』『大日本百科事典(ジャポニカ)』『大辞典』『増補大日本地名辞書』『日本地名大辞典』『日本地名大事典』『世界地名大事典』な

どを参照して決定した。

E 今後の予定

次年度は、本年度の作業を継続し、下記の作業を行う予定である。

(1) 『花柳春話』の漢語の研究は文体別の用例集を作成し、報告原稿の執筆を行う。

(2) 東京日日新聞の用語・用字調査は、語表記の分析をまとめる。また明治10年から昭和42年までの漢字含有率の調査および語種について集計・分析を行い、上記の100年間における変遷を明らかにする。以上の内容について報告書の原稿執筆にとりかかる予定である。

(3) 近代語資料の調査を行う。

現代人文関係用語の成立過程に関する研究

A 目的・意義

幕末の開国以来、西洋の制度・文物および西洋的概念が大量に移入され多くの訳語が作られた。その中でも、人文関係の用語は、西洋文の訳語として造語されたものと、中国から輸入された漢訳文献に起源をもつものが多い。また、従来の漢語に、新しく西洋的概念の付加されたものもある。そこで、幕末・明治大正期に起源をもつ人文関係用語を発見し、その用語が定着していく過程を明らかにする。

B 担当者

言語変化研究部第二研究室

室長 飛田良文 主任研究官 梶原滉太郎 研究補助員 中山典子

C 本年度の作業

(1)『哲学字彙』の中から選択した基本的な人文関係用語(訳語)の成立過程を明らかにするため、文化8年(1811)から昭和52年(1977)までの英和辞典目録を作成した。そして、そのの中から代表的な英和辞典61種を選び、記入用の対照一覧表を印刷し調査を行った。選んだ英和辞典は次の通りである。

1814	諸厄利亞語林大成(写本)	(慶応3)
(文化11)	(本木正栄ら編)	“ 和英語林集成<再版>
1862	英和对訳袖珍辞書(堀達之助)	(J. C. Hepburn)
(文久2)		1869 改正増補和訳英辞書
1866	改正増補英和对訳袖珍辞書	(明治2) (前田正毅・高橋良昭)
(慶応2)	(堀達之助編, 堀越亀之助改訂)	1871 大正増補和訳英辞林(薩摩学)
		(明治4) 生)
1867	和英語林集成(J.C.Hepburn)	1872 英和字典(吉田賢輔ら)

- (明治5) “ ウェブスター氏新刊大辞書和
 “ 英和对訳辞書 (荒井郁序)
1873 附音挿図英和字彙 訳字彙 (イーストレーキ・棚
(明治6) (柴田昌吉・子安峻) 橋一郎)
 “ 和訳英語聯珠 (岸田吟香) 1890 新訳無双英和辞書 (棚橋一郎)
1876 An English-Japanese (明治23)
(明治9) Dictionary of the Spoken 1891 附音挿図和訳英字彙〈再訂増
 Language (E. M. Satow・ (明治24) 補版〉 (島田 豊)
 石橋政方) 1892 双解英和大辞典 (島田 豊)
1879 An English-Japanese (明治25)
(明治12) Dictionary of the Spoken 1899 英和新辞林
 Language〈再版〉 (E. M. (明治32) (イーストレーキ・岩崎行親
 Satow・石橋政方) ら)
1881 哲学字彙 (井上哲次郎ら) 1905 英和双解熟語辞典 (英語教授
(明治14) (明治38) 研究会)
1882 増補訂正英和字彙〈再版〉 1909 英和双解熟語大辞典
(明治15) (柴田昌吉・子安峻) (明治42) (神田乃武・南日恒太郎)
1884—1889 明治英和字典 (尺振八) 1911 模範英和辞典 (神田乃武ら)
(明治17—22) (明治44)
1884 改訂増補哲学字彙 1912 詳解英和辞典 (入江祝衛)
(明治17) (井上哲次郎・有賀長雄増補) (明治45)
1885 英和和英字彙大全 (市川義夫) “ 英和袖珍新字彙
(明治18) (イーストレーキ・棚橋一郎)
 “ 明治新撰和訳英辞林 (傍木哲 1912 英独仏和哲学字彙 (井上哲次
 二郎) (大正1) 郎ら)
 “ 英和雙解字典 1913 新撰英和辞典 (増田藤之助)
 (ナットル原著・棚橋一郎) (大正2)
1886 附音挿画英和玉篇 (入江依徳) 1915 井上英和大辞典 (井上十吉ら)
(明治19) (大正4)
 “ 熟語本位英和中辞典 (斎藤秀
 改正増補和英英和語林集成 三郎)
 <3版> (J.C.Hepburn) 1916 模範英和辞典〈増補版〉 (神
1887 増補訂正英和字彙<3版> (大正5) 田乃武ら)
(明治20) (柴田昌吉・子安峻) 1921—1932 大英和辞典 (藤岡勝二)
1888 附音挿画新訳英和辞書 (近藤 (大正10—昭和7)
(明治21) 堅三) 1927 新英和大辞典 (岡倉由三郎)

- | | | | | |
|------------------------|---------|----------------|---------|---------------|
| (昭和2) | 1 9 5 1 | 大英和辞典〈修訂増補版〉 | (昭和26) | (市河三喜・畔柳都太郎ら) |
| 1 9 2 8 三省堂英和大辞典(三省堂編 | 1 9 5 3 | 新英和大辞典(岩崎民平・河 | (昭和28) | 村重治郎) |
| (昭和3) 集所) | 1 9 5 6 | 新簡約英和辞典〈改訂新版〉 | (昭和31) | (岩崎民平) |
| 1 9 2 9 スタンダード英和辞典(竹原 | 1 9 5 8 | ローマ字英和辞典(高橋盛雄) | (昭和33) | |
| (昭和4) 常太) | | 岩波英和辞典〈新版〉 | | (島村盛助・土居光知ら) |
| 1 9 3 1 大英和辞典(市河三喜, 畔柳 | | カレッジクラウン英和辞典 | 1 9 6 4 | |
| (昭和6) 都太郎ら) | | (大塚高信・吉川美夫ら) | (昭和39) | |
| 〃 新英和辞典(飯島東太郎) | | 新英和中辞典(岩崎民平・小 | 1 9 6 7 | |
| 1 9 3 6 新英和大辞典〈新版〉(岡倉由 | | 稲義男) | (昭和42) | |
| (昭和11) 三郎) | | ニューワールド英和辞典(川 | 1 9 6 9 | |
| 〃 熟語本位英和中辞典 | | (昭和44) 本茂雄) | 1 9 7 0 | |
| (斎藤秀三郎・島田実増補) | | 岩波英和大辞典(中島文雄) | (昭和45) | |
| 1 9 4 1 簡約英和辞典(岩崎民平) | | | | |
| (昭和16) | | | | |
| 1 9 4 4 双解英和辞典(斎藤 静) | | | | |
| (昭和19) | | | | |
| 1 9 4 7 最新コンサイス英和辞典 | | | | |
| (昭和22) (三省堂編集所) | | | | |
| 〃 ポケット英和辞典(岩崎民平) | | | | |

(2) 次に辞典以外の文献から人文関係用語の変遷を明らかにするため、坪内逍遙の作品を中心に明治期の訳語・外来語の用例採集を行った。調査した作品は次の通り。底本は『逍遙選集』(第一書房)を用いた。採集カード約7,000枚。

- | | |
|----------------|----------|
| 「小説神随」 | (別冊 第三巻) |
| 『マクベス評釈』の緒言」 | (〃) |
| 「我れにあらずして汝にあり」 | (〃) |
| 「没理想の語義を弁ず」 | (〃) |
| 「其意は違へり」 | (〃) |
| 「小羊子が白日夢」 | (〃) |
| 『時文評論』村の縁起」 | (〃) |
| 「没理想の由来」 | (〃) |
| 「解嘲」 | (〃) |

「希臘古代の演劇」	(")
「エスキラスの三段曲」	(")
「イブセンの社会劇」	(")
「『鴨』の梗概」	(")
「『幽霊』の梗概」	(")
「『ヘッタ・カブラア』序」	(")
「『孤鶯』の梗概」	(")
「ショー一人及其作」	(")
「ソネットの黒夫人」	(")
「文体の紛乱」	(")
「翻刻三選」	(")
「外国語学と外国文学」	(")
「外国美文学の輸入」	(")
「翻訳すべき外国文学」	(")
「小学国語読本」	(")
「新聞紙の小説」	(")
「新聞小説鑑裁の標準」	(")
「功過録としての沙翁」	(")
「優人論」	(")
「優人論の補遺」	(")
「性格と性根」	(")
「雄弁論」	(")
「話の巧拙と文の巧拙」	(")
「歌謡」	(")
「緒言」	(第 四 卷)
「テムベスト」	(")
「真夏の夜の夢」	(")
「ヘンリー四世Ⅰ」	(")
「 " Ⅱ」	(")

「じゃじゃ馬馴らし」	(")
「緒言」	(第 五 卷)
「アントニーとクレオパトラ」	(")
「以尺報尺」	(")
「マクベス」	(")
「沙翁劇に関する雑筆」	(")
「醒めたる女 (最後のド・ムラン家)」	(")
「ウォーレン夫人の職業」	(")

D 今後の予定

次年度は、(1)訳語対照カードから抽出した人文関係用語を明治以降の英和辞典61種類について調査し、訳語対照一覧表を作成し、人文関係用語の定着していく過程を明らかにする。

(2)辞典以外の文献から人文関係用語の変遷を明らかにするため、明六社で活躍した人々の作品を中心に明治期の訳語・外来語の用例採集を行う。

幼児・児童の認知発達と語の意味の 習得に関する調査研究

A 目 的

幼児・児童における母国語の習得過程，及び言語の習得と幼児・児童の人間的能力の発達との関係を，科学的に明らかにすることは，言語教育の上でまず解明されなければならない基本的な課題である。そのため，昭和40年度から，「幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究」を行ってきたが，本年度より，それに加えて小学校の国語教育に関する準備的研究を開始した。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

部長 村石昭三 2 室長 大久保 愛 1—(2) 研究員 岩田純一
1—(1) 島村直己 1—(3) 川又瑠璃子 2 非常勤職員 芳賀 純（筑波大学教授，54.10.1～55.3.31）1—(1)

なお，実験に際しては，別掲の協力学校，協力園，及び特定幼児の母親の協力を得た。

C 本年度の作業

1 幼児・児童の認知発達と語の意味習得に関する調査研究

(1) 幼児における範疇語の概念発達に関する調査研究

範疇語の概念発達を体系的にとらえるために，種々のテストを行った。そして課題間の相互連関を見ることによって概念成立の過程を多面的にとらえようと試みた。

被験児 4～6 歳児 33名

テストの種類

①絵カードの自発分類による仲間（範疇）づくりテスト

②①のカードで分類数を指定しての制限分類テスト

③範疇名の呼称テスト

④範疇語理解テスト（質問テスト）

協力園 東京 板橋区 帝京幼稚園（園長 沖永 キン）

東京 北区 としま幼稚園（園長 滝沢豪一郎）

東京 北区 豊島東保育園（園長 曾根 栄子）

(2) 幼児の言語および学習行動の観察

一男児（小泉健彦，昭和49年3月3日生）の満1歳1か月より満4歳までのことば，および学習行動の観察の調査研究を，昭和50年4月より継続して行っているが，本年度はそのうち，2歳当日の一日調査の分析を「幼児の使用語と語の意味の理解」という題で，『研究報告集2』（報告65）に報告した。その他，録音文字化の2歳から3歳の部分をカード化する作業を行った。

(3) 小学校の国語教育に関する準備的研究

語彙力（語彙量・語彙理解力）の測定のために必要となるテスト形式の吟味のために，文部省および民間教育団体で行われた学力テストの収集と検討。ならびに，語彙教育に関する文献の目録を国語年鑑によって作成した。（両方とも，来年度も継続の予定である。）

すなわち，次の二つの項目である。

①小学校の国語教育に関する文献の収集と検討

②小調査の実施……小学生の語彙力を測定するために，従来用いられてきたテスト形式を吟味するための試験的な調査を行った。

被験児 小学3・5年生，中学1年生 各1クラス

テストの種類 1. 自己判定方式による語の熟知程度のテスト

2. 語の意味連想のテスト

3. 短文作成による語の理解度のテスト

協力校 埼玉 上尾市 原市南小学校（校長 小森 春雄）

東京 北区 富士見中学校（校長 古畑平三郎）

2 報告書の作成

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のうち、幼児の語彙力調査に関して、『幼児の語彙能力』（報告66）として刊行した。

D 次年度の予定

(1) については、仮称「幼児・児童の概念形成と言語」の報告書作成のための資料整理、分析 (2)については、カード化および分析の継続 (3)については、小学生の語彙力に関する予備的研究を進める予定である。

高校教科書の用語・用字調査

A 目 的

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために、国立国語研究所では、これまでに、婦人雑誌、総合雑誌、雑誌九十種、新聞三紙を対象として、調査を重ねてきた。この調査研究は、以上の諸調査のあとを受けて、国民が一般教養として各分野の専門知識を身につける時必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高等学校教科書を対象に調査分析するものである。

B 担 当 者

言語計量研究部

部長 斎賀秀夫 第一研究室、第二研究室、第三研究室の全員

C これまでの経過

この調査は昭和49年度に開始された。53年度までの経過は、次のとおりである。

- (1) 調査対象の選定……高校の社会科、理科、数学の教科書10冊を対象として選定した。すなわち、政治経済、倫理社会、地理B、世界史、日本史、生物I、化学I、物理I、地学I、数学Iである。対象とする範囲を社会科、理科、数学に限り、国語科教科書を含めなかったのは、研究目的に照らして、専門知識を体系的に記述した一まとまりの説明文を対象としたためである。また、この調査は、各分野の知識体系を記述する用語を分析するという観点を有することから、全数調査で行ったが、全体の作業の進行に先立ち、調査対象の概略を把握するため、および集計分析システムの試行のために、二十分の一の規模のサンプリングデータの調査を行った。な

お、調査対象とする教科書の選定と収集については、教科書協会の協力を得た。

- (2) 調査項目の決定……用語用字調査の結果として作成する用語表・用字表の種類および形式、分析項目等を検討し、それに要するデータ・ファイル（磁気テープ）の種類とその内容・形式を決定した。
- (3) 調査単位の決定……文節から助辞を切り出したもの（W単位）と、それよりも小さく、形態素に近いもの（M単位）との二種類に決定した。
- (4) 作業過程の決定……(a)台帳作成・管理、(b)文・段落等の情報の記入、(c)単位切り・その検査、(d)清書・その検査、(e)データさん孔、(f)原文の機械読みこみ、および電子計算機による機械的チェック、(g)出力・印字（入力データ形式で各種チェック情報の付いたもの）、(h)校正、(i)修正データ作成・さん孔、(j)再読みこみ処理、(k)修正検査用ミニKWIC（M単位・W単位）および教科書原文形式出力の作成、(l)出力・印字、(m)ミスデータの検出、(n)修正データ作成・さん孔、(o)修正機械処理、(p)最終ファイル作成、(q)同語異語判別作業、(r)判別結果の機械処理、(s)比率計算、(t)語彙表作成、(u)文脈付き用例表作成、(v)文字集計、(w)結果の分析、(x)報告書原稿作成、(y)報告書の刊行。
- (5) 作業の実施……上記(4)の過程に従って、機械処理システムを設計し、入力・データチェック・ミニKWIC作成・データ修正・同語異語判別システム等を作成し、前年度までに(s)使用率計算システムまで作成した。また、実際の作業のほうは、各科目の教科書とも、ほとんど(o)の段階まで完了した。世界史・地学Ⅰのみは、(o)修正機械処理を、54年度に持ち越した。また、二十分の一のサンプリングデータは、(q)同語異語判別作業と(r)その機械処理を終えた。さらに、(w)の分析に備えて、語彙の計量的研究に関する諸文献を収集し、ファイル化し機械検索にたえるよう整備する作業や、これまでの語彙調査とのあいだで、語彙の共通的な分析を行うための、少量の基礎的データを作成する作業も検討しはじめた。なお、数学Ⅰは、(b)段階で作業を打ち切った。これは、数式等が多く、あまりに他の教科書と性

格が異なっているためと、作業人員が不足しているためである。

D 本年度の研究作業

1) 機械処理システムの作成

機械処理を進めるためのプログラミングは、前年度までに、ほぼ終わり、本年度は、最終語彙表作成システムのプログラミングに取りかかった。このプログラムで、二十分の一サンプルデータを使って、語彙表（五十音順・度数順）を試作し、ほぼ満足できるものを完成させた。

2) 人手および機械によるデータの処理

本年度は、この高校教科書調査の後半のヤマ場である、(q)同語異語判別作業、および(r)判別結果の機械処理を行った。世界史・地学Ⅰのデータ修正処理を、4月に終わらせると、直ちに(p)最終ファイル作成にはいり、5月より、同語異語判別作業の台帳となるミニ KWIC 作成を行った。全体で約60万M単位、2万ページにおよぶ台帳は、アルバイト・研究補助員・研究員の順に、くり返し判別情報が付加され、判別結果は、清書・さん孔を経て、電子計算機処理により、最終ファイルに付加され、判別済みの語彙表ファイルが作成された。しかし、このファイルから、五十音順語彙表を作成したところ、さらに判別情報を必要とするもの、データのミスなどが見出され、さらに念入りの検査を行った。54年度末までにこの検査は完了せず、55年度も継続することになった。

なお、高校教科書調査の調査システム・調査単位等について、『電子計算機による国語研究X』（報告67）に、次の研究をまとめた。

土屋信一・中野洋「高校教科書用語調査システムとその設計思想」

鶴岡昭夫「高校教科書用語調査の言語単位について」

土屋信一「言語情報処理における語の把握」

3) 語彙の計量的研究のための基礎データの作成と分析

これは、従来の語彙調査の方法・手順・分析項目等进行分析し、語彙の計量的研究の基礎を固めるもので、高校教科書の用語用字調査の分析作業の

基本となるものである。従来の、日本および諸外国の語彙調査を検討し、共通する分析方法で結果を分析する。これにより高校教科書の語彙の特徴を明らかにすることができる。本年度は、前年度に引き続き、語彙の計量的研究に関する文献の収集・ファイル化を進め、機械検索にたえるデータの作成につとめた。また、検索システム IRON を完成させた。これについては、『電子計算機による国語研究X』(報告67)に、次の研究をまとめた。

中野洋「文献検索システム IRON」

なお、『電子計算機による国語研究X』(報告67)所収の「言語計量研究 部内資料文献目録」は、このシステムによって作成されたものである。

このほかにも、研究システムの開発につとめ、マイクロコンピュータ PC-8001を利用する研究に着手した。また、テストデータとして、宮島達夫編『古典対照語い表』を、さん孔入力した。さらに分析的研究として、夏目漱石、森鷗外の用語の分析を行い、『電子計算機による国語研究X』(報告67)に次の研究をまとめた。

鶴岡昭夫「漱石『坊っちゃん』と鷗外『雁』における助詞「へ」と「に」の比較」

E 今後の予定

高校教科書の用語・用字調査は、54年度で完了するに至らず、その一部を明年度に持ち越すことになったが、55年度からは、中学校の社会科・理科教科書を対象とした「教科書の用語および文章表現に関する調査研究」が開始される。したがって、この新規の作業と並行して、高校教科書調査のデータを語彙表にまとめ、分析を加えて、55年度内に、報告書原稿の形にまとめる予定である。また、語彙の計量的研究のための基礎データの作成と分析も、引き続き、行う予定である。

現代表記の多様性の実態と表記意識に 関する調査研究

A 目 的

現代の国語にみられる表記のゆれや誤用について、その実態および表記主体の意識について、三年計画で、調査研究を行う。本年度は、その最終年度にあたる。具体的には、この研究によって、表記のゆれや誤用について、次のような事項を明らかにすることを目的とする。

- ① どのような語に現れ、どのような類型があるか。
- ② それをひきおこす要因に、どのようなものがあるか。
- ③ 一般国民がどのような意見をもっているか。

B 担 当 者

言語計量研究部第二研究室

部長 斎賀秀夫 室長 野村雅昭 研究員 佐竹秀雄 研究補助員 松浦美恵子（旧姓小原）

C 本年度の作業

1. 基礎調査

前年度までに作成した、小型国語辞典の語表記の示し方のゆれを一覧するカード、および、公用文・法令文で表記の問題となる語のカードについて、点検・整備を行い、若干の語例を補充した。また、前年までに入力済みの、現代雑誌九十種の用語調査の台帳に基づく語表記データの校正を行った。

2. 実態調査

前年度までに採集した、雑誌および広報紙のデータの整理を行った。また表記のゆれや誤用の量的な推計を行うため、雑誌の文章を7種の分野にわけ各5万字を目途に、計196件（約35万字）のデータを入力した。7種の分野

とは、小説、評論、実用・解説、ルポルタージュ・報告、座談・インタビュー、随筆、読者投稿をいう。

3. 意識調査

- (1) 前年度に松江市で実施した集合調査の結果を整理し、おおよそ次のような傾向をとらえることができた。

- ・被調査者のうち、教員層と主婦層との間で、かなり多くの設問において回答が対立する。
- ・全般的に、主婦層の方が教員層よりも、漢字表記を選択する割合が高い。
- ・誤表記に対する反応では、教員層の方が主婦層よりも敏感に反応して標準的な表記に訂正する割合が高い。

以上の概容については、下記の口頭発表を行った。

斎賀秀夫「現代人の表記意識」(文化庁主催「西日本地区国語問題研究協議会」一松江市—54.10.5)

- (2) 上記(1)の傾向を統計的に有意なものとしてとらえるために、本年度は同一質問内容による検証調査を実施した。

具体的には、松山市教育委員会、愛媛大学教育学部柳田征司助教授・同吉田裕久講師等の協力を得て、社会人・大学生を対象に、約300人分の調査票を回収することができた。内訳は、次のとおりである。

○松山市立御幸中学校の父兄—約180人

○愛媛大学教育学部の学生—約120人

検証調査の集計は、本年度は一部着手したにとどまった。

D 今後の予定

この研究は、本年度で終了する。未集計のデータについては、次年度以降も、整理・分析を続け、全体の報告を行う予定である。

現代の文字・表記に関する研究

A 目 的

現代の文字・表記の実態を記述するとともに、そこに含まれる諸問題について、種々の観点から、理論的な検討を行う。

B 担 当 者

言語計量研究部第二研究室

室長 野村雅昭 研究員 佐竹秀雄 研究補助員 松浦美恵子（旧姓小原）

C 本年度の作業

1. 基礎資料の整備

昭和41年の朝日・毎日・読売3紙1年分を対象にして実施した、新聞の表記調査のうち、漢字に関する部分は、昭和50年度に報告を行った（『現代新聞の漢字』〈報告56〉）。その後、かな表記語についても整理を進め、語表記台帳を作成する作業を継続してきたが、本年度は、前年度に着手した台帳への転記を引き続き行い、完了した。これで、新聞用語調査の語表記台帳作成についての作業は、すべて終了した。

2. 漢字の基本度の研究

漢字をその属性に基づいて分類するために、現代新聞の漢字調査のデータを用いて、実験的な分析を行った。字体・音訓等の純属性的な要因と、使用率・語表記率などの数値を伴う要因とからなる属性のカテゴリーに、各漢字が示す反応を、多変量解析理論によって処理し、分類モデルを作成した。分析の内容は、下記により発表した。

野村雅昭「漢字の分類」（国語学会春季大会—京都大学—54.5.12）

同「漢字のパターン分類」(報告67『電子計算機による国語研究X』, 55.3)

3. 漢字の機能の研究

漢字によって表記されることを前提とする, 字音造語単位の機能を分析するために, 新聞用語調査のデータにより, 二字漢語の用法の分析に着手した。本年度は, 主として形態論的な観点からの整理を行った。

4. 表記行動の研究

1977年度に実施した文部省科学研究費補助金による研究「現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究」のうち, 表記主体とその表記意識との関連について, 本年度は, まとめの分析を行った。分析の内容は, 下記により発表した。

佐竹秀雄「表記意識の分析」(計量国語学会大会—福井大学—54.9.29)

同「表記行動のモデルと表記意識」(『電子計算機による国語研究X』報告67 55.3)

5. 文字・表記の計量的調査の検討

用字に関する計量的な調査を実施するためには, どのような方法や条件を考慮すべきかを検討するために, 小規模データによる, 各種の観点からの調査にとりかかった。具体的には, 昭和53年1年分の新聞縮刷版により, 文を単位として抽出したサンプル約7,000(約44万字)につき, 単位分割を行い, 品詞・語種等の簡単な情報を付して, パンチ入力すませた。

D 今後の予定

次年度は, 上記の3・5のテーマにつき, 作業を継続するとともに, 4については, 本年度で終了した「現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究」(56ページ)のまとめの作業を引き継いで行う予定である。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使用した各種調査と言語処理に関する、プログラミング技法、システム開発、また言語理解システムのモデル化に対する基礎的研究を行うことを目的とする。これらの研究は、日本語の構文解析、意味分類の自動処理化に対する研究から、さらにそれを発展させることによって、漢字データを含む日本語処理を目的としたデータベースの作成、最適なデータ構造の決定などに応用可能であり、そのほか用語用字調査の効率化、言語分析用基礎資料作成に有効な働きをするものである。

B 担当者

言語計量研究部第三研究室

室長 斎藤秀紀 主任研究官 田中卓史 研究補助員 小高京子
沢村都喜江 米田純子 科野千夏 (54.7.31退職)

C 本年度の研究及び作業

本年度の研究及び作業は、以下のとおりである。

I. 言語処理に関する基礎的研究

電子計算機による言語処理の質を向上し、意味内容にまで立ち入った高次の処理へと進むためには、言語を種々の側面から分析し、その構造を明らかにすることが必要であり、また、言語理解、推論・思考、言語生成などの過程を情報処理の立場から少しずつモデル化していくことが重要である。

本年度は東大大型電子計算機センターのTSS端末装置（グラフィック端末）を用いて、高校教科書の二十分の一サンプリングデータ（約5万字）を対象とした各種の基礎的データ収集用プログラムを作成した。

Ⅱ. 装置の導入及び運用に関する研究

所内における電子計算機利用者の増加と使用目的の多様化に対処するため、電子計算機、高速漢字プリンタ、漢字テレタイプなどの切り替えを行い、移行処理として新機種に対するシステム開発、ソフトウェアの移植、旧コードからJISコードへのファイル変換処理を行った。また、東大の大型電子計算機センターに接続されているTSS端末装置にグラフィックプリンタ、フロッピーディスク装置を増設し、日本語データ分析能力の機能化を図った。

D 今後の予定

昭和54年度に導入された各装置に関するシステム開発と日本語データを効果的に運用管理するための研究を継続して行う。

そのほか、人間と頭脳に関する計算機シミュレーションを通して、人間の言語理解の構造をモデル化する新しい言語処理システムの研究開発についても、引き続き行う予定である。

日本語の対照言語学的研究

「外国語としての日本語」研究の中心的分野の一つである日本語と外国語との比較・対照研究の基礎を築こうとするもので、将来諸外国語との個別的な対照文法を記述することを目的とする。本研究は次の3項目に分けて進められた。

I 対照文法記述のための概観的研究

II 日独語の対照言語学的研究

III 日英対照による発話行為の研究

ここでは、I, II, IIIの順に説明する。

I 対照文法記述のための概観的研究

A 目 的

対照言語学において、対照文法の記述方法を確立し、それに基づいて実際に記述することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室・同第三研究室

室長(取扱) 野元菊雄(54.12.1まで) 主任研究官 高田 誠(54.7.1まで
在ドイツ, 12.1以降第一研究室室長) 研究員 志部昭平 第三研究室室長
(取扱) 野元菊雄 研究員 正保 勇(55.3.1着任)

C 本年度の作業

本研究は、日英・日独・日朝・日ポ・日インドネシアなど具体的・個別的な対照文法を試験的に試みることによって、将来の対照文法記述のための方法論を確立しようとするものであるが、主に「日朝語の対照言語学的研究」

を中心に研究を進めている。前年度に引き続き、この研究の枠組を概観し、基本的な資料を得るために次の作業を進めた。

- ①前年度に引き続き、日朝及び朝日対訳文献資料によって日本語と朝鮮語の文法的形態等の対応用例を収集し、その整理を行った。
- ②同じく対訳文献を利用して、日朝語の「こそあ」語（指示詞）の対応用例を収集した。
- ③第三研究室は10月1日発足したが、研究員 正保 勇の着任が3月になったので、本年度は本格的研究の準備にとどまった。

D 今後の予定

- ①前年度に引き続いて、日朝・朝日対訳文献を利用して用例収集とその整理を行う。
- ②上の調査に基づいて日朝対照文法記述の問題点を抽出し、一部実験的に対照記述を行う。
- ③日本語とインドネシア語との対照研究は次年度から本格的に着手する予定である。

Ⅱ 日独語の対照言語学的研究（国際共同研究）

A 目 的

この研究は、「日独文化協定」の趣旨に基づいて国立国語研究所とドイツ連邦共和国ドイツ語研究所とのあいだでとりかわされた「日独語の対照言語学的研究」に関する共同研究計画についての合意書に則って進められたもので、ドイツ語話者のための日本語教育、及び日本語話者のためのドイツ語教育に対して言語学的な基礎を確立することを目的とする。この研究は日本学術振興会の援助のもとに、昭和52年度より3年計画で進められてきた。

B 担 当 者

この調査に参加したのは、国立国語研究所では、

所長 林 大 日本語教育センター長 野元菊雄

第一研究室 主任研究官 高田 誠(54.7.1までドイツ語研究所出張 54.12.1 室長) 研究員 志部昭平

日本語教育教材開発室 研究員 日向茂男

日本語教育研修室 室長 水谷 修 研究員 田中 望 石井久雄
研究補助員 高野美智子

言語行動部 部長 渡辺友左 第一研究室 研究員 杉戸清樹

第二研究室 室長 江川 清 研究員 米田正人

ドイツ語研究所では、

所長 ゲアハルト・シュティッケル 研究グループ責任者 金子 亨（文
部省派遣研究員 千葉大学教授） 研究員 イェンス・リックマイヤー
55.3.まで国立国語研究所にて研究） 同 クラウス・フォルダビュルベ
ッケ 同 ルドルフ・シュルテペルクム

である。

C 本年度の作業

両研究所は、それぞれの研究成果をたがいに提供するとともに、共同研究の効果的な推進のために研究員を相互に派遣することになっており、国立国語研究所からは 主任研究官 高田 誠が前年度に引き続き昭和54年7月1日までアンハイムのドイツ語研究所に滞在し下記で述べる語彙を中心とした研究を進めるとともに、日本語学者の立場からドイツ語研究所側の研究に参加した。また下記(1)の調査研究のため 主任研究官 高田 誠 研究員 石井久雄 同 杉戸清樹の3名が昭和54年9月7日から同10月18日まで西ドイツその他へ渡った。

またドイツ語研究所からは研究員イェンス・リックマイヤーが前年度に引き続き昭和55年3月31日まで国立国語研究所に滞在し研究を行った。

研究テーマは引き続きドイツ語研究所が主として「シンタックス」「形態論」を担当し、国立国語研究所は「語彙」及び「言語行動様式」の対照研究を主として担当した。

(1) 日独語各話者の言語行動様式の対照的研究

本研究の目的は、日本人とドイツ人の言語行動様式を記述・対照し、このことによって、さまざまな言語行動場面において生じる両言語話者の言語行動様式の差異に基づくコミュニケーション上の障害などの問題を解決しようとするにある。

本年度は3年計画の最終年度にあたり、これまでの調査研究をふまえ、下記の調査研究を行った。

① ドイツ語話者の言語行動様式に関するドイツ国内においての調査

昭和53年度にドイツ国内で行った大量のアンケート調査の集計(②参照)によって得られた資料の補足、検証のため、国立国語研究所研究員3名(高田、石井、杉戸)が渡独し下記の各種調査を行った。

a. 前年度調査の補足、検証調査

前年度アンケート調査で得られた資料のうち、あいさつ等の言語表現につ

いて、そのていねい度の判定、その判定のためのわく組作りのためにドイツ語研究所研究員の協力を受けた。アンケートではそれぞれの質問に対して、微妙に異なる数十種の言語表現が回答として得られた。これらの変種をドイツ語としてどのような軸を立てて段階付け、分類をしていくかについてドイツ語研究所の他のグループの研究員（社会言語学）の協力も得て数回にわたって討論を重ねた。この問題は社会言語学的に大きな問題で、簡単に答えの出るものではなく、ドイツ語研究所の社会言語学者も自らの問題として興味を持ち多くの時間をさいてくれた。この結果、ていねいさの度合をいちおう2ないし3段階に分けて分類することとし、上記研究員を含む数人のドイツ人研究員の言語感覚による分類作業を依頼した。国立国語研究員3名の滞独中には結論が出ず、結局、12月の末に判定結果を録音した録音テープが郵便で届けられた。

b. ドイツ人の行動様式の観察記録調査及び日常生活における言語情報の観察記録調査

街角等一定の場所に一定時間とどまり、通行中の人間の行動を一定の観点から観察記録する調査を行った。二人の人間が歩くときの並び方、腕の位置等につき予め用意した記録用紙に記入する方法をとった。また、交通機関を中心に、車内の掲示、広告等の情報についても観察し、同じく、予め用意した記録用紙に記入する方法で記録した。合計して300枚ほどの記録が得られた。

c. 在独日本人に対するアンケート調査

つぎに②で述べる日本人向けアンケートをドイツ在留の日本人に対して行った。領事館の職員、留学生等小人数ではあるが、国内の日本人とはやや異った角度からの回答が寄せられた。

d. 文献調査、資料収集

前年度に引き続き、各種統計資料を収集した。また雑誌、パンフレット等日本国内では入手の困難な各種資料を収集した。

②調査結果の整理

イ. 昭和53年度に行ったドイツでのアンケート調査結果のうち、年度内に整理しきれなかったものの処理、及び計算機入力のための処理を行い、パンチカード入力を済ませた。集計作業の大まかな部分にわたっては完了した。

ロ. 前述のドイツ人による判定結果については整理は終わっていない。上記イ. の詳細な分析を行う時期に併せて行う予定である。

③日本人に対するアンケート調査

ドイツ人に対するアンケート調査で得られた結果と対照するために、ほぼ同じ内容の質問を日本人に対してもアンケート方式をもって行った。ドイツでの調査場所マンハイム市役所と条件を合わせるために東京都下八王子市役所の職員に対して調査を行い約147部の資料を回収した。快く調査に協力された市当局、職員、また、この八王子市役所調査についてあっせんの労をとられた実践女子大学教授福島邦道氏に感謝の意を表したい。なお、この調査の集計及び今後のことについてはD. を参照されたい。

(2) 日独語の基本的語彙の意味用法に関する対照言語学的研究

この研究は、主に文部省在外研究員として前年度に引き続き昭和54年7月1日までドイツ語研究所に派遣された主任研究官 高田 誠によって進められたもので、前年度に引き続き以下の研究を行った。

④ 日独語の意味用法の対照記述のための総合的モデル作り

日本語の語彙を外国語として記述するための記述モデル作りを目指した。このモデルは、ただ対ドイツ語にとどまらず、各外国語との対照を今後進める際の基礎的なものとするをも目指すもので、意味論的な面、構文論的な面、さらにはプラグマティックの面からの総合的な記述モデルを作りあげようとするものである。

意味情報と構文論的情報を総合的に扱おうとする場合には、どのような文法モデルを用いるかが大きな問題となる。それぞれの文法モデルは少なくとも対照記述に限ってみても長短さまざまあって決めがたい。この研究では動詞結合価理論 (Valenztheorie) を採用した。この理論は、格文法風の深層格を仮定せず、いわゆる表層的な格を動詞の支配関係でとらえている点で対照

記述のためには有力なモデルと考えられるが、一方、大きな問題も内包している。

ドイツ語圏を中心にして最近発展してきた動詞結合価理論では、一般に、動詞の支配する要素を2類に大別する。すなわち必須要素と任意要素である。この中間のものはない。ドイツ語話者のコンピテンスに従って、文が成立するためになくしてはならない要素か、取り去っても文が成立する要素かでふたつに分けるのである。そして、それぞれの動詞の支配する必須要素の数あるいは、その構文的な機能ないし形態に従って動詞の結合価を決定し動詞を分類記述していくわけである。この方式を日本語に当てはめていくとき、このクライテリアが問題となる。日本語動詞においては、ドイツ語における意味での必須要素はいったい存在するかどうかという問題である。日本語の場合コンテキストさえ与えられれば、極端な場合動詞1個でも文は成立する。ドイツ語の結合価理論ではコンテキストは与えないということにはなっているが、ドイツ語と日本語では文の成立に関わるコンテキストの意味が異なるので、この必須か任意かという二元対立的な *Weglassbarkeit* というクライテリアを日本語に単純に当てはめることには問題が残る。

また、現在の *Valenztheorie* では、動詞の支配を受ける各要素については意味論的な条件を付加していない。したがって、

ein Haus bauen

ein Schiff bauen

というふたつの例に現われる動詞は、「Akkusativ のNを支配する」というところまでしか記述されず、そのNがどのようなものであるかは示さない。同じように、

船ヲツクル (ein Schiff bauen)

家ヲタテル (ein Haus bauen)

というとき、ツクルもタテルも同じく、例えば「ヲ格の名詞を支配する」と記述され、その場合の名詞がツクルとタテルでどう違うかは示さない。これでは、船はツクルなのであってタテルではないということの説明、記述がで

きず, bauen との対照がなされたことにはならない。

このような問題意識から対照記述のためのモデル作りを目指したのであるが、現在のところこれらの諸点を解決する文法理論を整理総合するところまでに至っていない。また現在の文法理論にもこのような点、とくに, Weglassbarkeit をめぐる問題について明快な説明を示したものは見当たらない。

②語彙の研究とは異なるが、文部省在外研究員としてドイツ語研究所へ派遣された主任研究官 高田 誠のいまひとつの任務として、ドイツ語研究所分担の研究に参加することがあった。ひとつには、ドイツ語研究所研究員の進める研究に日本語学者として助言し各種資料を提供することで、いまひとつは、そのうちのイ. 敬語法の対照研究 ロ. 文末詞、文末表現の対照研究 ハ. 応答詞、応答表現の対照研究を進めることであった。このうち、前年度に引き続いてイ. の敬語法のうち、敬語の意味論的枠組及び敬語形式の記述を終えた。敬語法の対照の場合、ドイツ語に明らかな形態上の敬語形式が存在しないため、その対照には多くの問題が残る。一般に、二言語間で対照を行う場合、形式が1対1に対応している場合が最も単純で（非常にまれにしかおこらないが）、1対多、多対多がこれにつぎ、複雑ながらも何らかの対照記述は行われよう。またこれまでの対照研究もこのような場合を中心に扱ってきたと言えよう。しかし、1対無、多対無の対応をどう扱うかについてはこれまでの対照言語学からは答が得られず、これからの課題と言わざるを得ない。

D 今後の予定

(1) 言語行動様式の対照研究について

この研究は本年度をもって3年計画は終了するわけであるが、次年度以後も研究を継続する予定である。したがって、研究グループも存続させ研究成果の発表も次年度以後に行う予定である。今後の予定としては、

①ドイツでのアンケート調査及び各種調査の整理及び集計結果の検討。さらに、報告書として盛るべき点の検討を行う。

②日本人に対するアンケート調査をさらに続けて行い、可能な限り多量なデータを得る。さらにそれらの集計整理を逐次行う。

③このテーマに連続するものとして、英語版のアンケート票を作成し、日本国内に滞在する英語話者に対し同様の調査を行い、ドイツ語話者の反応と対比するための資料を得る。

(2) 語彙に関する対照研究について

上記C. で述べたいくつかの問題点をめぐり、対照言語学の方法論の展望を得るべくさらに研究を進める一方、二、三の動詞を中心に動詞結合価理論を基にした動詞の意味記述の総合的モデルを試案として示す予定である。これは、日独のみならず、他の外国語との対照に於ても *Ausgangssprache* としての日本語記述の基礎となるものである。

Ⅲ 日英対照による日本語の発話行為の研究

A 目 的

日本語教育の目標の一つには学習者に日本語の運用能力を身につけさせることがある、このためには、日本語が発話の実場面でいかなる運用の仕組に支配されているかを明確に捉えていることが必要である。本研究は日本語の発話行為 (Speech Acts) を話し手・聞き手に関与する側面に焦点をあて研究し、その結果を英語の場合と対照させ、より普遍的側面と個別的特性を明らかにし、上述の目標の為の基礎資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター

第二研究室 室長 上野田鶴子

C 本年度の経過

本研究は3年継続で進め、以下の手順をふむ計画である。

- (1) 国内国外の文献を通じ、発話行為の理論を検討し、本研究の理論的枠組を設定する。
- (2) 日本における発話行為に関する問題点を概観する。
- (3) 話し手・聞き手に関与する側面を具体的に引き上げ、超分節的要素を含め、解析を行う。
- (4) 日本語について得られた結果を英語の場合と対照し、検討する。
- (5) 発話行為の普遍的側面と個別的特性を抽出する。

参考資料には作例・用例・インフォーマントによる資料を用いる。

本年度は(1)、(2)および(3)の研究を進めた。(3)については、文形式と文音調の発話における役割を明らかにするために、日本語における複文の平叙文について、文構造と文音調の関係を検討した。

D 今後の予定

次年度には、前年度までの研究成果を英語の場合対照し、検討を進める予定である。

日本人と外国人との言語行動様式の 比較対照的研究

A 目 的

本研究の目的は、広く外国人（当面はアメリカ人）の言語行動との比較対照を直接の目的としながら、日本人の言語行動様式の類型——ことばを中心とするコミュニケーション・パターンの体系づくりを目指そうとするものである。

この目的を実現するためには、音韻、文字、文法等言語そのものの構造に関する研究ばかりでなく、言語を実際に使用する際の具体的な言語行動のあり方を素材とすることが不可欠である。具体的な言語行動様式は、あいさつ、依頼、ことわり、弁解、催促、質問等々の行動類型に区別され、それらの類型内におけることばの流れの持つ枠組みとそれに伴う身振り、表情、更に位置関係や時間的要件なども研究対象としてとりあげられなければならない。

B 担 当 者

日本語教育センター

第一研究室 室長 高田 誠 (54.7.1ドイツ出張より帰国, 54.12.1 室長昇任)
研究員 志部昭平

日本語教育研修室 室長 水谷 修 研究員 田中 望 石井久雄

C 本年度の経過

本年度は4年計画の3年次にあたる。前年度に引き続き、資料の収集と整理分析作業を行った。資料源はテレビ放送のドラマ番組を中心とするが、本年度は日本語テレビドラマの資料補充とともに米国で製作されたテレビドラマの第一次文字化作業を行った。この資料はテレビの2か国語放送を録画したもので、ここから同一ドラマの英語、日本語両語の第一次文字化資料を得

た。

非言語行動類型リストアップ作業は基本資料の再検討を終え、分類、体系化の段階に入った。

第二次文字化資料作成は、テレビドラマ60分もの2編について作成作業を行った。作成の際に採った記述方式はいまだ試験的なものなので、決定方式といえるものにするために、補充資料としてとった英語によるドラマの第二次段階の文字化にも着手した。

D 今後の予定

行動類型リストアップ作業ではLLを使用した確認のための実験を経て、最終的な行動類型表を得る予定である。

第二次文字化資料は、本年度に着手した英語によるドラマ資料との比較を通して、少なくとも60分もの2編について最終資料を完成する。

次年度は本研究の特別研究としての最終年度にあたるので、上記の作業により「言語行動類型表」及び事例研究として2種の「テレビドラマにおける談話行動総合資料」をまとめるが、以降はこれらの資料をもとに英語、ドイツ語、フランス語等の資料との比較対照研究を計画している。

日本語教育のための基本的な語彙に 関する比較対照研究

A 目 的

昭和53年度までの「日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究」の成果として得られた、「日本語教育基本語彙第一次集計資料」(2,000語, 6,000語を目安として選ばれた専門家判定の集計結果)について、これに各種の観点から検討を加えて、日本語教育のための学習基本語彙の選定を行うとともに、ここで得られた学習基本語彙について、日本語学習者の母国語である各国語基本語彙との対照言語学的分析を行おうとするものである。

B 目 的

日本語教育センター第一研究室

室長(取扱) 野元菊雄 (54.12.1 まで) 主任研究官 高田 誠 (54.7.1まで
在ドイツ, 12.1以降第一研究室長) 研究員 志部昭平

C 本年度の作業

本年度は、4年計画第2年次に当り、以下の手順で研究を進めた。

1. 第2次基本語彙選定のための参考資料の作成

第1年次に引き続き、専門家判定結果上位2,000語について他の語彙資料との比較等の作業を進め、2,000語を目安とした第2次基本語彙選定のための参考資料を作成した。

この資料は、専門家判定のもとになった『分類語彙表』に以下の情報をマークしたものである。

- a. 「第一次基本語彙集計資料」上位2,000語
- b. a.の項目を除く、同じく上位6,000語
- c. a.の語彙と他の語彙表12種(『年報30』, 62~63 ページ参照)との比較の

結果, a. には無くて, 他の語彙表 4 種以上に共通に表れている語彙 (約 650 語)

2. 第 2 次基本語彙の選定

第 2 次の基本語彙選定は, 上記参考資料に基づきながら, 所内外の 20 人の専門家 (『年報』 30, 64 ページ参照) によって行われた。専門家は, 第一次集計資料上位 2, 000 語のそれぞれについて検討を加え, これに補充すべき語, これから削除すべき語の選定, さらに, その選定上の問題点を抽出した。

なお, 『日本語教育基本語彙第一次集計資料—6, 000 語索引—』(1980. 3. 25) を内部資料として印刷した。

D 今後の方針

1. 本年度の検討結果にもとづく, 2, 000 語を目安とした学習基本語彙の選定, ならびに印刷原稿の作成を行う。
2. 専門家判定結果上位 6, 000 語について, 検討を進めるための参考資料の作成ならびに専門家による選定作業を行う。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について、教授法、教育内容、教材に関する問題点を収集整理し、日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を検討し、日本語教育の内容方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター

第二研究室 室長 上野田鶴子

C 本年度の研究経過

「年少者に対する日本語教育機関——外国人学校等」に委嘱した委員(後記)と日本語教育センターのメンバーによる研究連絡協議会で前年度に検討した、低学年のための初級500語を以下の資料にまとめた。

「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料(1)

日本語教育語彙資料(1)——低学年初級500語——

「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料(2)

日本語教育語彙資料(2)——低学年初級500語—— (五十音順)

本年度も前年度に引き続き、「年少者に対する日本語教育機関——外国人学校等」からの委員と日本語教育センターのメンバーによる研究連絡協議会を開催し、教育の現場に還元できる研究課題として、「年少者(小学校3～5年)の日本語教育における初級50時間のための基本的文型」をとり上げた。以下に対象となる文型を列举する。なお、基本的文型の教育については、関連する語彙および場面についても検討を行った。

「年少者の日本語教育における初級50時間のための基本的文型」

1. コソア は 何／ドンナ
何 は 何／ドンナ
2. 何 は 何が /ドンナ
3. 何 は 何より ドンナ
何のほうが (何より) ドンナ
何 は いちばん ドンナ
4. 何 は 何が デキル
5. 何 に 何が アル／イル
6. 何 が 何スル (ハシル)
7. (どこで) 何を スル
8. だれ と 何スル
9. いつ 何スル
10. 何／ドンナ に }
 ~く } ナル
11. だれ に 何を アゲル／オシエル
だれ に／から 何を モラウ／ナラウ
12. どこ に／まで イク／クル
13. 何シ に イク／クル
14. 何 で イク／クル
15. 何シて イル
16. 何 を クダサイ
何 を 何シて クダサイ
17. (何 を／が) 何シ タイ

年少者に対する日本語教育機関からの委員は以下の方々である。(五十音順)

岩沢佐地子 (国際聖マリア学院 教員)

海野 光子 (カナディアン・アカデミー 部長)

菊地 章 (横浜アメリカン・ハイスクール 教員)

北村 房子 (西町インターナショナル・スクール 主任)
陶山 尚志 (横田ウエスト・エレメンタリースクール 教員)
富松 民子 (サリバンズ・エレメンタリースクール 教員)
中村 正己 (座間ハイスクール 教員)
羽田 満子 (ステラマリス・インターナショナル・スクール 教員)
ヒュー・ブラウン (アメリカン・スクール・イン・ジャパン 科長)
法崎 久子 (横浜インターナショナル・スクール 教員)
細川 廓真 (横浜山手中華学校 教員)
松林 栄子 (広島インターナショナル・スクール 教員)
松本多嘉子 (聖心インターナショナル・スクール 主任)
村田 経和 (東京ドイツ学園 講師)
横井志づ江 (京都国際学校 教員)

以上に加え、日本語教育機関訪問を中心とする実態調査を実施し、資料・文献による情報を補い、現状を確認した。訪問機関は以下の通りである。

琉球大学教養部

沖縄クリスチャンスクール

在日米軍附属 沖縄 久場崎ハイスクール

在日米軍附属 沖縄 牧港エレメンタリースクール

D 今後の予定

引き続き、日本語教育の現場に直接還元できる研究テーマにつき協議し検討を続ける予定である。

日本語教育に関する情報資料の収集・提供

A 目 的

外国語としての日本語教育を有効に行うために、これまでの国内・国外における日本語研究、日本語教育の実態、および日本語教育に関する教科書・副教材・視聴覚教材などの情報資料を収集整理し、今後の研究および教育の参考資料として提供しうるように備えることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター

第二研究室 室長 上野田鶴子

C 本年度の作業

外国語としての日本語教育に関する教科書、副教材、辞書および対照研究に用いられるべき言語研究・外国語教育に関する文献を収集し、整理した。

一方、日本語教育に必要な文献リストを作成するために、過去10年間に学術雑誌等に掲載の論文および関連資料につきカード化を進めた。

また、以下の関連分野の専門家より、国外における日本語教育・日本語研究の実態に関する情報を得た。

Jorden, Eleanor H. (米国 コーネル大学 現代語学部教授)

中田 清一 (米国 プリンストン大学 東アジア学部助教授)

大曾美恵子 (オーストラリア アデレード大学 アジア研究センター講師)

D 今後の予定

文献の収集整理を継続し、訪日中の日本語教育および関連分野の専門家より国外の日本語教育および日本語研究の実態に関する情報を収集し整理する。

日本語教育研修の内容と方法についての 調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育に関して、教員の資格能力の向上を図ること、また教授の効率化をめざすことは、現在大きな社会的要請となっている。それにもかかわらず、この問題の解決に資するような調査研究は、ほとんど行われていない。本研究は、教員研修一般についてそのあり方を追究するとともに、当研究所で実施している研修に対して適切な指針を樹立するため、具体的な研究およびその方法の開発を行うことを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育研修室

室長 水谷 修 研究員 田中 望 石井久雄 研究補助員 高野美智子
事務官 田島正幸

C 本年度の経過

本研究は内容を二分し、

1. 日本語教育の評価および測定に関する研究
2. 研修効率向上に資するための調査研究

とする。

1. 日本語教育の評価および測定に関する研究

教授内容の有効性を把握し、また教材の開発・使用の指針を得るための、教員の資料すなわち研修教材として、パイロット＝プログラムを開発し、昨年度から「プログラム教材」として印刷を始めている。本年度は

表記教育に関わるものとして「カタカナの筆順」（担当 石井久雄）

文法教育に関わるものとして「四段活用と非四段活用」(担当 同)を印刷した。例えば、「カタカナの筆順」の最終部分は、字形に基いた、画Zが画Wの上または左上にあるならば、画Zを画Wよりさきを書く。画Zが始端でないところで画Wの始端に接するならば、画Zを画Wよりさきを書く。画Zが始端で画Wの始端に接して画Wの左方または左下方にあるならば、画Zを画Wよりさきを書く。横画Z、縦画または払画W、点画Vが交わるならば、画Zを画Wよりさきに、画Wを画Vよりさきを書く。画Zが終端で画Wの始端に接して、上記の命題に抵触せずに画Zについて画Wを書くことができるならば、画Zに画Wを続けて書く。画Zが終端で画Wの終端でないところに接するならば、画Zを画Wよりさきを書く。

画Zが画Wの左にあるならば、画Zを画Wよりさきを書く。という、順序づけられた一連の命題から成る。これによれば、五十音順にカタカナを教えている大方の教授方式は、字形および筆順の観点からは、非効率的であることになり、今後の教授内容・教材開発は検討を要することになる。漢字の教授に対する影響も小さくないと思われる。

2. 研修効率向上に資するための研究

研修の需要・供給の実態がほとんど明らかでなく、しかも需要が大きいと予想される地域について、実地調査を行う。前年度の北日本地域に続いて、本年度は南日本地域特に鹿児島・宮崎を調査した。

また、当研究所の研修参加者が国内外の日本語教員の需要にどのように応えているか、追跡調査を行う。本年度は、昭和52・53年度日本語教育長期専門研修修了生32名について、追跡した。概要は次のとおり。

日本語教育従事者	国内	10名
	国外	4名
大学教育従事者		2名

大学院進学者

9名

日本語教育関係者 その他

7名

D 次年度の予定

1. 日本語教育の評価および測定に関する研究

パイロット＝プログラムの開発を音声・表記・文法・語彙教育の領域にわたって続け、「プログラム教材」としての印刷を

音声教育「動詞のアクセント」

表記教育「現代かなづかい」

文法教育「助動詞の相互承接」

語彙教育 「語彙の計量」

のように予定している。この教材については、小さい問題を詳しく扱うという、現在進めている方向の維持とともに、諸問題を一定分量内に集約する方策について、考えたい。また、特に音声教育・表記教育について視聴覚機器の利用が有効であり、その利用方式に見通しがついたので、研修教材の試作を始める。LLおよび授業観察装置の利用方式についても、ルーチン化の見通しがある。

2. 研修効率向上に資するための調査研究

中国四国地域特に広島・岡山・香川の現地調査を予定している。

日本語教育教材開発のための調査研究

A 目 的

既存教科書における語彙、構文について種々の観点から調査・整理して教材、特に視聴覚教材に資することを当面の目的としている。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育教材開発室

センター長 野元菊雄

室長 武田 祈 研究員 日向茂男 文部技官 清田 潤

C 本年度の作業

E・Jorden の “Begining Japanese” と A・Alfonso の “Japanese Language Patterns” をカード化、整理した。

日本語教育映画基礎篇（53年度までのもの）の語彙のカード化を行った。

上記の作業等をもとに、論文「談話における『はい』と『ええ』の機能」を日向茂男が執筆、『研究報告集2』（報告65）に発表した。

以上のほか、日本語教育長期専門研修生有志と共同で、ビデオ教材「おくりもの」を実験制作した。これは「やりもらい」表現の提示を主題とし、スキットに解説を付した25分もののVTR作品である。

D 今後の予定

さらに数種の既存初級教科書から語彙・構文のデータを収集。それらをもとに語彙一覧表、構文類別表を作成する予定である。

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

A 目 的

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学会の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、国語および国語問題に関する情報を収集・整理し、国語研究の基礎的資料を整備する。このために次のことを行う。

1. 刊行図書・雑誌論文等の調査を行い、分類別文献カード目録を作成する。
2. 諸新聞から関係記事を切り抜いて整理・製本し、研究資料を作成する。
3. 『国語年鑑』を編集する。

B 担 当 者

言語変化研究部長 飯豊毅一

文献調査室 研究員 田原圭子 伊藤菊子 研究補助員 中曽根 仁

C 本年度の作業

前年度に引き続き、昭和54年度に刊行された各種文献を調査し、情報を収集・整理した。昭和54年1月から12月までの情報については分類別文献カード目録および「新聞所載国語関係記事切抜集」25冊を作成した。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに『国語年鑑』〈昭和55年版(1980)〉に掲載する。

『国語年鑑』〈昭和54年版(1979)〉は、53年1月から12月までの国語に関する研究成果、関係学会の動向、ことばに関する世論などを主な内容とし、次の各部に分けて編集し、54年8月に刊行した。

第一部展望 「国語学」「話しことば」「国語政策」など18項目。

第二部文献 刊行図書、雑誌論文、新聞記事（主な記事のみ296件）ほか。

第三部雑報 各学会・関係諸団体（72団体）の活動報告ほか。

第四部国語関係者名簿 国内1,642名、国外86名。

第五部資料 その年に告示された公的決定事項（54年版では高等学校学習指導要領、常用漢字表案）など。

索引 （刊行図書、雑誌論文、新聞記事の編著者名）

なお、本年度は、『国語年鑑』昭和29年版から52年版までの「雑誌論文一覧」を編年順にまとめた「国語年鑑掲載文献総目録——雑誌論文篇（7分冊）」の作成を完了した（8月）。

以下、国語および国語問題に関する昭和54年の情報の傾向を知る手がかりとして、採録した文献の冊数（または点数）を項目別に示す。（ ）内は53年の数である。

外国発行の刊行図書・雑誌論文等については、前年までと同じく、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数1,075冊についての分類別カード目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語（学）	53（53）	方言・民俗	117（84）
国語史	55（47）	ことばと機械	4（4）
音声・音韻	9（11）	コミュニケーション	
文字・表記	9（15）	コミュニケーション一般（言語生活）	33（39）
語彙・用語		言語技術（話し方・書き方）	
語彙・用語一般	20（21）		
人名・地名	9（8）		66（68）
文法	12（18）	マス・コミュニケーション	3（10）
文章・文体	6（13）	国語問題	6（3）

国語教育		資料	21 (13)
国語教育一般	15 (11)	史料	10 (13)
学習指導	33 (34)	解題・目録	23 (23)
ことばの指導	0 (0)	年鑑	16 (14)
文字教育	4 (2)	計	819 (761) 冊
語彙・文法教育	1 (1)		
聞く・話す	0 (0)	追補 (53年12月以前刊行分)	
読む・読書指導	15 (5)	国語学その他	18 (3)
書く・作文指導	31 (20)	国語史	49 (31)
文学教育	8 (5)	音声・音韻	1 (2)
古典・漢文教育	2 (0)	文字・表記	2 (4)
特殊教育	6 (7)	語彙・文法	18 (9)
学力調査	2 (0)	文章・文体	2 (2)
国語教科書・教材研究	0 (6)	方言・民俗	27 (20)
言語能力の発達	13 (5)	ことばと機械	6 (0)
外国人に対する日本語教育	29 (21)	コミュニケーション	21 (15)
言語学その他	65 (61)	マス・コミュニケーション	0 (2)
辞典・用語集		国語問題	1 (2)
国語辞典	19 (8)	国語教育	27 (21)
用語辞典・用語集	36 (49)	外国人に対する日本語教育	12 (14)
特殊辞典	43 (44)	言語学その他	17 (27)
索引	25 (25)	辞典・索引・資料	55 (52)
資料		総計	1,075 (965) 冊

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物や雑誌から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編，『LLBA (Language and Language Behavior Abstracts)』，その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，4,042点に達した。（連載物については各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1 一般刊行雑誌, および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数

a 一般刊行雑誌 (学会誌等を含む) ……452 (457) 種

国語・国文・言語ほか	173 (171)	週刊誌・総合誌	1 (1)
方言・民俗	19 (20)	文芸・詩歌・芸能	5 (9)
国語問題	7 (5)	その他 (教育・社会学・心理学 など)	99 (99)
国語教育	23 (22)	臨時に入った雑誌	18 (31)
日本語教育	7 (6)	外国誌	77 (72)
マス・コミ関係	12 (10)		
外国語	11 (11)		

b 大学・研究所等の紀要・報告類……313 (315) 種

2 論文・記事の分類とその点数

国語 (学)		文法上の諸問題 (現代語法)	79 (65)
国語 (学) 一般	379 (218)	史的研究	36 (32)
時評・随筆	77 (130)	敬語法	18 (15)
国語史		文章・文体	
国語史一般	70 (68)	文章・表現一般	66 (69)
訓点資料関係	26 (6)	史的研究	85 (102)
音声・音韻		古典の注釈	
音声・音韻一般	68 (52)	注釈一般	1 (0)
史的研究	24 (36)	上代	13 (10)
アクセント・		中古	10 (13)
イントネーション	11 (17)	中世	11 (11)
文字・表記		近世以降	7 (5)
文字・字体	25 (20)	方言・民俗	
表記	29 (33)	方言一般	51 (36)
語彙・用語		各地の方言	
語彙・用語一般	168 (152)	東部	38 (53)
古語	55 (54)	西部	34 (19)
現代語	15 (25)	九州・沖縄	22 (23)
新語・流行語	2 (13)	民俗	11 (17)
外来語	7 (14)	ことばと機械	
人名・地名	49 (9)	言語情報処理	66 (33)
辞書・索引	69 (48)	研究用機器	7 (9)
文法		コミュニケーション	

コミュニケーション一般	45 (27)
言語生活	130 (142)
言語活動	
言語活動一般	21 (25)
書く・読む	84 (57)
話す・聞く	9 (13)
マス・コミュニケーション	
一般的問題	2 (1)
新聞	10 (5)
放送	33 (52)
広告・宣伝	4 (2)
印刷・出版	5 (2)
国語問題	
国語問題一般	67 (97)
表記法	81 (22)
国語教育	
国語教育一般	155 (153)
国語教育史	19 (14)
学習指導	276 (202)
ことばの指導	40 (143)
文字・表記教育	13 (16)
語彙教育	18 (25)
文法教育	4 (12)
聞く・話す	10 (5)
読む・書く	
読む・書く一般	72 (54)
読解指導	32 (12)
読書指導	42 (34)
作文指導	87 (71)
文学教育	17 (17)
古典・漢文教育	18 (25)
特殊教育	16 (21)
学力評価	15 (30)
国語教科書・教材研究	77 (41)
言語能力の発達	34 (20)
外国人に対する日本語教育	113 (84)

言語 (学)	
言語一般	110 (169)
意味	3 (14)
比較・対照研究	41 (52)
翻訳の問題	20 (17)
外国語研究	18 (16)
外国語教育 (学習)	24 (48)
各国の言語問題 (教育)	17 (18)
言語障害研究	59 (27)
資料	
資料一般	20 (26)
国語資料	18 (26)
翻刻	46 (33)
目録	1 (10)
書評・紹介	
国語学その他	11 (9)
国語史	11 (19)
音声・音韻	6 (5)
文字・表記	2 (6)
語彙・用語	11 (4)
文法	6 (4)
文章・文体	11 (4)
方言・民俗	9 (3)
ことばと機械	0 (0)
コミュニケーション	10 (7)
マス・コミュニケーション	0 (0)
国語問題	0 (3)
国語教育	22 (21)
外国人に対する日本語教育	1 (2)
言語学その他	13 (29)
辞典・用語集・索引	8 (8)
計	3,676 (3,411) 点
追補 (53年12月以前刊行分)	
国語学その他	13 (15)
国語史	8 (16)

音声・音韻	13 (23)	マス・コミュニケーション	6 (0)
文字・表記	5 (18)	国語問題	3 (8)
語彙・用語	34 (73)	国語教育	67 (54)
文法	11 (23)	外国人に対する日本語教育	3 (55)
文章・文体	12 (18)	言語学その他	78 (95)
古典の注釈	9 (10)	資料	5 (9)
方言・民俗	83 (85)	書評・紹介	5 (12)
ことばと機械	0 (2)		
コミュニケーション	11 (29)	総計	4,042 (3,956) 点

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は2,966点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日(夕)刊紙		週刊・その他	
朝 日	467 (436)	日本読書新聞	54 (38)
毎 日	417 (442)	週刊読書人	65 (61)
読 売	417 (448)	図書新聞	48 (44)
東 京	264 (322)	新聞協会報	42 (49)
サンケイ	380 (341)	教育学術新聞	17 (12)
日本経済	242 (270)	その他	72 (55)
北 海 道	280 (296)		
西 日 本	201 (190)	計	2,966 (3,004) 点

2 月別の切り抜き点数

1 月 207 (256)	2 月 250 (259)	3 月 361 (253)
4 月 296 (263)	5 月 267 (221)	6 月 272 (258)
7 月 223 (259)	8 月 190 (197)	9 月 218 (271)
10月 206 (303)	11月 262 (244)	12月 214 (220)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	317 (344)	活字	9 (7)
音声・音韻	11 (17)	語 彙	
文 字		語彙一般	67 (48)
文字・表記	38 (44)	各種用語	39 (24)

新語・流行語・隠語	41 (93)	人名・地名の表記	42 (41)
外国語・外来語	80 (70)	外来語表記	19 (22)
辞書	44 (64)	ローマ字	12 (6)
問題語・命名	37 (65)	国語教育	
人名・地名	54 (57)	国語教育一般	71 (78)
文 法	7 (8)	学習指導の問題	
文 体		学習指導一般	20 (64)
文体・表現	31 (29)	話す(聞く)	5 (3)
方 言		読む(読書指導)	42 (30)
方言一般	71 (67)	書く(作文指導)	14 (18)
方言と標準語	10 (5)	文学・古典教育	4 (3)
各地の方言	19 (22)	特殊教育	25 (17)
言語生活		視聴覚教育	4 (15)
言語生活一般	102 (124)	学力テスト	31 (18)
ことばの問題	51 (63)	幼児教育	20 (34)
ことばづかいの問題	36 (26)	言語学	
敬語の問題	51 (55)	言語学一般	81 (62)
言語活動		外国語一般	148 (117)
言語活動一般	32 (30)	比較研究	49 (68)
話すこと(聞くこと)	45 (65)	翻訳の問題	23 (34)
書くこと(読むこと)	27 (27)	外国語教育	56 (59)
読書	96 (89)	外国語に関する紹介ほか	51 (59)
ことばと機械	44 (41)	日本語の研究と教育	100 (121)
国語問題		マス・コミュニケーション	
国語問題一般	55 (35)	マス・コミ一般	57 (59)
表記の問題		新聞	28 (13)
表記一般	52 (70)	放送	39 (93)
当用漢字など	119 (36)	広告・宣伝	44 (37)
かなづかい	8 (4)	出版	47 (52)
送りがな	1 (5)	書評・紹介ほか	328 (226)
かな書き	8 (4)	計	2,966 (3,004) 点
横書き・縦書き	4 (17)		

切り抜き点数は、前年より38点少なかった。(主な記事は『国語年鑑』<昭和55年版>に掲載)。本年の主な動向を分類項目の点数から示す。

「当用漢字など」の項が前年より多いが、これは、第13期国語審議会が「常

用漢字表案」をまとめ、中間答申を行ったことが、昭和54年3月31日の各紙に報道され、以後、これをめぐる意見や記事が論説欄や投書欄をはじめとコラム欄などにとりあげられたことによる。

「放送」の項が前年より少ないが、前年は特殊事情があったためである（くわしくは『年報30』を参照）。「学習指導一般」や「新語・流行語・隠語」の項も少なくなっているが、前年はそれぞれ関連する連載記事が『毎日新聞』『サンケイ』『北海道新聞』などにあったためである。

〔付所外からの質問について〕

昭和54年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計	月	54年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	55年 1月	2月	3月
1,475		112	124	147	167	113	128	146	134	101	87	103	113

（前年度の質問件数は1,348件であった。）

質問の内容は、例年どおり多方面にわたっていた。件数が多かったものを示すと次のとおりである。用語用字について422件（用語一般185件、用字一般117件、同音類義語59件）、漢字の読み218件、（姓名に関して61件）、字体89件、語の意味50件、表記一般44件、送りがな43件、かなづかい40件、敬語36件などである。

上記の件数のうち、同一（または、同類）の内容について2回以上質問を受けた事項を、かなづかい、送りがな、字体などから例示する。

かなづかい		字体		雪・雪	2
こんにち <u>は</u>	7	吉・吉	6	同音類義語	
～ <u>へ</u>	4	崎・崎	4	～観・～感	6
～ <u>づ</u> つ	2	食・食（偏の場合）	4	付・附	4
い <u>ず</u> み	2	天・天	3	改定・改訂	3
送りがな		塚・塚	3	形・型	3
話 <u>し</u>	4	女・女	2	永・長（～年・	
少 <u>ない</u>	3	富・富	2	末～く）	3
行 <u>う</u>	2	螢・螢	2	初め・始め	3

生む・産む	2	停年・定年	2	～所(～シヨ・～ジョ) 2
付ける・着ける	2	発音にゆれのある語		人力飛行(ジンリキ～・
保障・保証	2	いく・ゆく	3	ジンリョク～) 2
表記にゆれのある語		十～(ジッ～・ジュ		ニホン・ニッポン 2
一生懸命・一所懸命	2	ッ～)	3	
十分・充分	2	～くらい・～ぐらい	2	

また、当用漢字の数について7件、教育漢字について(数を含む)4件、「～か月(年)」の表記7件などが件数の多い事項だった。

なお、研究所および研究所の刊行物についての照会が94件あった。電話による質問のほかには、はがき、封書による質問が28通、直接来所しての質問が8件あった。

以上の件数は、すべて文献調査室で受けた質問で、所員が個人的に受けた質問は含んでいない。

文部省科学研究費補助金による研究

言語運用メカニズムの発達の研究（代表 上野田鶴子）

（特定研究1）

<研究目的>

文を単位とする言語運用メカニズム（知覚のストラテジー）の研究のまとめとして、日本語における文理解の発達の一般的法則を明らかにすることを目的とし、視点に関しては指示詞（コッチ・ソッチ・アッチ）を含む文の理解を、文構造の観点からは複文構造の理解を課題としてとりあげた。

<研究組織>

研究代表者

上野 田鶴子

研究分担者

林部 英雄（東京学芸大学助手）

山田 洋（大妻女子大学講師）

実験協力校・園

中野区立桃園第三小学校 校長 田中 清

三鷹市三鷹双葉幼稚園 園長 臼井みつえ

国立市和光保育園 園長 松岡 きく

<本年度の研究経過>

1. 指示詞を含む文の理解

指示詞の習得の様相を明らかにするために3種の言語心理学的実験により、幼児・児童（3～12歳）146名を対象として研究を行った。実験Ⅰ（3～6歳の保育園児40名を被験児とする）では、被験児が話者となり、実験者が聴者となるように場面を設定し、被験児の前と被験児に対面する実験者の前および両者から5m離れた位置に計3個のバケツを置き、「ボールをこっち（そっち・あっち）のバケツに入れます。」という刺激文を被験児の背後に置いたテープレコーダにより提示した。被験児は実験者に向かって刺激文を復唱した後、

文内容を動作するという手順をとった。実験の結果は、全年齢を通じての平均正反応数および反応群別の分析などを総合すると、コッチが最も早く習得され、その後アッチ、ソッチの習得が進むことを示した。

実験Ⅱ（6～10歳の児童60名を被験児とする）では、実験Ⅰと同様の場面を用いたが、被験児は聴者となり、パンダのぬいぐるみが話者となるように設定した。刺激文は「白い（赤い・黄色い）ボールをこっち（そっち・あっち）のバケツに入れて下さい。」であり、パンダの背後にテープレコーダを置きこれを提示した。誤反応を示した者は少数であるが、コッチの正反応率が最も高く、次いでアッチ、ソッチの順であった。

実験Ⅲ（6～12歳の児童60名を被験児とする）では、被験児は話者・聴者には直接関与せず、傍観者の立場をとった。即ち、机の上に、三角形状に3匹の動物と箱の玩具を置き、三角形の中心にあるリングの玩具を、刺激文を聞かせて、どの箱に入れるか指示させる。刺激文には、「シカさんがゾウさんに言いました。『リングをこっち（そっち・あっち）の箱に入れて下さい。』どの箱に入れるでしょう。」等を用いた。実験Ⅲでは、全体の正反応率は低学年では0に近く、年齢の上昇に従って増加する。誤反応パターンの分析結果を合わせると、実験Ⅰ、Ⅱとは異なりコッチ>ソッチ>アッチの順で習得が進むことが示唆されたが、これは刺激文中に話者と聴者が明示されているためにそれらを指示するコッチ・ソッチの正反応率が高くなり、アッチとソッチの習得順序に逆転が生じたものとみなされる。

以上の実験より、基本的にはコッチ>アッチ>ソッチの順に習得が進むものと考えられ、話者・聴者として言語使用の場面に参加している場合には、他の場合に比べて指示詞の理解が容易であることが明らかになった。指示詞の理解には言語外の情報が強く効くものと考えられるが、このような場面の統制から独立し、文法的知識のみを用いて解釈が可能となる過程が習得の過程であると言えよう。

2. 複文構造の運用メカニズム

複文の運用メカニズムの様相を明らかにするために成人35名（20～33歳）

を被験者とし、記憶再生法による実験的研究を行った。本研究は成人を対象としたが、これは文理解における難易について、言語発達の場合と様相が異なるか否かを捉えようとしたためであり、また、児童らを対象としては困難な文タイプについてもその運用メカニズムを明らかにしたいためであった。

複文には、等位接続、関係節、補文等の構造があるが、本研究に取り上げたのは以下の文構造である。非補構文構造——単文、等位接続文。補文構造（関係節文を含む）——使役文、終始文、往來動詞文、授受動詞文、願望動詞文、分裂文、と補文、の補文、こと補文、中央埋込み関係節、左枝分れ関係節。以上13種の各構造をもつ短文とそれに続く3ケタ+2ケタの加算問題（計39刺激）をテープレコーダで聞かせ、その直後にまず加算問題（筆算させる）の解答をさせ、その後、短文をできる限り正確に口頭で反覆させた。加算問題は文の記憶に対する妨害効果を期待し、挿入したものである。各刺激は7文節（但し補文標識を含む「ことを」等は1文節と数えた）より成り、複文においては深層構造における主節に相当する部分に3文節、埋め込まれた節に4文節を用いた。但し、等位接続文では先行節に5文節、後続節に2文節を用いた。結果を正反応および脱落文節、文節の移動等につき分析をし、以下の点が明らかとなった。補文構造の中には補文に時制をとるもの（分裂文、と補文、こと補文、関係節構文）と時制をとらないものがあるが、時制をとる補文構造に正反応が多く、それ以外の文タイプには少ない。これは時制が言語運用メカニズムにおいて重要な役割を果たしていることを示唆している。また、文法的には複文構造であっても表層において時制をとらない補文構造となるもの（使役文、終止文、往來動詞文、授受動詞文、願望動詞文）は、単文、等位接続文と同様の処理過程を経るものと考えられる。脱落文節は、多くの場合、補文内の「——の」句と副詞句である。これは、脱落し易い文節が、補文内の意味的に主要でない要素であることを示すと共に、言語運用内における「文の基準型」の構造を具体的に示すものと言える。

以上、本年度の成果をこれまでの知見と合わせるならば、言語発達においては、言語の普遍的特性から個別特性へと運用の手掛りを見出し、構造的

には線状より階層へ、また、「視点」については行為者・起点を文法上の主語と同一視する傾向からその他へという発達の法則性が存在することが明らかになった。なお、言語発達に特異な、規則の過剰一般化は、成人の場合と対照的であり、言語発達における文理解の難易は、規則の習得と適用の観点から検討されるべきであろうと思われる。一方、成人における文理解の難易は、処理方略が自由に操作できることを前提とするものである。

談話行動の実験社会言語学的研究（代表 渡辺友左）（特定研究1）

<研究目的>

コミュニケーション行動としての言語行動を解明するためには、音声言語だけではなく、これを補い、また、その代わりをなす非言語的行動との両者の有機的な関連性を明らかにする必要がある。また、言語行動は社会言語学的研究などにより明らかにされているように、行動の生じる場面や地域、さらに行動主体間の社会的・心理的諸条件によって変化するものである。

本研究は、以上の観点から、談話行動の要素・特性・機能などを明らかにし、合わせて、言語行動の類型化、コミュニケーション・パターンの抽出などを行うことを主目的とする。なお、コミュニケーション行動は文化の型と強い関連をもつことが予想されるというところから、当面は東京と大阪の二地域で調査を行い、その比較を試みる。

<担当者>

研究分担者

- 渡辺 友左（言語行動研究部長）
- 江川 清（言語行動研究部第二研究室長）
- 米田 正人（言語行動研究部第二研究室研究員）
- 杉戸 清樹（言語行動研究部第一研究室研究員）
- 堀江よし子（言語行動研究部第二研究室研究補助員）
- 南 不二男（言語体系研究部長）
- 佐藤 亮一（言語変化研究部第一研究室長）

沢木 幹栄 (言語変化研究部第一研究室研究員)
田中 望 (日本語教育センター日本語教育研修室研究員)
日向 茂男 (日本語教育センター日本語教育教材開発室研究員)
浜中 武彦 (金蘭短期大学教授)
吉田弥寿夫 (大阪外国語大学教授)
倉谷 直臣 (大阪外国語大学助教授)
徳川 宗賢 (大阪大学教授)
杉藤美代子 (大阪樟蔭女子大学教授)
芳賀 純 (筑波大学教授)
輝 博元 (大阪府立大学助手)

研究協力者

高田 正治 (言語行動研究部主任研究官)
八村広三郎 (民族学博物館助手)

<本年度の経過>

1. 資料の収集

上記の目的を達成するために、前年度までに得られた資料に加えて、以下の地点で録音・録画資料を得た。

- 1) 大阪・和泉地区——前年度の座談資料の発話者の中から数名を選び、前年度と同様の調査を行った。これは同一話者の状況による言語行動の違いをみるためのものである。調査は昭和54年7月13日～17日に6グループを対象に行った。
- 2) 東京・国立国語研究所——各話者の音声を完全に分離した状態で記録するために当研究所の職員を対象に対話形式での資料を得た。調査は昭和54年12月3日～14日にかけて、延べ10組を対象として行った。

2. 資料の整理

- 1) 文字化作業——1で得られた録音資料の第一次文字化(片かな文節分かち書き)が終了した。
- 2) 1の2)の資料を対象に、サウンドスペクトログラムおよびオシログ

ラムを作成した。

3) 非言語的行動の記述——1で得られた資料の一部について、非言語的行動を観察記録し、音声言語形式との対応づけを行った。

4) 総合テキストの作成——上記の作業をもとに、言語形式と非言語的行動を対照させたテキストを作成し、資料集として刊行した。

<今までに得た分析結果の概要>

1. 座談資料の分析結果

1) 談話の構造を把握するために、談話全体の「始発」, 「終結」, 話題のまとまり相互の「転換」, 話題のまとまりの中での発話単位の「承前」の四つの観点のうち, 「承前」の類型を記述した。反復(オウム返し, 引用, 同形), 類化(拡大一般化, 詳細具体化, 類・別項化, 対語化, 関連語化), 指示詞化(指示詞化, あいづち内化), 潜在化(省略, 文成分ひきとり, あいづち内化), 顕在化(復活)の5類14種の類型を一部の談話資料から抽出し, その具体的な現れを記述した。(杉戸1980)

2) 談話行動におけるジェスチャの現れ方についての定量的分析を行った。その結果, 感情や態度などの表出的行動が全体の約7割を占めることがわかった。そのうち, うなずきの行動が大部分を占めている。リズムをとるような動作がこれについて多い。(江川1980)

3) 談話資料を収集した地点のうち, 大阪船場地区(道修町)で音声的側面の臨地調査を実施した。結果は音節表(具体的な語例つき)にまとめた。母音オ, ウの円唇性, チ, ジ, ツ, ズの破擦性がともに高いというようなインフォマントの特徴も把握された。調査は規範的な発音を対象としたが, これは, 実際の談話の中での発音との差異を記述し, 談話分析の基礎的な資料とすることを目標としているからである。(輝1980)

2. 対話資料の分析結果

1) 本資料のような雑談的対話場面では, 文の切れ目にポーズが入らない場合もあることや, 2~3文がポーズなしに発話される場合もあることが明らかになった。(米田1980)

- 2) あいづち的な「シー」の長さでイントネーションに着目して分析した結果、上昇型・平板型・下降型・下降くりかえし型の四つの類型を得た。下降型が最も多く、全体の44%，平板型23%，下降くりかえし型21%，上昇型12%という内訳であった。(米田1980)

<発表資料>

南不二男・江川清・米田正人・杉戸清樹 「総合的談話行動テキストとその分析法」、『特定「言語」研究発表会論文集』，1979.10

南不二男 「談話行動のモデル」，渡辺班内資料，1980.2

杉戸清樹 「談話における話材の承前類型」，渡辺班内資料，1980.2

江川 清 「談話行動における Gesture の現れ方について」，渡辺班内資料，1980.2

輝 博元 「大阪船場・道修町方言の音声資料」，渡辺班内資料，1980.2

田中 望 「談話の分類」，日本語教育学会研究例会発表資料，1980.2

米田正人 「談話行動の分析——とくに、ポーズ・あいづち等を中心に」，『国立国語研究所研究発表会資料』，1980.3

渡辺班 『談話行動の総合テキスト——東京・下町・資料(1)——』，1980.3 (非売品)

南不二男・江川清・米田正人・杉戸清樹 「談話行動の総合テキスト」，『研究報告集2』(報告65)，1980.3

江川 清 「談話行動における言語とジェスチャーについて」，第1回東西手話学会発表資料，1980.4

日本語教育のための言語能力の測定 (代表 野元菊雄) (特定研究2)

<研究目的>

外国人に日本語を効果的に習得させるには、習得すべき日本語の言語能力について、その到達すべき目標を明らかにし、客観的な基準を設定することが重要な課題である。

しかるに従来、言語能力の一方の面である書きことばを主とした言語構造の面については研究が重ねられてきたが、話しことば、言語行動などの実際の言語運用面についての研究はきわめて不十分だったといわざるを得ない。

しかし、これをすべておおうような研究をすることは当面時間および費用

の点で不可能である。そこで、本研究では、話しことばの実態を把握することを当面の目的とする。この把握なくしては、能力測定の客観的な基準設定は不可能であろう。

この把握のため、本研究では、

1. 留学生などの日本語学習者の多くが日本の社会で接すると考えられる、日本人の知識階層を中心として、そのなまの言語行動のすべてを記録・録音し、さらに発話場面やコミュニケーションネットワークなどの情報を付加し、これに文型論的分析・社会言語学的分析等を加えて基本的資料を得る。
2. 1. で得られた資料に基づいて、さらに言語教育の立場から分析を加え日本語学習者に学習到達目標として求められる言語能力を明示し、客観的な能力測定の基準を立てる。

ことを目標とする。

<研究担当者>

本研究の担当者と、その担当分野は次のとおりである。

代表者

野元 菊雄 (日本語教育センター長) 一総括, 表現意図, 文の長さ

分担者

水谷 修 (日本語教育センター, 日本語教育研修室長) 一音韻

志部 昭平 (" 第1研究室研究員) 一語彙

日向 茂男 (" 教材開発室研究員) 一場面

田中 望 (" 研修室研究員) 一談話分析

石井 久雄 (" ") 一構文

真田 信治 (言語変化研究部, 第1研究室研究員) 一語彙

沢木 幹栄 (" ") 一音韻

杉戸 清樹 (言語行動研究部, 第1研究室研究員) 一場面

大坪 一夫 (名古屋大学, 総合言語センター助教授) 一音韻

<研究経過>

本年度は、昭和52～53年度に得られた資料の集計・分析と報告作成が主な仕事であった。しかし、すべての資料の集計が完了したわけではない。以下今までに得た結果の一部を述べよう。

1. 表現意図

まず、公的場面と私的場面とでは、断定表現はやや公的場面の方が多いようであるが決定的な差ではない。応答表現の未分化的なものの差が見られて、私的場面に多い。私的場面の方がより話しことば的性格が現われたのであろう。

講義の入っているテープとそうでないテープ、また、講義のうちでも外国人向けのものと日本人向けのものがある。

外国人向けの講義と日本人向けの講義とで違う点はいくつかある。まず、繰り返しが多いということ、また確認要求の表現が多いということ、これに応じて応答表現も多いということが、外国人向けの講義ではいえる。

講義を合計して講義以外とを比べると、講義の方が判断表現が多いことは大きな特色である。つまり、講義ははっきり確定したものを語るものだからであろう。判断未定の表現や要求表現、したがって応答表現は講義以外の方が多い。

男・女の差は、今のところテープだけの集計だけをしているので、はっきり出ていない。これからは話者別の集計をすべきである。繰り返しや肯否要求表現が女に多いのではないかとと思われる。

『話しことばの文型(1)——対話資料による研究——』(報告18, 昭和35年)と比較すると、判断既定の表現は、われわれの結果の方が多いようであるが、逆に、判定要求の表現はわれわれの方が非常に少ない。また、命令的表現はわれわれの方が多く、応答表現はわれわれの方がずっと少ない。これらは、われわれの調査が(幾分か)講義のような独話的なものが入っているからであろう。

話しことばを文字化したものとして、戯曲のせりふの部分、映画のシナリオの話しことばの部分、小説の人間の話しことばの部分などがある。時間の都合上、

各一つについて調べてみた。

資料が少ないためはっきりできない面もあるが、断定表現が少なくともこれらの比較資料では多いようである。これは、日常生活よりは複雑な、ある波風のある事態をも、ある程度は会話で示さなければならないからであろう。

「はい」とか「いいえ」とかいう簡単な応答詞を主とした応答表現がわれわれの資料と比べて比較資料は非常に少ないことが注目される。芝居や映画であれば、うなづいたりなどの動作でも示すことができるであろう。小説では地の文で示すことができる。しかし小説の場合、すべて地の文に譲れないので少し多くなっている。

このように、ここで比較資料として考えた文芸的なものは、今まで文字化という苦勞をしないで簡単に得られるため、話しことばの資料として使われることがよくあったが、話しことばそのものを写していないし、したがって違ったものであることも忘れてはならない。

表現意図を分類するときは、言語形式を手掛りとしているが、そのほかに真の表現意図というものがあることが考えられる。例えば「この部屋は暑い」という判断既定の事実の叙述表現が、実は「窓を開ける」という命令的表現を志向したものである、というようなことがある。

これは、真の表現意図をどう認めるかには個人差があるので、ここでは担当者の感じたものと語形によって決めた今までの意味での表現意図の差の見られたものを集計すると、この全体の文の11.3%の文でこれがあると認定された。

2. 文の長さ

話しことばにおける1文の長さは、今までの調査によると3文節内外である。われわれの調査の結果では、3.44文節となっていて、これらとそれほど大きくは変わっていない。

公的場面と私的場面との差でいうと、前者が3.78文節、後者が2.81文節であり、差が認められる。

日本人向けの講義では7.75文節、外国人向けの講義では4.17文節、講義全

体としては、6.47文節となり、講義外の資料が3.14文節であるのに比べると倍以上の長さである。日本人向けの講義でも、今までの研究に比べるとやや短い、このわれわれの集計は講義を含んだテープ全体での集計であって、その中には講義でないものも含んでいるからである。

戯曲、シナリオ、小説などの比較資料で一番われわれのものと違っているのは、1文節文と2文節文の構成である。すなわち、比較資料では2文節文の方が多いのであるが、われわれの資料では1文節文の方が多い。このことからしても、話しことばの代替資料として、これらの文芸資料を使うことが危険であることがわかる。

3. 音 韻

実際の言語生活の中で出現した音声的事実を調査したものは、今まで見るべきものがない。この研究では、外国人日本語学習者にとって、日本語の音声的事実の中で何が学習上欠かすことができないかを、実際の発語の中から見つけ出していこうとするものである。

資料としたのは、一つのテープの文字化資料のうち、3分の2、すなわち約40分程度のもので、話者は日本語教師である。得たモーラ数は約6,000である。この資料の2モーラ連続と3モーラ連続の出現頻度を表にした。2モーラ連続の方は内部資料として印刷した。

この資料によると、最も多く使用されるモーラは引き音節であり、単独母音はウを除いてみな使用度が高い。使われたモーラは、高い順に次のとおりである。

ー651, イ482, カ354, ン312, ト273, ス250, ノ249, タ221, デ209, ワ192, コ186, ア176, マ168, ナ161, シ156, ネ154, ニ143, ル139, テ136, オ128, ク128, ツ117, エ114, モ113, ガ113, ソ108, ッ102, ハ98, バ98, レ97, ダ94, ド88, ュ86, セ80, ラ77, リ77, ケ75, キ71, サ68, チ67, ウ64, ヨ56, ミ51, シ_≡51, ホ41, ジャ40, ヒ38, ジ38, ギ34, フ26, メ22, ジ_≡21, シ_≡19, ロ17, ゴ16, ヤ14, ジ_≡11, ベ10, ゲ9, ズ9, キ_≡9, リ_≡9, グ8, ゾ8, ブ8, パ8, キ_≡7, チ_≡7, ム6, ボ4, キ_≡4, ザ3, ゼ3, ビ3, シャ3, ヘ2, ウ_≡2, ヌ1, ティ1, リ_≡1, ギ_≡1

1 回も出てこなかったモーラは、ピ、プ、ペ、ポの P 音と、チャ、チュ、ニャ、ニュ、ヒャ、ヒュ、ヒョ、ミャ、ミユ、ミョ、リュ、ギャ、ギユ、ビャ、ビュ、ビョ、ピャ、ピュ、ピョなどの拗音類であった。これらも、ニャ、ヒュ、ミャ、ビュ、ピュなどを除けばこれらを使った単語を容易に思いつくのであって、また、外来語・擬声語・擬態語を含めれば使われることは確実なものばかりであるから、教えなくてもいいと思われるものは一つもないことになる。

モーラ連続のうち、母音（単独母音でなくてもいい）＋ン＋単独母音となる連続は、計22ある。うち4を除くとすべて、最後の母音はオである。これは、ンが語の最後にくることが多く、かつ格助詞のオが次にくることが多いことによるものである。このン＋オをはっきりンオとして発音することは外国人にとって必ずしもやさしくはないが、これを完全に習得することがきわめて大切であることを示すものである。

4. 構文——特に文の完結性

われわれの得た資料の「文」が完結性・整合性を持っているかどうかを調べてみた。前者は陳述機能によるもので、後者は叙述機能によるものであるが、詳しい定義は別に譲る。以下実例を挙げる。

大学学部における音声学の講義で、服部四郎『音声学』（岩波全書）をテキストとして、担当教官Aが注釈を加えている。この教官Aのことば。

文総数84	完結文	59	整合文	49	「です」を末部に持つ文	40
					「ます」を末部に持つ文	5
					「です」「ます」を末部に持たない文	4
			非整合文	10	名詞等を末尾とする文	4
					間投詞等によるもの	6
	非完結文	6				
	末尾不明瞭	19				

国立国語研究所の某研究室における研究員Aと研究員Bの会話では次のようになっている。

まず、研究員A。

文総数96	完結文	79	整合文	63	「です」を末部に持つ文34
					「ます」末部に持つ文25
					「です」「ます」を末部に持たない文 4
			非整合文16		名詞等を末尾とする文13
					間投詞等によるもの 3
	非完結文	14			
	末尾不明瞭	3			

次に研究員B。

文総数139	完結文	113	整合文	93	「です」を末部に持つ文74
					「ます」を末部に持つ文12
					「だ」を末部に持つ文 2
					上記のものを末部に持たない文 5
			非整合文20		名詞等を末尾とする文 4
					間投詞等によるもの16
	非完結文	15			
	末尾不明瞭	11			

以上をまとめてパーセンテージで示すと次のようになる。

	完結文の割合	完結文のうち整合文の割合	その全体への割合
教官 A	70.2	83.1	58.3
研究員 A	82.3	79.7	65.6
研究員 B	81.3	82.3	66.9

書きことばでは文の完結性・整合性はもっと高いものと思われるが、話しことばではこの程度である。

教官Aの上の文でいうと、「で」で始まる文が26 (31.0%) に及んでいる。他の「で」でない語で始まる文55 (65.5%), 初頭不明瞭 3 (3.5%) であり、「で」を文頭の、したがってまた前文の終了のインデックスとすることも効果的であるように思われる。

5. 語彙

ここでは7人分、計42時間のすべての発話にあらわれた語彙を調べた。すなわち、調査者自身の言語行動におけるすべての発話を、その言語行動場面において、それとかかわるすべての話手(相手)のすべての発話を対象とした。

調査単位の切り方は原則的に、国立国語研究所で行った「現代雑誌九十種の用語・用字」調査のいわゆる「 β 単位」を基礎として、これに多少の修正を加えたものを使った。

この調査で得られた語彙全体の延べ語数(累積使用度数)は、聴取不能のもの、および意味不明の音連続を除いて、66,329語であり、その異なり総数は、5,341語であった。

場面を、公的場面、私的場面、その他の場面(外出先など)の三つに分け10度以上あらわれる語について、比較してみると、次の表ようになる。表中aの欄が度数10以上の語の数であるが、一番下の「全体」のすなわち465のところだけは度数20以上の語数である。したがって、その $a/b \times 100$ の8.7は、全異なり語数に対する20度以上の語の割合である。

	異 な り			延 べ		
	使用度数 10以上(a)	全数(b)	$a/b \times 100$	使用度数 10以上(A)	全数(B)	$A/B \times 100$
公 約 場 面	607	3,635	16.7	37,129	45,132	82.3
私 的 場 面	245	2,552	9.6	9,327	14,282	65.3
その他の場 面	135	1,292	10.4	4,526	6,915	65.4
計	465	5,341	8.7	49,961	66,329	75.3

公的場面では、基礎的な語彙のウェートが大きいことを示している。

全体の語彙で、もっとも使用度数の高い語上位20語は次のとおり。

1いう、2うん[感]、3する、4いる、5ない、6ええ[感]、7ある、8これ[指]、9そう[感]、10よい/いい、11はい[感]、12あの[感]、13こと、14なん/なん、15ああ(っ)[感]、16-さま/-さん、17で[接]、18お-[接頭]、19その[指]、20-[数]

応答詞・間投詞の類が非常に多いのは話しことばの特色である。接続詞の

「で」が多く出るのは、上に述べた教官Aの個人的なクセというよりもむしろ話しことばに特徴的なものということができよう。

語種の構成について全体の様子は次のとおりである。国立国語研究所の語彙調査での「雑誌九十種」の結果を比較のためあげる。()内は%。

		和語	漢語	外来語	混種語	計	固有名詞	総計
異 な り	われわれの調査	2,165 (46.9)	1,850 (40.0)	465 (10.1)	136 (3.0)	4,617 (100.0)	724 (13.6)	5,341 (100.0)
	雑誌九十種	(36.7)	(47.5)	(9.8)	(6.0)	(100.0)		
延 べ	われわれの調査	45,973 (71.8)	15,087 (23.6)	2,078 (3.2)	879 (1.4)	64,023 (100.0)	2,306 (3.5)	66,329 (100.0)
	雑誌九十種	(53.9)	(41.3)	(2.9)	(1.9)	(100.0)		

場面別で見ると、公的場面がもっとも漢語的である。私的場面などに和語が多いことは、これらの方がより話しことば的ということの反映かと思われる。しかし、公的場面も、「雑誌九十種」に比べるとずっと和語が多くなっている。

品詞の構成について上位の度数10以上の語の様子は次のとおりである。品詞を、体(名詞とその類)、用(動詞)、相(形容詞・形容動詞・副詞とその類)、および、接続詞・感動詞とその類、の四つに分ける。

		体	用	相	接続詞・感動詞	計
異 な り	われわれの調査	233 (49.3)	81 (17.1)	93 (19.7)	66 (13.9)	473 (100.4)
	雑誌九十種	760 (63.2)	227 (18.9)	183 (15.2)	33 (2.7)	1,203 (100.0)

表示はしなかったが、公的場面は体の類がやや多い。書きことばに比べて用の類に対する体の類の比率が小さい。また、非常に特徴的なこととしては書きことばでは非常に低い比率しか占めていない感動詞・接続詞の類が、大きな比率を占めて、話しことば独得の様相を示している。

固有名詞は、先に示したように、異なりの総語数の13.5%であり、この数はかなり大きいといえるのであるが、延べでは総語数の3.5%でそう多くない。すなわち、個々の語の使用度数は低いのである。

固有名詞をその異なりで分野別に分けると次のようになる。

人名471 (65.1%), 地名171 (23.7%), 学校名・会社名など組織名49 (6.8%), 商品名・書名16 (2.2%), その他 (民族名・動物名など) 17 (2.2%)

人名は総計では、外国人名19.9%, 日本人名 (姓) 55.1%, 日本人名 (名まえ) 25.0%となっている。場面別では、外国人名がもっとも多く現われるのは公的場面であり、ついで私的場面、その他の場面の順に少なくなっている。日本人名 (名まえ) は、公的場面より、私的場面の方が多く現われている。

6. 場面について

集計に使った14人分の録音資料は、各調査者自身による場面の認定では合計 235 場面となっている。

この 235 場面を、相手 (人数) という点からまとめると次のようになる。

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	不明	計
実数	16	100	31	24	19	15	4	3	2	4	2	—	1	1	13	235
%	6.8	42.6	13.2	10.2	8.1	6.4	1.7	1.3	0.9	1.7	0.9	—	0.4	0.4	5.5	100.0
不明を除いた%	7.2	45.0	14.0	10.8	8.6	6.8	1.8	1.4	0.9	1.8	0.9	—	0.4	0.4	—	100.0

このうち、講義のような場面、電話のように相手が現前しない場面、テレビなどのマス・コミ、その他のアナウンスに接している場面を除くと、この数は次のようになる。

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	不明	計
定数	14	84	29	22	16	13	3	3	2	2	1	—	1	—	6	196
%	7.1	42.9	14.8	11.2	8.2	6.6	1.5	1.5	1.0	1.0	0.5	—	0.5	—	3.1	100.0
不明を除いた%	7.4	44.2	15.3	11.6	8.4	6.8	1.6	1.6	1.0	1.0	0.5	—	0.5	—	—	100.0

場面の性質としては、235場面は、公的場面（大学・研究所）138(58.7%)、私的場面（自宅）40(17.0%)、その他の場面（外出先）57(24.3%)に分けうる。この外出先の内訳は、各種学校6、アルバイト先2、公共施設3、店9、旅先4、路上8、駅8、車内17である。

次に、東京の調査者で資料の完備している8人（場面数では137）についてさらに細かい分割を会話内容からしていくと1307の単位が得られた。これを他の要因も加えてまたまとめていくと、278の場面単位にまとまった。以下この278について分析してみる。

まず、話題の出現度数では次のようである。

	(1) 日常・身 辺・家庭	(2) 趣味・娛 楽	(3) 世間・時 事	(4) 事務・用 事	(5) 個人・う わさ	(6) きまり文 句	(7) 思い出 話	(8) 講義内 容	(9) 取マ ス・メ ディア 聴	(10) その他・不 明	計
定数	70	5	3	144	6	17	—	13	9	11	278
%	25.1	1.8	1.1	51.8	2.2	6.1	—	4.7	3.2	4.0	100.0

「事務・用事」は調査日が平日（含土曜）の朝8時から夜8時までであることから予想はされたが、大いに特徴的である。これは、国立国語研究所の松江市におけるある家庭の主婦を中心とした日常生活の24時間調査の結果とは大変違っている。調査の単位は違うが、松江の調査では、談話数で全体の1.3%、文数で全体の1.8%が「事務・用事」であったに過ぎない。

機能の点からまとめてみると次のようになる。

		(1) ひとり	(2) 挨拶	(3) し・用 せ談	(4) おべ りや	(5) 遊び	(6) 教指 え図答 ・	(7) 問 かん か	(8) 思 考	(9) 朗 読	(10) 講受 義講 ・	(11) マメ スデ ・イ 取	(12) そ・ の 不 他 明	計
場 面	実数	12	15	113	74	—	32	—	5	1	13	9	4	278
	%	4.3	5.4	40.6	26.6	—	11.5	—	1.8	0.4	4.7	3.2	1.4	100.0
会 話 内 容	実数	45	103	429	417	3	211	1	10	6	32	19	31	1307
	%	3.4	7.9	32.8	31.9	0.2	16.1	0.1	0.8	0.5	2.4	1.5	2.4	100.0

ここでは「しらせ・用談」というのが多い。これは「話し手から相手に知的情報を中立的に伝える機能」である。これと同様の知的情報の伝達の機能に、「相手を話し手の意志に従わせようとする機能」が加わった「教え・指図・問答」、および狭義の知的情報を教え、学ぶという機能の「講義・受講」の二つを合わせてみると、何らかの情報を伝えること自体を基本的な機能とする会話が、2種類の単位とも5割以上を占めることになる。

一方「おしゃべり」は比較的少ない。これら「何らかのことがらに関する伝達を行ってはいるが、目的はそれにあるのではなく、話すこと自身が目的、または話を続けることによって人と人との間の何らかの関係を維持する」という機能であり、内容伝達を重視すべき前三者とは対照的なものである。「遊び」「マス・メディア聴取」も、行動自身が目的とする機能の性格は「おしゃべり」と同じである。

国立国語研究所の松江市における調査を比較してみると、松江市では「しらせ・用談」に当たるものが、談話数で29.1%、文数で24.8%であったのに対して、「おしゃべり」が談話数で30.1%、文数で63.0%であって、特に「おしゃべり」の文数が多くなっている。この違いは本調査の資料の特色を示すものと思われる。本資料はしたがって、一般日本人主婦の家庭生活におけることばとは相当違ったものを扱っていることになる。しかし、本調査の目的としている外国人の日本語能力、特に留学生の日本語能力測定という立場からいうならば、おそらく彼らの日本語運用能力は、知的情報の伝達そのものを目的とした会話能力を強く要求することになるであろうから、本調査の結果はこの点でも有効であるはずである。

次に談話種類によって出現度数とそのパーセントを出してみよう。

「放送聴取」というのは、駅、交通機関の中、街頭などの案内放送についてである。一人1日平均1.5回であり、やや少ないといえるが、これは、積極的に聞く姿勢になかったためと思われる。

以上のもののうち、機能について、それらがどのような順で継起するかの分析も行ったが、ここでは省略する。

		(1) 業務・ 用談	(2) 連絡	(1)+(2)	(3) 雑談	(4) 放送 聴取	(5) 挨拶 だけ	(6) マイ ス・ア 聴メ 取デ	(7) その 他・不	計
場	実数	79	89	168	72	7	15	9	7	278
	%	28.4	32.0	60.4	26.0	2.5	5.4	3.2	2.5	100.0
会話内容	実数	425	288	713	432	12	100	24	26	1,307
	%	32.5	22.0	54.5	33.1	0.9	7.7	1.8	2.0	100.0

7. 談話分析

言語教育では今まで、「文」のレベルでの学習に力を注いできた。「文型」教育が主張され、個々の文に分解してしまい、その意味・用法を教授し、また学習するということをしてきた。

しかし、その結果、学習者の多くは共通した欠点を持つに至った。すなわち、個々の文はうまく使えても、全体としては何をいっているのかわからない、ということである。これを「談話構成能力がない」という。

では、この「談話構成能力」をつけてやるのはどうしたらいいか。まず真の「談話」がどのように構成されているかを知らなければならない。ところが現在まで、特に日本語に関して、この点についての依るべき先行研究が見当たらない。そしてこの研究では、外国における、特に談話型分析そのものではないが、「談話分析」を目指している研究を参考としながら分析のワク組みを考えることとした。われわれの目的にしたがって、ある言語形式との関連をとらえながら機能分析をすることを目指すとするれば、ある文が先行する文あるいは文連続と結びついていることを保証する要素、いわゆる coherence 要素の分析は不可欠のものと思われる。

これまでの coherence 分析は一般に「前提」の分析を行うことと考えてよい。この「前提」は通常「想定」「確認」「導入」のどれかの機能を担う言語形式として談話の中にあらわれる。「想定」とは、話し手・聞き手が当然知っているべきものと考えられる知識が談話の中にあらわれる場合、「確認」は、聞き手が知っているか予測されるか、知っているかどうかを調べる必要

のある知識，「導入」は，聞き手が知らないと予測される知識が談話の中にあらわれる場合で，このときはおのおの特殊な言語形式を必要とする。

「前提」は，大きく知識前提と知覚前提とに分けうる。前者は次のように分かれる。

I 一般的前提

- 1 百科事典的知識
- 2 言語知識
- 3 社会規範的知識
- 4 関係定位に関する知識

II 特殊前提

- 1 題材についての知識
- 2 動機についての知識
- 3 意向についての知識
- 4 利害についての知識
- 5 役割についての知識
- 6 役割期待についての知識
- 7 情緒，感情についての知識
- 8 先行する発話についての知識

このIIは，談話の中でコミュニケーションが進行していくにつれて変化する知識であり，いわゆる情報伝達を行う部分である。

知覚前提は次のように下位分類される。

- A 話し手認知
- B 第三者・物認知
- C 話し手行為（行動様式）認知
- D 第三者行為（行動様式）認知
- E 言語形式認知
- F 相手の知覚空間の確認

これらは，いわゆる物理的・時間的な空位に関する前提であって，談話の

途中で変化しうる。状況的コンテキストのうち、その談話の中で効いているものとそうでないものが常に変化している。そのため談話の参加者はFによって常にその調整を行う。

以上の一つの談話の coherence を保証している前提の総体として仮設したワク組みである。今後はこのワク組みを談話資料を使って実際に分析して改良しつつ談話型を抽出していく作業に入ることになる。

8. 調査と外国人の日本語能力の測定

この研究によっては、学習者の現有日本語能力の測定法を追究する前提として、日本語能力そのものの内容を明らかにすることから出発した。これは多少遠まわりをしている、という感じを与えるかと思われる。

しかし、本調査の結果として、現存する日本語教育界の能力測定方法、少なくとも内容に関して、客観的な数値をもって、測定すべき内容と尺度設定の指針についてかなりの項の指標を与えることができたと考える。もちろん、主として時間の制約上ではあるが、予期した成果の得られなかった事からも少なくはない。けれども、多くの項目について、今後ここで得られた資料を土台として、分析作業、検証研究を続けることにより、より多くの日本語の話しことば能力に関する情報を提供できるであろう。

児童の概念形成過程における言語の役割と言語教育の効果

(代表 村石昭三) (特定研究2)

<研究目的>

言語使用や語彙理解テストを通して、幼児・児童の概念形成過程を実験調査的に明らかにすることをめざす。そのために、被験児として、(1)3～10歳児クラスの東京在住の児童約530名。(2)53年度調査の補充として甌島(鹿児島)在住の児童約60名。(3)視聴覚に障害をもつ児童約100名を対象にして、類概念を表す範疇語及び、各種次元に関する性状語 (dimensional terms) の意味構造を絵図を含むテスト形式で明らかにする。

<調査の組織>

担当者

林 大 (国立国語研究所長)
村石 昭三 (言語教育研究部長)
大久保 愛 (言語教育研究部第一研究室長)
岩田 純一 (" 室員)
島村 直己 (")
斎藤 秀紀 (言語計量研究部第三研究室長)
佐藤 泰正 (筑波大学教授)

調査園・調査校

東京都世田谷区立駒沢保育園	園長	白井 恵子
" 世田谷区立上北沢保育園	"	本吉 圓子
" 北区立豊島北保育園	"	是永 睦子
" 北区立豊島東保育園	"	曾根 栄子
" 葛飾区・明昭第二幼稚園	"	関口 素臣
" 江東区・亀戸幼稚園	"	山内 昭道
" 北区立としま幼稚園	"	滝沢豪一郎
" 荒川区・道灌山幼稚園	"	高橋 系吾
" 江東区・月かげ幼稚園	"	中西 雄俊
" 台東区立済美幼稚園	"	吉田 八郎
" 世田谷区・日体幼稚園	"	加藤 孝吾
" 世田谷区・赤堤幼稚園	"	瀬瀬 利男
" 世田谷区・ばら幼稚園	"	田久保綾子
" 世田谷区・片山学園用賀幼稚園	園長	片山 茂
" 新宿区立落合第四幼稚園	園長	出雲路猛

鹿児島県薩摩郡里村立里小学校附属幼稚園 (飯島) 園長 茅野 厚

東京都北区立梅木小学校	校長	久保田 保
" 北区立豊島西小学校	"	小嶋 貞子
" 北区立西ヶ原小学校	"	村上 允
" 足立区立北三谷小学校	"	加部 佐助

〃 新宿区立戸塚第二小学校 〃 大高まさじ
 〃 台東区立済美小学校 〃 吉田 八郎
 筑波大学附属豊学校 〃 井上 治郎
 筑波大学附属盲学校 〃 高山正喜久

<本年度の研究経過>

昭和54年10月：調査打ち合わせ会（10月23日，国研）を開催後，東京本調査を実施（10月25日～12月12日）

昭和55年 3 月：甌島での補充調査（3 月17日～ 3 月18日）

昭和55年 2 月：アンケート調査（父兄・学校）

<調査内容>

(1) 性状語テスト——意味の相対性理解テスト

(2) 範疇語テスト

①絵単語による概念分類テスト ②カテゴリー概念テスト ③定義テスト

(3) 助数詞テスト

<結 果>

上記の諸調査のうち53年度来の一連の性状語に関する諸テストの結果が得られた。すなわち，この調査は「単一次元比較テスト」「二次元比較テスト」「系列比較テスト」「系列操作テスト」の諸課題を含んでいる。そこで，つぎに経過報告として「単一次元比較テスト」の結果を述べる。被験児として，幼児・児童 328 名を対象として研究を行った。表 1 のように一次元のみで異なる

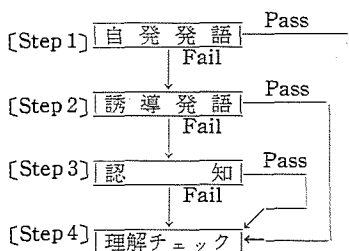


図 1 テストの流れ

る対関係を表すの絵図を刺激とする。図 1 はテストの流れ（構成）である。大／小の，りんご対を例にとって説明する。自発発語：どのように二つのりんごが違うかを自発的に言語化させる。「このりんご（小さい方）よりもこのりんご（大きい方）は？」「では，この

りんご（小さい方）は？」**誘導発語**：自発発語で正答以外のものについて行う。たとえば自発で「チーサイ」と言えなかった時には「二つを比べると大きさが違いますね。このりんごより、このりんごは大きいね。では、このりんごは？」と次元名を入れて誘導する。**認知**：誘導発語のうち正反応を除く全語について行う。「大きい（小さい）のはどっち？」

ところで、表1のような対語の特徴を考えると、まずそれらは反意語関係から成り立っている。さらに反意語をみると、名義的 (nominal) で比

①大／小（りんご）	②多／少（飴）	較的 (contrastive) な 使用が可能な無標 (unmarked) の語と 比較的な使用しかない 有標 (marked) の語か ら成っている。たとえ
③太／細（木）	④長／短（竿）	
⑤高／低（風船）	⑥深／浅（穴）	
⑦厚／薄（本）	⑧広／狭（建物）	
⑨多／少（ジュース）	⑩ふとった／やせた（人間）	
⑪高／低（煙突）	⑫広／狭（橋）	

表1 刺激用の絵図対

ば、「長い」というのは、「長さ」という次元をもつから無標語であり、それをもたない「短い」は有標語となる。また、各次元（長さ、太さなどの尺度）には“長い—短い”“太い—細い”のような両極性をもっている。ここで上のような特徴に従って結果を分析した。その結果の概要を以下に述べる。

(1)必ずしも有標の語が無標の語よりもむずかしいとは言えない。「太さ」次元では、逆に有標の語の方の成績が、よかった結果が出ている。(2)意味獲得の過程で有標の語を無標の語の意味に同化してしまうようなことは一義的にみられなかった。(3)言語使用の誤りを見ると次元間の混同はあっても極性間の混乱は見られない。(4)同じ次元の語の産出、理解の成績でも、その語が適用される対象によって異なる。すなわち、同じ次元タームでも絵図（対象）によって異なる成績のパターンを示している。

以上から、意味素性の複雑さによって意味習得の順序を説明しようとする抽象的な理論は再検討されねばならないと思われる。

<研究目的>

電子計算機利用の多様化に伴い、漢字処理を指向した各種の装置開発が盛んになっている。しかし、漢字データを対象とした場合、英数字に比べ、取り扱うべき字数、文字配列また字体の多様性の問題など、電子計算機処理に適していない面が多い。これらの問題は漢字データ入力作業に関するデータ修訂正処理の機械化に大きな障害となっており、漢字データ修訂正処理の効率化を図ることは、当面の重要な課題である。

<研究組織>

言語計量研究部の下記の3名が参加した。

斎藤 秀紀 (第三研究室長)

田中 卓史 (第三研究室主任研究官)

鶴岡 昭夫 (第一研究室主任研究官)

<実施の概要>

54年度は、次の四項目について分析及び検討を行った。

1. 修正処理装置に関するハードウェア構成の検討

電子計算機入力データのクリーン化を図るため、インテリジェント端末上でデータを入力し、修正できる分散処理方式が有効であることを明らかにした。(斎藤秀紀「分散処理システムへの試み」『電子計算機による国語研究X』〈報告67〉国研所収)

2. インテリジェント端末用スクリーン・エディタ機能の検討

オフィスコンピュータ及び漢字テレタイプ装置上で独立して動作するデータ修訂正用プログラム(フロッピーディスク・ベース)機能を検討し、一部プログラムの仕様書を作成した。

3. データ自動修正処理用機械辞書の検討

自動構文解析プログラム作成のため、高校教科書400文例の動詞を対象としてアスペクトによる分類(状態、過程、動作)を試みた。また、文の語彙

的意味分析として、アスペクト、テンスなどの実現との関連、機能的意味について分析を行った。

4. 用語用字の統計資料の作成

漢字かな混じり文入力データを作成するさいのエラーを自動的に検出し、修正するプログラムを作成するために、文字及び語の両レベルについて、各種の統計処理用プログラム、分析用資料を作成した。データは高校教科書(9科目)とし、文字の出現頻度、異なり語数、語中の文字の出現位置と文字連続の出現傾向、文字と語の境界条件の関係を統計的に調査し分析した。

(田中卓史「文字の統計」『電子計算機による国語研究X』〈報告67〉所収、田中卓史「文字の計量調査」情報処理学会、計算言語研究会、21-5 1980)

<今後の予定>

54年度に作成したプログラム仕様にしたが、次の作業を行う予定である。

- 1) 構文解析プログラムの作成
- 2) インテリジェント装置を使用したデータ修正プログラムの作成
- 3) 大量データによるオンライン修正システムとスタンドアローンタイプとの性能の比較。

日本語教育研修の実施

A 目 的

日本語教育センターでは、日本語教育振興の社会的要請に応えるために、専門家としての日本語教員の意識とその資質能力の向上とを目的として、教育研修の機会と場を提供している。本年度は、これまで実施してきた日本語教育長期専門研修、東京・大阪両地での夏季研修、公開講座に加え、あらたに日本語教育特別集中研修を実施した。この特別集中研修は、緊急に日本語教育の実務に従事しなければならなくなった者に対し、約1か月の短期間に最小限の実務能力を授けることを目的とする。これらの研修に共通にみられる特色は、研究所の調査・研究の成果を十分に取り入れた研修内容にある。こうした研修によって育成された「研究する教員」は、将来の日本語教育の質的向上に重要な役割を果たすものと思われる。

B 担 当 者

日本教育センター日本語教育研修室

センター長 野元菊雄 室長 水谷 修 研究員 田中 望 石井久雄
研究補助員 高野美智子 事務官 田島正幸

なお、研修事務について藤野京子他の協力を得た。

C 本年度の経過

I 日本語教育長期専門研修

昭和54年度日本語教育長期専門研修は、昭和54年4月16日より55年2月29日までの約10か月にわたって行われた。

1. 募集方法及び応募者の資格

本年度は、53年11月27日に募集を開始し、案内書を各大学、日本語教育機

関、日本語教育関係団体、各県教育委員会など約 700 機関に配布した。

54年度の応募者の資格は、前年度にひきつづき、日本語教育の経験を有する者については四年制大学卒業以上の学歴を持つこと、日本語教育の経験を有しない者については大学院在学以上の学歴を持つことを要求した。また、いずれの場合も大学（指導教官）又は日本語教育機関、日本語教育関係団体などからの推薦を求めた。

本年度は、各種の日本語教育機関又は大学、高等学校などで専任として職を持つ者からの問い合わせが続出したが、現実には一年間の長期にわたって休職することが困難であることなどの理由により、参加申し込み前に断念する者が多かった。今後は、これらの現職者の参加希望者に対して、いわゆる「内地留学」の制度を確立するなどの方策を立てるよう関係諸機関にはたらかける努力が必要だと思われる。

54年度の有資格応募者は40名であった。

2. 研修生数

定員は30名であるが、本年度は選考の結果、18名を研修生として認めた。なお、研修修了者は15名であった。

3. 研修施設

研修は、国立国語研究所日本語教育センターの六つの研修室（54名用大研修室 1，24名用中研修室 2，18名用小研修室 3）を使って行われた。通常の講義には主として中研修室を使い、研修生が自主的に行う共同研究及び教育実習などには小研修室を使った。また、大研修室は開講式、修了式などのセレモニーの際に主に使用した。

本年度より従来、研究及び教務に使用していた部屋を研修事務室として独立させることとなった。同室は、研修教務などの事務室としてのほか講師控室、研修用図書室として使用した。研修用図書としては、国語辞典、漢和辞典、各国語辞典を含め、基本図書約 500 冊が備え付けてある。

研究所図書館は、これまでと同じく毎週月曜と木曜の研修修了時から閉館（5 時15分）まで研修生の利用が認められ、閲覧貸し出しが行われた。

LL教室及び研修室観察装置は、教育実習の際に最大限に活用された。

4. 研修年間日程

研修日程は次の通りであった。

53年11月27日	募集開始，案内書発送
54年1月31日	募集締切り
3月5日	第一次選考（筆記）
3月12日	第二次選考（面接）
4月16日	レジストレーション
4月17日	開講式，ガイダンス
7月5日	第一学期終了
7月6日より	夏季休業
9月17日	第二学期開始
12月19日	第二学期終了
12月20日	国語研究所創立記念日のため休業
12月21日より	冬季休業
55年1月14日	第三学期開始
2月29日	修了式

5. 研修内容

講座名及び講師

開講特別講演	林 大	言語学概論	野元 菊雄
同上	野元 菊雄	言語学研究	上野田鶴子
開講特別講義（文字と語彙を めぐって）	斎賀 秀夫	対照音声学	城生伯太郎
同上（日本語教師の資質 と能力をめぐって）	水谷 修	日本語文法 I	鈴木 重幸
同上（日本語教師の英語 力について）	上野田鶴子	日本語文法 I 演習	松本 泰丈
同上（音声及び日英表現 の比較について）	水谷 修	日本語特別研究 （日本語文法研究）	高橋 太郎
第一学期		日本語語彙論 I	工藤真由美
			高橋 太郎
			工藤 浩
			宮島 達夫
			村木新次郎
			斎賀 秀夫
			土屋 信一

	中野 洋
	齋岡 昭夫
	野村 雅昭
日本語語彙研究	倉持 保男
	阪田 雪子
表記法研究	武部 良明
社会言語学	柴田 武
対照研究・日本語と英語	安井 稔
日本語教授法Ⅰ	浅野 鶴子
日本語教育研究	水谷 修
日本語行動研究	田中 望
日本語表現研究	石井 久雄
特別講義	E・H・ジョーデン
同 上	鈴木 孝夫
同 上	中田 清一
教育実習	研 修 室

第二学期

日本語音声研究	大坪 一夫
日本語文法Ⅱ	寺村 秀夫
日本語語彙論Ⅱ	林 四郎
日本語文字論	林 大
対照意味論	松原 秀一
言語の対照研究Ⅰ	志部 昭平
言語の対照研究Ⅱ	高田 誠
言語調査法	北村 甫
言語心理学	芳賀 純
言語発達と教育	村石 昭三
	大久保 愛
	岩田 純一
	島村 直己
日本語特別研究	佐藤 亮一
(言語変化)	真田 信治
	沢木 幹栄
	飛田 良文
	梶原滉太郎

日本語特別研究	中村 明
(言語行動)	杉戸 清樹
	江川 清
	米田 正人
	神部 尚武
中国語研究	山下 輝彦
日本語教授法Ⅱ	斎藤 修一
日本語教授法Ⅲ	小出 詞子
日本語教授法Ⅳ	木村 宗男
日本語教育教材研究	日向 茂男
特別講義(日本語表現論)	
	宮地 裕

第三学期

特別講義(学部留学生に対する 日本語教育)	富田 隆行
同(海外移住者の日本語一ハワ イの場合)	比嘉 正範
同(外国人と日本語の文字)	
	玉村 文郎
同(談話行動の心理学的研究)	
	入谷 敏男
同(理論言語学と言語教育の 接点)	井上 和子
同(言語と論理)	草薙 裕
同(日本語語彙)	田中 章夫
同(海外における日本語教育)	
	椎名 和男
同(日本語表現論)	宮地 裕
同(文章構成法)	林 巨樹
同(内言と文産出過程につ いて)	天野 清
同(話しことば論)	大石初太郎
同(実務に直結する日本語 教育)	高見沢 孟
同(一般言語学)	川本 茂雄

同（朝鮮語を母語とする学習者 に対する日本語教育）	梅田 博之	同（日本語方言論）	徳川 宗賢
同（中級教材論）	高木きよ子	同（アクセントに関する日英 語の比較）	杉藤美代子
同（誤用例の研究から）	佐治 圭三	同（日本語の音節）	金田一春彦
同（作文教育研究）	堀口 和吉	修了記念講演（日本語教育と 文学）	吉田弥寿夫
同（日本語教育の諸問題）	倉谷 直臣		

本年度は、第一学期に正規の設置科目として行われた教育実習のほかに、第二学期に研修生の自主的な共同研究の一環として実習が行われた。これは研修室の指導助言のもとに研修生が自ら留学生会館、各大学にポスターを掲示するなどして集めた外国人留学生を教育対象として行われたもので、12週にわたり各週2こま、計24こまの実習を行った。

また、同じく研修生の共同研究として、ビデオによる中級教材作成実習が主に日本語教育教材開発室の協力を得て行われた。これらの自主的共同研究は、研修全体の成果の中の大きな部分を占めている。

6. 研修生

昭和54年度の募集は昭和54年1月31日に締切り、応募者は40名であった。次の選考により、18名の受入れを決定した。

第一次選考 昭和54年3月5日実施、9日発表。

日本語の理解・表現に関する、および英語の理解に関する筆記試験を課した。試験時間3時間45分。受験者30名、合格者18名。

第二次選考 昭和54年3月12日実施、13日発表。

面接・発音・聴解を含む。受験18者、合格者18名。

この18名のうち研修中途に留学、就職などの理由で辞退した者が3名あったため、修了に至ったのは、次に掲げる15名である。

修了者氏名	性別	学歴等	大学（院）での専攻
		修了レポート題目	
ダバロス都紀代	女	早稲田大学演劇科卒業	演劇
		日西温度名・形容詞の対照研究	

- 播摩 温子 女 京都外国語大学外国語学部卒業 英米語
原因・理由を表わす従属節「テ」・「ノデ」・「カラ」
- 本多 敏子 女 東京女子大学英米文学科卒業 英米文学
No. といわない否定の応答表現
- 神 恭子 女 奈良女子大学英語英米文学科卒業 英文学
話しことばにおける接続助詞「ケレドモ」の用法について
- 小松 紀子 女 学習院大学国文学科卒業 国文学
読解指導・文学作品読解指導の問題
- 増田みどり 女 東京女子大学史学科卒業 日本史
女性の使う終助詞の「わ」について
- 宮副 裕子 女 イリノイ大学英米文学科修士修了 英米文学
日本語教育のために一ト・タラ・バ・ナラを鳥瞰する一*
- 大崎 佳子 女 上智大学外国語学部卒業 英語学
「ている」を中心とした日本語とタガログ語の対照研究
- 大塚 一郎 男 天理大学外国語学部卒業 英米文学
『話し方』の評価と指導について
- 佐藤恵美子 女 明治大学大学院文学研究科修士修了 日本文学
日本語教育のために一ト・タラ・バ・ナラを鳥瞰する一*
- 佐藤 政光 男 明治大学大学院文学研究科博士在学 日本文学
作品「柿」（漱石『永日小品』より）における文の接続関係
- 清水由利子 女 慶応義塾大学文学部卒業 仏文学
言語政策
- 富岡 敏明 男 一橋大学社会学部卒業 社会心理学
日本語のハとガの品詞的及び構文的分類—外国人が使えるようになるために
- 渡辺 恵子 女 東京外国語大学アラビア語学科卒業 アラビア語
日本語の話しことばにおける「ネ」の本質的な機能を考える
- 吉村 弓子 女 国際基督教大学語学科卒業 コミュニケーション
異字同訓の用法—暖と温の場合

* 印は共同研究である。

Ⅱ 日本語教育夏季研修

1. 日程および会場

東京会場

日程 昭和54年7月23日(月)～7月27日(金) 5日間

午後9時15分～午後4時15分 1日4こま6時間

会場 国立国語研究所

大阪会場

日程 昭和54年7月30日(月)～8月3日(金) 5日間

午前9時15分～午後4時15分 1日4こま6時間

会場 なにわ会館(大阪市天王寺区石ヶ辻町38番1号)

2. 講義題目および講師

現職者研修	講義題目	(時 間)	東京会場講師	大阪会場講師
	日本語教育概観	(90分)	林 大	野元 菊雄
	音声の研究	(180分)	城生伯太郎	杉藤美代子
	音声の表現・理解, 音声の教育	(180分)	水谷 修	水谷 修
	文法の研究	(180分)	南 不二男	尾上 圭介
	文法の表現・理解, 文法の教育	(180分)	寺村 秀夫	宮地 裕
	語彙の研究	(180分)	土屋 信一	渡辺 実
	語彙の表現・理解, 語彙の教育	(180分)	中村 明	玉村 文郎
	表記の研究・教育	(180分)	武部 良明	玉村 文郎
	表現法(自己紹介)	(180分)	林 四郎	徳川 宗賢
	総括討論	(90分)	水谷 修	水谷 修
初級研修	講義題目	(時 間)	東京会場講師	大阪会場講師
	日本語教育概観	(90分)	林 大	野元 菊雄
	教材	(90分)	日向 茂男	倉谷 直臣
	評価	(90分)	斎藤 修一	倉谷 直臣
	語彙の研究・教育	(180分)	西尾 寅弥	前田 富祺
	表記の研究・教育	(180分)	加藤 彰彦	樺島 忠夫

音声の研究・教育 I	(180分)	大坪 一夫 杉原 正勝 高田 誠	和田 実 大坪 一夫
音声の研究・教育 II	(180分)	大坪 一夫 今田 滋子 水谷 修 沢木 幹栄	大坪 一夫 野元 菊雄 水谷 修 志部 昭平
文法の研究・教育	(180分)	石井 久雄	宮地 裕
作文教育	(180分)	姫野 昌子	堀口 和吉
視聴覚教育	(90分)	木村 宗男	乙政 潤
今後の課題	(90分)	上野田鶴子	吉田弥寿夫
総復習	(90分)	田中 望	田中 望

3. 参加者

定員は、現職者研修が東京・大阪各会場50名、初級研修が東京会場 100 名大阪会場80名である。応募の資格は次のとおり。

(a)(b)いずれかの条件を満たし、日本語教育機関・日本語教育関係団体または大学等からの推薦があるもの。

現職者研修——

(a) 日本語教育の研究または実務に現に従事していて、またはかつて従事したことがあるもの。

(b) 本研修の初級研修を既に修了していて、さらに一層専門的な知識の充実を図ろうとするもの。

初級研修——

(a) 日本語教育の研究または実務に現に従事していて、特に基礎知識の充実を図ろうとするもの。

(b) 大学4年在学以上またはそれに準ずる学歴を有し、日本語教育の研究または実務について関心があるもの。

応募者は、現職者研修では条件(a)を満たした者がほとんど、初級研修では条件(b)を満たした者が多い。現職者研修が経験者研修、初級研修が未経験者講

座、といった色彩は、ここ数年続いている。さらに、応募者数は、初級研修東京会場へのものが、昨年度までの定員の約2倍のところから、本年度は大幅に減った。現職者研修両会場および初級研修大阪会場への応募者数は、数年来横ばいである。

本年度の応募は昭和54年5月28日（月）に締切った。応募状況および参加状況は以下のとおりである。初級研修東京会場への応募者は11名を現職者研修東京会場へ繰り入れ、この11名を除く全応募者について希望どおりに参加を認めた。

	応 募	参加許可	全日程参加	参加証明書交付
現職者研修東京会場	25名	36名	31名	28名
大阪会場	29	29	21	19
初級研修 東京会場	126	115	98	97
大阪会場	83	83	71	71

4. 運営委員会

集中的な研修を円滑に運営するため、東京・大阪各会場にそれぞれ国立国語研究所外の運営委員5名を委嘱した。各会場の運営委員会は、運営委員5名と国立国語研究所日本語教育センター研究員4名とによって構成した。

東京会場運営委員		大阪会場運営委員		日本語教育センター
大木 隆二	東京外国語大	佐治 圭三	大阪女子大	野元 菊雄
木村 宗男	早稲田大	玉村 文郎	同志社大	水谷 修
斎藤 修一	慶応義塾大	堀口 和吉	天理大	田中 望
鈴木 忍	大東文化大	宮地 裕	大阪大	石井 久雄
望月 孝逸	大東文化大	吉田弥寿夫	大阪外国語大	

鈴木忍委員は任期中に惜しくも他界された。

社団法人日本語教育学会および大阪外語大学からは、研修の運営および実施に当たって、諸般の協力を得た。

Ⅲ 日本語教育特別集中研修

1. 日程および会場

日程 昭和55年2月12日(火)～3月11日(火) 25日間

午前9時30分～午後4時15分 1日4こま9時間

会場 国立国語研究所

2. 講義題目および講師

講義題目	(時間)	講 師			
概観	(3)	野元 菊雄	発音訓練	(12)	上村 幸雄
教授法・教材論	(18)	水谷 修	表記法訓練	(12)	田中 章夫
視聴覚教育	(3)	水谷 修	文章訓練	(12)	田中 章夫
日本語教育研究法	(3)	水谷 修	話しことば訓練	(21)	水谷 修
音声の基礎・教育	(6)	大坪 一夫	年少者教育	(6)	海野 光子
表記の基礎・教育	(3)	玉村 文郎	ニュージーランド		
語彙の基礎・教育	(3)	玉村 文郎	情報	(6)	大木 忠郎
文法教育の問題点	(6)	寺村 秀夫	機関見学	(3)	水谷 修
資料収集	(6)	水谷 修	総括	(3)	水谷 修
			補講	(12)	水谷 修

3. 受講者

中等教育教員派遣事業および日本・ニュージーランド文化交流促進計画に基づき、文部省学術国際局長の依頼による5名を、受講者とした。5名の派遣先、氏名および所属は次のとおりである。

オーストラリア	1名	出口睦子	千葉県中学校教諭
ニュージーランド	3名	木村肇介	兵庫県高校教諭
		児玉成子	千葉県高校教諭
		高橋 寛	群馬県高校教諭
メキシコ	1名	畑野克行	北海道中学校教諭

Ⅳ 日本語教育公開講座『日本語と日本語教育』

本年度は次のとおり1回開催した。

日時 昭和55年3月22日(土) 午後2時～4時30分

会場 国立国語研究所

講演題目および講師

日本語と動詞 野元 菊雄

コソア三称について 林 大

定員 100名 聴講者 56名

日本語教育教材および教授資料の作成

A 目 的

日本語教育における有効適切な教材の開発を目ざしてモデル教材を作成し、また指導上の参考に供するために日本語教育の基礎的知識に関する教授資料を刊行する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育教材開発室

センター長 野元菊雄 室長 武田 祈 研究員 日向茂男 文部技官
清田潤

C 本年度の作業

1. 日本語教育教材および教授資料の作成

『中・上級の教授法』（日本語教育指導参考書7）を刊行した。これは高木きよ子（アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター副所長・教授）・水谷信子（アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター教授）・斎藤明（アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター助教授）の各氏に執筆を依頼したものである。また、寺村秀夫（筑波大学教授）に依頼していた『日本語の文法（下）』（日本語教育指導参考書5）の原稿が完成した（昭和55年度刊行の予定）。

2. 日本語教育映画の制作

日本語教育教材映画として計画されている基礎編30巻のうち、前年度までに完成した16巻に続けて本年度3巻を制作した。その題名および規格等は、次のとおりである。

イ. 題名

「みずうみのえを かいたことが ありますか」——経験・予定の表現——

「あのいわまで およげますか」——可能の表現——

「よみせを みに いきたいです」——意志・希望の表現——

ロ. 規格等

16ミリ、カラー、トーキー、1巻5分もの3巻

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

本年度制作された3巻のそれぞれの内容とねらいは次のとおりである。

「みずうみのえを かいたことが ありますか」

この巻では、過去の経験（「したことがある」）、動作・作用の有無（「することがある」）、予定の行動（「することにする」）等の言い方を中心的な学習項目として扱っている。

主人公は、夏休みに郷里に帰った女子画学生とそこへ遊びに行った女子画学生。二人はお城への道を散歩したり、湖へ絵をかきに行ったりする。湖をはじめ、山間の風景が目を楽しませてくれる。

「あのいわまで およげますか」

この巻での中心的な学習項目は、可能を表す言い方（例：「泳げる」「食べられる」「泳ぐことができる」）、また可能な状態に到達したことを表す言い方（例：「泳げるようになる」）等である。

映画場面は、ある海水浴場。泳ぎの練習、海辺のレストランでの昼食、磯でのつり人との会話等で構成され、上記の表現が展開する。海の青さと夏雲の白さが印象的である。

「よみせを みに いきたいです」

この巻は、意志（「しようと思う」「するつもりだ」）、欲求（「ほしい」「ほしがる」）、希望（「したい」「したがる」）等の言い方を学習項目として取り上げている。

映画は、よみせを見に行く相談、喫茶店での待ち合わせ、よみせを見ながらの散歩、すし屋での一休み等で構成され、日本の夏の風物詩のひとこまがここに紹介されている。

教材映画の制作には、日本語教育映画等企画協議会を設け、その検討を経て、学習項目と主題の選定、シナリオの決定等を行っている。本年度の委員は次の諸氏で、制作指導等についても協力を得た。

石田敏子（国際基督教大学専任助手）

川瀬生郎（東京外国語大学附属日本語学校教授）

木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

窪田富男（東京外国語大学教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

3. 日本語教育映画解説書の刊行

昭和51、52年度に制作した日本語教育映画のうち、4巻について、解説書を教授上の参考資料として、下記のとおり作成刊行した。

日本語教育映画解説書 基礎篇

第八課「どちらが すきですか」——比較・程度の表現——

第九課「かまくらを あるきます」——移動の表現——

第十課「もみじが とても きれいでした」——です、でした、でしょう

——

第十一、「きょうは あめが ふっています」——して、している、していた——

なお、この4課の解説の編集は、日向茂男が担当し、各巻については、第八課に田中望、第九課に石井久雄、第十課に日向茂男、第十一課に清田潤が、それぞれ執筆に協力した。

4. イ 母語別学習辞典編集委員会の開催

昭和52・53年の2年間にわたり、母語別学習教材作成準備委員会を設け、辞典作成のための基本的な問題点について検討したが、昭和54年からは、本格的に日本語学習辞典を作成することとなり、名称を母語別学習辞典編集委員会に改めた。

会議を9回開催、おもに和文原稿を執筆する際の問題点について討議し、執筆要領、見本原稿を作成した。

この母語別学習辞典編集委員会には、所外委員10名、所内委員5名を委嘱した。氏名は次のとおりである。

所外委員

椎名和男（国際交流基金日本研究部部長、当初、同日本研究部日本語課岩淵功夫氏が委員であったが、海外出張のため、椎名委員と交替した）

梅田博之（東京外国語大学A・A研究所教授）

加藤彰彦（実践女子短期大学教授）

窪田富男（東京外国語大学特設日本語科教授）

斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

佐々木重次（東京外国語大学外国語学部助教授）

佐治圭三（大阪女子大学教授）

玉村文郎（同志社大学教授）

土田 滋（東京外国語大学A・A研究所助教授）

西尾寅弥（群馬大学教授）

所内委員

野元菊雄（日本語教育センター長）

上野田鶴子（日本語教育第二研究室長）

水谷 修（日本語教育センター日本語教育研修室長）

武田 祈（日本語教育センター日本語教育教材開発室長）

村木新次郎（言語体系研究部第二研究室員）

ロ. 母語別学習辞典和文原稿の作成

和文原稿1万2千語の選定及問題点の検討のため、54年度は、次の客員研究員を依嘱した。

倉持保男（慶応義塾大学国際センター助教授）

富田隆行（亜細亜大学教養部専任講師）

山下正彦（ペルリッツ・スクール・オブ・ランゲージス日本語講師）

青山照男（筑波大学大学院文芸・言語研究科在学中）

村田知子（国際学友会日本語学校、拓殖大学留学生別科非常勤講師）

更に54年度は、2千語の和文原稿について、次の各氏に執筆を依頼、作成した。

神田靖子、北邨香代子、小矢野哲夫、島本基、下坂智子、下田美津子、田中衛子、中道真木男、前田均、森本順子。

D 今後の予定

日本語教授資料作成のための調査研究および計画の立案にあたる。モデル教材としての日本語教育教材開発については、センターにおける教材開発実験室、録音教材編集室の機器の整備充実に伴い、開発のための実験研究を行う。(84ページ、「日本語教育教材開発のための調査研究参照」。)

来年度は、日本語教授資料として『日本語の文法(下)』(日本語教育指導参考書5)、『指示語(仮題)』(日本語教育指導参考書8)を刊行する。

『日本語教育沿革年表Ⅱ』を印刷の予定。年表Ⅰの補充訂正を行う。

日本語教育映画基礎篇は、5分もの3巻を制作する。解説書については54年度に引き続き執筆刊行する予定である。

母語別学習辞典編集委員会を引き続き開催、辞典の作成にあたる。なお、55年度は、和文原稿7,000語について執筆を行う予定である。

国語辞典の編集準備

I 国語辞典編集準備

52年度末、国語辞典編集準備委員会を設けて、国語辞典の編集につき、辞典の種類、規模、その他編集実行上の可能性、手順、体制等の諸問題を検討してきたが、54年度からは、辞典編集の具体的計画を定めるための準備実験的試行を行うため、国語辞典編集準備室を所内に開設した。準備室の人的構成は、次のとおりである。

主幹 斎賀秀夫

副主幹 飛田良文

調査員 石綿敏雄 (8.27～) 茨城大学教授

見坊豪紀 (8.27～) 元国立国語研究所第三研究部長

清水康行 (6.11～) 東京大学大学院生

湯浅茂雄 (8.13～) 上智大学大学院生

柏木成章 (8.23～) 早稲田大学大学院生

この国語辞典編集準備室で、54年度に行った作業は次の通りである。

1. 用例採集を行う文学作品の重要度を知るため、明治以降の文学・文化全集15種に、どの作品が何回採録されているかを調査し、そのうち、三種以上の全集に収録されている作品の目録「主要文学全集収録作品目録」を作成した。調査した15種の文学・文化全集は次の通りである。

- (1)現代日本文学全集（改造社） 大正15～ 62巻
- (2)明治大正文学全集（春陽堂） 昭和2～ 60巻
- (3)明治文化全集（日本評論社） ” 2～ 24巻
- (4)現代日本小説大系（河出書房） ” 24～ 65巻
- (5)昭和文学全集（角川書店） ” 27～ 59巻
- (6)現代日本文学全集（筑摩書房） ” 28～ 99巻
- (7)日本文学全集（新潮社） ” 34～ 72巻

- (8)日本現代文学全集（講談社） 昭和35～ 108巻
 (9)日本の文学（中央公論社） // 39～ 80巻
 (10)明治文学全集（筑摩書房） // 40～ 97巻
 (11)日本文学全集（集英社） // 49～ 88巻
 (12)^{名著複刻全集}近代文学館（日本近代文学館） // 43～ 158巻
 (13)日本近代文学大系（角川書店） // 45～ 60巻
 (14)昭和国民文学全集（筑摩書房） // 48～ 30巻
 (15)筑摩現代文学大系（筑摩書房） // 50～ 97巻

この作業は、飛田良文、清水康行、柏木成章、湯浅茂雄が担当した。

2. 「主要文学全集収録作品目録」には、1526作品が登録された。そこでこのうちから、用語総索引を作るための作品約100点ずつの選定をすることにし、55年1月18日紅野敏郎、前田愛、三好行雄の三氏にお集まりいただき、選定者の推薦をお願いした。その結果、下記の10名の方々にそれぞれ100点の選定を依頼した。

猪野謙二	学習院大学教授
紅野敏郎	早稲田大学教授
小島信夫	作家
高橋英夫	評論家
竹西寛子	作家
外山滋比古	お茶の水女子大学教授
中村光夫	評論家・明治大学教授
前田愛	立教大学教授
三好行雄	東京大学教授
山本健吉	評論家・日本文芸家協会理事長

その結果、延べ572作品が選定され、このうち、4名以上の方が選定した作品は139点であった。

その139作品は以下の通り。

表 1 (1901~1950)

〔発表年〕	〔作 品 名〕	〔作 者 名〕	〔一致度〕
明治34	牛肉と馬鈴薯	国木田 独 歩	4
明治37	火の柱	木 下 尚 江	5
明治38	吾輩は猫である	夏 目 漱 石	7
明治39	野菊の墓	伊 藤 左千夫	6
	破戒	島 崎 藤 村	6
	千鳥	鈴 木 三重吉	4
	坊ちゃん	夏 目 漱 石	4
明治40	蒲団	田 山 花 袋	6
	婦系図	泉 鏡 花	5
明治41	何処へ	正 宗 白 鳥	7
	新世帯	徳 田 秋 声	5
	三四郎	夏 目 漱 石	5
	俳諧師	高 浜 虚 子	4
明治42	田舎教師	田 山 花 袋	6
	すみだ川	永 井 荷 風	5
	それから	夏 目 漱 石	5
	耽溺	岩 野 泡 鳴	4
明治43	家	島 崎 藤 村	5
	歌行燈	泉 鏡 花	4
	土	長 塚 節	4
	微光	正 宗 白 鳥	4
明治44	或る女	有 島 武 郎	10
	お目出たき人	武 者 小 路 実 篤	4
	雁	森 鷗 外	4
大正 2	阿部一族	森 鷗 外	6
	銀の匙	中 勘 助	4
大正 3	鱧の皮	上 司 小 剣	6
	ころろ	夏 目 漱 石	5

	毒薬を飲む女	岩 野 泡 鳴	4
大正 4	あらくれ	徳 田 秋 声	9
	道草	夏 目 漱 石	5
	羅生門	芥 川 龍之介	4
大正 5	腕くらべ	永 井 荷 風	9
	善心悪心	里 見 弴	7
	明暗	夏 目 漱 石	6
大正 6	城の崎にて	志 賀 直 哉	8
	和解	志 賀 直 哉	5
	カインの末裔	有 島 武 郎	4
	末枯	久保田 万太郎	4
大正 7	田園の憂鬱	佐 藤 春 夫	9
	子をつれて	葛 西 善 蔵	5
大正 8	蔵の中	宇 野 浩 二	8
	友情	武者小路 実篤	6
	性に眼覚める頃	室 生 犀 星	6
大正10	暗夜行路	志 賀 直 哉	10
	無限抱擁	滝 井 孝 作	10
大正11	黒髪	近 松 秋 江	7
	多情仏心	里 見 弴	4
大正12	山椒魚	井 伏 鱒 二	5
大正13	伸子	宮 本 百合子	7
	痴人の愛	谷 崎 潤一郎	4
大正14	檸檬	梶 井 基次郎	9
	竹沢先生といふ人	長 与 善 郎	4
大正15 (昭和 1)	伊豆の踊子	川 端 康 成	7
	海に生くる人々	葉 山 嘉 樹	7
	嵐	島 崎 藤 村	4
	春は馬車に乗って	横 光 利 一	4

昭和2	河童	芥川龍之介	5
	玄鶴山房	芥川龍之介	4
	渦巻ける鳥の群	黒島伝治	4
昭和3	放浪記	林芙美子	7
	蓼喰ふ虫	谷崎潤一郎	6
	波	山本有三	6
	業苦	嘉村磯多	4
昭和4	蟹工船	小林多喜二	9
	夜明け前	島崎藤村	5
	太陽のない街	徳永直	5
昭和5	機械	横光利一	6
	聖家族	堀辰雄	4
昭和7	鮎	丹羽文雄	5
	途上	嘉村磯多	4
昭和8	春琴抄	谷崎潤一郎	6
	若い人	石坂洋次郎	5
	人生劇場	尾崎士郎	5
	晩年	太宰治	5
	暢気眼鏡	尾崎一雄	4
	美しい村	堀辰雄	4
昭和9	紋章	横光利一	4
昭和10	雪国	川端康成	8
	蒼氓	石川達三	6
	故旧忘れ得べき	高見順	6
	仮装人物	徳田秋声	4
昭和11	普賢	石川淳	6
	くれなゐ	佐多稲子	5
	風立ちぬ	堀辰雄	5
昭和12	渥東綺譚	永井荷風	10

昭和13	老妓抄	岡 本 かの子	6
	厚物咲	中 山 義 秀	4
	麦と兵隊	火 野 葦 平	4
昭和14	歌のわかれ	中 野 重 治	6
	死者の書	折 口 信 夫	4
昭和15	夫婦善哉	織 田 作之助	4
	連環記	幸 田 露 伴	4
昭和16	縮図	徳 田 秋 声	7
昭和17	山月記	中 島 敦	5
昭和18	李陵	中 島 敦	7
	細雪	谷 崎 潤一郎	6
昭和20	悉皆屋康吉	舟 橋 聖 一	4
昭和21	桜島	梅 崎 春 生	7
	聖ヨハネ病院にて	上 林 暁	7
	白痴	坂 口 安 吾	6
	暗い絵	野 間 宏	6
	焼跡のイエス	石 川 淳	5
	かういふ女	平 林 たい子	4
昭和22	夏の花	原 民 喜	5
昭和23	俘虜記	大 岡 昇 平	7
	虫のいろいろ	尾 崎 一 雄	7
	人間失格	太 宰 治	5
	晩菊	林 芙美子	4
昭和24	山の音	川 端 康 成	8
	狐銃	井 上 靖	5
	朝霧	永 井 龍 男	5
	少将滋幹の母	谷 崎 潤一郎	4
昭和25	遙拝隊長	井 伏 鱒 二	4
	武蔵野夫人	大 岡 昇 平	4

異形の者

武 田 泰 淳

4

表 2 (1868~1900)

〔発表年〕	〔作 品 名〕	〔作 者 名〕	〔一致度〕
明治17	牡丹燈籠	三遊亭 円 朝	5
明治18	当世書生気質	坪 内 逍 遙	6
	佳人之奇遇	東 海 散 士	4
明治20	浮雲	二葉亭 四 迷	9
明治21	あひびき	二葉亭 四 迷	5
明治22	風流仏	幸 田 露 伴	4
明治23	舞姫	森 鷗 外	8
明治24	五重塔	幸 田 露 伴	9
	かくれんぼ	斎 藤 緑 雨	5
明治28	たけくらべ	樋 口 一 葉	9
	にごりえ	樋 口 一 葉	6
明治29	今戸心中	広 津 柳 浪	7
	多情多恨	尾 崎 紅 葉	4
明治30	金色夜叉	尾 崎 紅 葉	6
明治31	武蔵野	国木田 独 歩	8
明治33	思出の記	徳 富 蘆 花	7
	高野聖	泉 鏡 花	6

表 3 (1951~1966)

〔発表年〕	〔作 品 名〕	〔作 者 名〕	〔一致度〕
昭和26	野火	大 岡 昇 平	8
昭和27	真空地帯	野 間 宏	5
昭和29	驟雨	吉 行 淳之介	4
昭和31	金閣寺	三 島 由起夫	8
	檜山節考	深 沢 七 郎	5
昭和32	死者の奢り	大 江 健三郎	7

3. 用例採集を行うための雑誌の重要度を知るため、『国立国会図書館所蔵

和雑誌目録（昭和50年末現在）』に収録されている28,282点の中から、20年以上継続して刊行されている雑誌を抽出し、「主要雑誌目録」を作成することとし、作業の結果、幕末から昭和25年創刊のものまでで、1877点が登録された。この作業は飛田良文が担当し、調査員として、

荒尾禎秀（昭和54年12月13日～）東京学芸大学講師

村山昌俊（昭和54年12月13日～）国学院大学大学院生
の両氏を依頼した。

4. 用例採集法（スカウト方式）について、編集準備室員5名（見坊豪紀、飛田良文、清水康行、柏木成章、湯浅茂雄）が、芥川竜之介「孤独地獄」および「芋粥」を材料として実験を行った。1ページにつき、100語あたり10語、20語、30語等各段階の採集目標を定めて各自採集を行う際、どの段階で5人の採集語が一致し、各自の個人的選択のくせが見られなくなるかを実験した。2回の実験の結果では、個人のくせがほぼ消去されるのは、100語のうち50語採集を目標とする段階以上であることが明らかになった。（今後更に用例採集の実験を行い、訓練および、条件によって、何語で5人が一致するようになるか、むだのないスカウト方式の実験を行う予定である。）

5. 用例採集のための底本の検討。

文学作品の発表は、原稿、雑誌、単行本、全集など、いろいろな形式があり、どれから用例を採集するのが辞典の用例としてもっとも適当かを検討した。「羅生門」「暗夜行路」の調査を行った結果は、原則として初版本がよいということになった。これは、雑誌、新聞などの底本となるものとの対比から適当と考えられる。この作業には調査会委員の松井栄一氏が協力された。

6. 現代語の語彙量の推定作業。

辞典の見出し語数を考える資料として、現代語の語彙量はどのくらいあるか、『日本国語大辞典』の見出し語から、廃語、死語、方言を除いたものを数えることとし、200ページ間隔（全体の0.5%）サンプリング調査の結果、全体45万語のうち現代語は約35万語と推定した。この作業は、柏木成章、湯浅茂雄が担当した。

7. カード保管庫の面積について試算を行った。現在の計画では、延べ3000万語のカードを採集する予定であるが、これらのカードを保管するには、どれだけの面積が必要か見坊委員の方式によって試算を試みた結果、1,370㎡が必要であることが明らかになった。ただし、カードの規格は、A5半截の大きさとして計算した。

Ⅱ 国語辞典編集準備調査会

52年度来設けられていた国語辞典編集準備委員会を改組して、国語辞典編集準備調査会を設けた。委員は次のとおり。

(所外委員)

荒正人 死去 (54.6.9)
黒羽亮一 日本経済新聞社論説委員
見坊豪紀 元国立国語研究所第三研究部長
阪倉篤義 京都大学教授
佐藤喜代治 フェリス女学院大学教授
田島宏 東京外国語大学教授
松井栄一 株式会社尚学図書言語研究所員
馬淵和夫 筑波大学教授
山田俊雄 成城大学教授
頼惟勤 お茶の水女子大学教授

(所内委員)

斎賀秀夫、飛田良文、南不二男、飯豊毅一、野元菊雄、高橋太郎、宮島達夫、土屋信一、野村雅昭、(書記) 田原圭子
調査会は三回開催し、次の事項について検討した。

第一回 (54年11月27日) は、(1)国語辞典編集準備室の体制、(2)来年度の概算要求、(3)小委員会で検討した事項について報告し、『日本大語誌』(仮称)の用例採集法について討議した。特に総索引方式(小説)で行う用例採集法について、(1)採集源、(2)作品の選定、(3)年代、(4)規模(300万用例採集)の検討を行った。

第二回（55年2月4日）は、(1)昭和55年度の計画について、(2)『日本大語誌』の用例採集法について討議した。特に(ア)カードの規格、(イ)カード保管庫の面積、(ウ)スカウト方式の実験結果について検討した。

第三回（55年3月24日）は、用例採集法の基本計画について討議し、特に(1)スカウト方式による作業見積もり、(2)スカウト方式の実験結果、(3)用例採集手段について＜コンピュータ方式の作業手順＞、＜カード方式と電算機方式の比較＞、(4)主要雑誌目録について検討した。

Ⅲ 国語辞典編集準備小委員会

国語辞典編集準備調査会において検討すべき問題点を整理したり、国語辞典編集準備室で行った作業内容について検討するために、国語辞典編集準備小委員会を所内に設けた。構成メンバーには、国語辞典編集準備室員のほか、所長、松井栄一委員が加わっている。小委員会は10回開いた。第1回（54・9・1）、第2回（54・9・14）、第3回（54・10・12）、第4回（54・10・9）、第5回（54・10・23）、第6回（54・11・14）、第7回（54・12・11）、第8回（55・1・28）、第9回（55・2・26）、第10回（55・3・11）。

検討した事項は、前述のⅠ．国語辞典編集準備室の作業に関するものである。

Ⅵ 国語辞典編集に関する外国資料翻訳打合せ会

諸外国における自国語大辞典の編集目的・編集組織および内容を調査するため、外国資料翻訳打合せ会を設けた。メンバーは調査員として新たに

池上嘉彦 東京大学助教授

佐藤純一 東京大学教授

千石 喬 東京大学教授

田島 宏 東京外国語大学教授

の四氏を依頼し、これに、林大・見坊豪紀・斎賀秀夫・石綿敏雄・宮島達夫・飛田良文・清水康行・柏木成章・湯浅茂雄が参加した。

調査した文献は、次の通り。

ドイツ語 ドゥーデン独逸語大辞典 “DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache”

英語	新英語辞典 “A NEW ENGLISH DICTIONARY” (NED)
ロシア語	現代ロシア 標準語 辞典 “СЛОВАРЬ СОВРЕМЕННОГО РУССКОГО ЛИТЕРАТУРНОГО ЯЗЫКА”
フランス語	フランス語宝典, 19・20世紀フランス語辞典 “TRESOR de la LANGUE FRANÇAISE, Dictionnaire de la langue du 19 ^e et du 20 ^e siècle” (TLF)

会合は4回開き、第1回(54・12・24)は検討すべき語の翻訳について石綿敏雄氏から説明が行われた。

第2回(55年1月22日)は、「飲む」の意味記述についての検討を行った。

第3回(55年2月27日)は、「木」についての意味記述について検討した。

第4回(55年3月27日)は、「むずかしい」についての意味記述を検討し、あわせて、ドイツ、イギリス、ソ連、フランス各国の大辞典の編集過程と組織、および、外国辞書からみた日本語の大辞典に対する希望事項について座談会を行った。(その内容は来年度、編集準備資料集としてタイプ印刷にする予定である。)

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

図書館の運営に当たっては、例年図書委員を指名し、委員は図書の選択、図書館利用等について協議することになっている。54年度の委員は下記のとおりである。

委員長 渡辺

委 員 宮島，江川，梶原，岩田(純)，中野，志部，庶務課長

昭和54年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図書

受入 2882冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和 書	1536	261	442	74	2313
洋 書	395	70	102	2	569
計	1931	331	544	76	2882

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入 787種

	購 入	寄 贈	計
和	64	649	713
洋	51	23	74
計	115	672	787

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所 在 東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷 地 10,030 m^2

建 物

第一号館 (延) 5,719 m^2

(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)

第二号館 (延) 3,015 m^2

(研究部門)

第三号館 (延) 238 m^2

(会議室・その他)

第一資料庫 (延) 213 m^2

第二資料庫 (延) 106 m^2

その他付属建物 (延) 330 m^2

計 (延) 9,621 m^2

2 経 費

昭和54年度予算額

人件費 346,857,000円

事業費 200,293,000円

各所修繕費 5,573,000円

II 評議員会 (昭和55年3月31日現在)

会長 有光 次郎

副会長 佐伯 梅友

碧海 純一	石井 庄司
市古 貞次	岩村 忍
江尻 進	遠藤 嘉基
小川 芳男	何 初彦
黒野郷八郎	坂井 利之
佐藤喜代治	沢田 慶輔
高橋 英夫	田中千禾夫
千葉雄次郎	徳永 康元
福島慎太郎	頼 惟勤

Ⅲ 組織と職員

1 定員 79名

2 組織および職員名（昭和55年3月31日現在）

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	林 大	54. 9. 17～54. 11. 16 言語変化研究部長 事務代理
庶務部	部 長	鹿島 敏	
庶務課	課 長	正法地幹雄	
	課長補佐 (併) 庶務係長	菊地 貞 〃 岡本 まち 荒川佐代子	
	非 常 勤	吉岡 佳美	54. 4. 1～55. 3. 30
	図 書 館	大塚 通子 沢木喜美子	(旧姓 井方)
	人事係長	井上 政和	
	併 任	田島 正幸	
会計課	会計課長	坂田 満	
	課長補佐	広瀬 二郎	

言語体系研究部	(併)	総務係長	広瀬 二郎	
			金田 ㇿよ	
		経理係長	土佐南洋夫	54. 6. 16 用度係長から配置換
			岩田 茂男	
		用度係長	山本 光夫	54. 6. 16 経理係長から配置換
			加藤 雅子	
			木村 権治	
			鈴木 亨	
			浅香 忠雄	
		非 常 勤	中山 典子	54. 4. 1~55. 3. 30
		〃	弓野 節子	54. 4. 1~55. 3. 30
	部	長	南 不二男	
	第一研究室	室 長	高橋 太郎	
			工藤 浩	
			鈴木美都代	
第二研究室	室 長	宮島 達夫		
		村木新次郎		
		高木 翠		
言語行動研究部	部 長	渡辺 友左		
		室 長	中村 明	
		杉戸 清樹	54. 9. 7~54. 10. 18 国際共同研究のため 外国出張 (西ドイツ)	
	第二研究室	室 長	塚田実知代	
			江川 清	
			米田 正人	
			堀江よし子	
			高野美智子	
	第三研究室	室 長	神部 尚武	
			主任研究官	高田 正治

	非常勤	和気 典二	54. 10. 1~55. 3. 31 (宇都宮大学教授)
言語変化研究部	部長	飯豊 毅一	54. 9. 17~54. 11. 16 文部省在外研究員 (甲種) (イギリス・フランス・イタリア ・ドイツ)
第一研究室	室長	佐藤 亮一	
		真田 信治	
		沢木 幹栄	
		白沢 宏枝	
第二研究室	室長	飛田 良文	
	主任研究官	梶原滉太郎	
		中山 典子	
		田原 圭子	文献調査室
		伊藤 菊子	文献調査室
		中曾根 仁	文献調査室
言語教育研究部	部長	村石 昭三	
第一研究室	室長	大久保 愛	
		岩田 純一	
		島村 直己	
		川又瑠璃子	
	非常勤	芳賀 純	54. 10. 1~55. 3. 31 筑波大学教授
言語計量研究部	部長	斎賀 秀夫	
第一研究室	室長	土屋 信一	
	主任研究官	中野 洋	
	主任研究官	齋岡 昭夫	
		中俣久美子	
		長田 厚子	
第二研究室	室長	野村 雅昭	
		佐竹 秀雄	
		松浦美恵子 (旧姓 小原)	
第三研究室	室長	斎藤 秀紀	

日本語教育 センター	主任研究官	田中 卓史	
		米田 純子	
		科野 千夏	54. 7. 31 退職
		小高 京子	
		沢村都喜江	
	センター長	野元 菊雄	{ 54. 10. 1 日本語教育センター 第三研究室長 事務取扱 54. 12. 1 第一研究室長 免事務取扱
	第一研究室	室 長 高田 誠	{ 54. 7. 1 在外研究員（甲種）西ドイツから帰国 54. 9. 7. 国際共同研究のため外国出張 ～54. 10. 18 （西ドイツ） 54. 12. 1 日本語教育センター第一研究室 長昇任
		志部 昭平	
	第二研究室	室 長 上野田鶴子	
	第三研究室	(取)室長 野元 菊雄	
	日本語教育 研修室	正保 勇	55. 3. 1 採用
		室 長 水谷 修	
		田中 望	
		石井 久雄	54. 9. 7～54. 10. 18 国際共同研究のため 外国出張（西ドイツ）
		田島 正幸	
	併 任	高野美智子	
	日本語教育 教材開発室	室 長 武田 祈	
		日向 茂男	{ 現地日本語教育実情調査および日本語教育指 導のため（国際交流基金） 55. 2. 25～55. 4. 5 外国出張（メキシ コ・ペルー・ブラジル・アメリカ）
		清田 潤	
(国語辞典 編集調査員)	非 常 勤	清水 康行	54. 6. 11～55. 3. 31
	〃	湯浅 茂雄	54. 8. 13～55. 3. 31
	〃	柏木 成章	54. 8. 23～55. 3. 31
	〃	見坊 豪紀	54. 8. 27～55. 3. 31
	〃	石綿 敏雄	54. 8. 27～55. 3. 31 茨城大学教授

(国語辞典 編集調査員)	非常勤	田島 宏	54. 12. 1~55. 3. 31 東京外国語大学教授
	"	千石 喬	54. 12. 1~55. 3. 31 東京大学教授
	"	佐藤 純一	54. 12. 1~55. 3. 31 東京大学教授
	"	池上 嘉彦	54. 12. 1~55. 3. 31 東京大学教授
	"	荒尾 禎秀	54. 12. 13~55. 3. 31 東京学芸大専任講師
	"	村山 昌俊	54. 12. 13~55. 3. 31
	"	倉持 保男	54. 10. 15~55. 3. 31 慶応義塾大学助教授
	"	富田 隆行	54. 10. 15~55. 3. 31 亜細亜大学専任講師
	"	山下 正彦	54. 11. 15~55. 3. 31 ベルリッツ、スクール、オ ブラングエジス日本語講師
	"	青山 照男	54. 11. 27~55. 3. 31
(日本語教育 センター客員 研究員)	"	村田 知子	54. 12. 5~55. 3. 31 国際学友会 } 非常勤講師 拓殖大学 }

3 名誉所員

西尾 実 (初代所長 昭24.1.31~35.1.22在任 昭54.4.16死去)

岩淵悦太郎 (2代所長 昭35.1.22~51.1.16在任 昭53.5.19死去)

大石初太郎 (元第一研究部長 昭43.3.31退職)

興水 実 (元第二研究部長 昭45.3.31退職)

芦沢 節 (元言語教育研究部長 昭53.4.1退職)

IV 昭和53年度の事業

1 刊行書

研究報告集(2) (報告65)

幼児の語彙能力 (報告66)

電子計算機による国語研究X (報告67)

方言談話資料(3)—青森・新潟・愛知— (資料集10—3)

方言談話資料(4)—福井・京都・島根— (資料集10—4)

日本言語地図語形索引 (資料集11)

中・上級教授法—日本語教育指導参考書7—

日本語教育映画解説 (基礎編第8, 9, 10, 11)

国語年鑑 (昭和54年版 秀英出版刊)

国立国語研究所年報 —30— (昭和53年度)

2 日本語教育映画の制作および普及

今年度制作した日本語教育映画 (16ミリ, カラー, 5分もの) の題名は下記のとおりである。

第17巻 「みずうみのえを かいたことがありますか」 —経験・予定の表現—

第18巻 「あのいわまで およげますか」 —可能の表現—

第19巻 「よみせを みに いきたいです」 —意志・希望の表現—

これらは、北海道、宮城県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、広島県、福岡県各教育委員会および都立日比谷図書館に寄贈した。なお、これらの映画フィルムは市販され、また需要によってビデオ化して頒布することができるようになっている。

3-1 国立国語研究所研究発表会

昭和55年3月8日(土) 午後1時30分～4時30分

あいさつ	林 大
談話行動の分析	米田 正人
談話語の実態と日本語教育	野元 菊雄
児童の概念形成と言語	岩田 純一
幼児・児童の文理解	上野田鶴子
質疑応答	

3-2 国立国語研究所日本語教育センター公開講座 (129ページ参照)

昭和55年 3月22日(土) 午後2時～4時30分

日本語と動詞 野元 菊雄

コソア三称について 林 大

4 日本語教育研修会 (120ページ参照)

日本語教育長期専門研修 (昭和54年4月17日～昭和55年2月29日)

日本語教育特別集中研修 (昭和55年2月12日～3月11日)

現職者一般研修および初級研修を実施した。

東京会場 昭和54年7月23日～7月27日

大阪会場 昭和54年7月30日～8月3日

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

1 外国人研究員

氏名・職名	研 究 題 目	研 究 期 間
蘇 徳昌 (中華人民共和国) 上海復旦大学助教授	電子計算機による日本語研究	昭和53年11月10日から 昭和55年9月30日まで
イュンス・リックマイヤー (西ドイツ) ドイツ語研究所研究員	日独語の対照言語学的研究	昭和52年12月1日から 昭和55年3月31日まで
ジャン・セージュ・シャギ ボフ (フランス) 国立科学研究所調査助手	日本語の格助詞に関する研究	昭和54年5月10日から 昭和55年3月31日まで
V・Mアルパトフ (ソビエト) ソ連邦科学アカデミー 極東研究所研究員	日本語文法	昭和54年5月14日から 昭和54年9月29日まで
イゴリー・F・バルドウリ (ソビエト) ソ連科学アカデミー 東洋研究所アルタイ語科 主任教授	現代日本語の動詞・助動詞・人 称代名詞等の語彙を機能・意味 別に分類する研究	昭和54年11月6日から 昭和55年8月24日まで

2 内地留学生

氏 名	勤務・職名	研 究 題 目	研 究 期 間
大土かず子	千葉市立	作文指導における形成	昭和54年4月2日から

渡辺登代子	緑町小学校教諭 船橋市立 法典東小学校教諭	的評価 子どもの言語能力を高 める説明的文章の指導 過程はどうあるべき か。	昭和55年3月31日まで 昭和54年4月2日から 昭和55年3月31日まで
白川 富子	徳島市立 助任小学校教諭	児童の表現力を伸ばす ための作文指導のあり 方	昭和54年4月9日から 昭和54年9月30日まで
大割 輝明	富山県下新川郡朝 日町立小川中学校 教諭	表現力を育てるための 語彙指導について —中学生として習得す べき基本的な語彙—	昭和54年7月1日から 昭和54年9月30日まで

Ⅵ 日 記 抄

1979. 4. 17 日本語教育長期専門研修開講式（国研第一研修室）
19 中国社会科学院民族研究所伝懋勤氏来訪
21 昭和54年度日本語教育映画企画協議会（第1回）（国研会議室）
5. 9 日本語教育映画試写会（文部省試写会）
12 共立女子大学教授 金子尚一氏他22名見学
31 昭和54年度国立学校経理部課長会議（31—1）
7 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議総会（7～8）
（学士会館）
9 日本語教育映画等企画協議会（第2回）（国研会議室）
文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議（学士会館）
18 中国社会科学院語言研究所副所長 李 栄氏来訪
23 昭和54年度 日本語教育連絡協議会（第1回）（国研会議室）
7. 2 第96回 国立国語研究所評議員会（国研第二会議室）
3 母語別学習辞典編集委員会（国研会議室）
4 「日本語教育のための基本的な語彙に関する比較・対照研究のため
の専門家検討会議（国研会議室）
12 文化庁附属機関庶務・会計部課長会議（東海大校友会）
18 日本語教育センター運営委員会（国研第二会議室）

- 23 日本語教育初級・現職者一般研修 (23~27) (国研講堂)
- 30 日本語教育初級・現職者一般研修 (30~8/3) (大阪・なにわ会館)
- 8. 6 母語別学習辞典編集委員会 (国研会議室)
- 14 アリゾナ大学外国語学部 エツコ・オバタ・ライマン氏来所
- 22 給与監査 (国研会議室)
- 28 母語別学習辞典編集委員会 (国研会議室)
- 韓国精神文化研究院院長李瑄根氏等来訪
- 31 中国日語教師訪日代表団岩明遠氏他 8 名来訪
- 日中学院長藤堂明保氏同行
- 9. 7 チュニジア、ブルギバ現代語研究所長マアムーリ氏等来訪
- 9. 8 中華民国 輔仁大学教授張則貴氏来訪
- 10 会計実施検査 (国研第一会議室)
- 12 日本語教育映画企画協議会 (国研会議室)
- 27 第30回文部省所轄機関事務協議会 (27~29) (三瓶青年の家)
- 10. 3 母語別学習辞典編集委員会 (国研会議室)
- 5 ドイツ語研究所長シュティッケル氏来訪
- 25 関東甲信越地区国立大学会計部課長会議 (25~26) (鬼怒川)
- 29 チュービンゲン大学教授コセリウ氏来訪
- 11. 1 昭和54年度文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議 (第3部会) (1~2) (神戸)
- 母語別学習辞典編集委員会 (国研会議室)
- 9 文部省所轄ならびに附置研究所長会議常置委員会 (第3部会) (東大物性研)
- 10 昭和54年度日本語教育映画等企画協議会 (国研第4研修室)
- 20 昭和54年度文部省所轄研究所長会議 (統計数理研)
- 27 国語辞典編集準備調査会 (第1回) (国研会議室)
- 29 昭和54年度第30回文部省所管研究所第3部会事務協議会
- (国立民族博)
- 12. 4 神奈川県教育センター研修員 8 名見学

- 5 日本語教育映画試写会（文部省試写室）
- 6 母語別学習辞典編集委員会（国研会議室）
- 8 昭和54年度日本語教育研究連絡協議会（国研会議室）
- 20 創立記念日 第1研修室
 - (1) 永年勤続者表彰
 - (2) 記念撮影
 - (3) 記念講演 講師 石井庄司評議員
- 24 国語辞典編集に関する外国資料翻訳打合せ会（国研会議室）
- 1980. 1. 19 昭和54年度日本語教育映画等企画協議会
- 21 母語別学習辞典編集委員会（国研会議室）
- 29 サンパウロ州立大学教授鈴木悌一氏来訪
- 2. 2 日本語教育映画等企画委員会（国研会議室）
- 4 国語辞典編集準備調査会（国研会議室）
- 14 文化庁人事事務監査（国研会議室）
- 16 日本語教育映画等企画協議会（国研会議室）
- 18 文化庁附属機関次長幹部会議（国立教育会館）
- 23 昭和54年度日本語教育連絡協議会（第3回）（国研会議室）
- 28 母語別学習辞典編集委員会（国研会議室）
- 29 日本語教育長期専門研修閉講式（国研第一研修室）
- 3. 8 研究発表会（国研講堂）（別記154ページ参照）
- 12 日本語教育センター運営委員会（国研会議室）
- 13 文化庁附属機関長会議（国立教育会館）
- 14 第97回国語研究所評議員会（国研会議室）
- 17 昭和54年度日本語教育研究協議会及び懇談会（東日本地区）
（国語課との共催）（講堂・会議室）
- 19 各省直轄研究所長連絡協議会 昭和54年度定例総会（竹橋会館）
- 20 文化協定締結国等からの学者招致計画によるカルフォルニア大学
（サンディエゴ）教授E. ルーメルハルト氏受入れ（20日—31日）
- 22 日本語教育研究発表会（国研講堂）（別記154ページ参照）

- 24 国語辞典編集準備調査会（国研会議室）
- 25 韓国誠信女子大学学長趙圻烘氏他 3 名来訪
中国北京大学教授孫宗光氏来訪

昭和55年10月

国 立 国 語 研 究 所

〒115 東京都北区西が丘 3—9—14
電話東京 (900) 3111 (代表)

UDC 0 5 8 : 8 0 9 . 5 6

NDC 8 1 0 . 5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	2,000円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	品切れ
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	〃
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	〃
7	入門期の言語能力	〃	〃
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型(1) ——対話資料による研究——	〃	〃
19	総合雑誌の用字	〃	〃
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) ——総記および語彙表——	〃	〃
22	現代雑誌九十種の用語用字(2) ——漢字表——	〃	〃

23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	秀英出版刊	品切れ
24	横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究	"	"
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) ——分 析——	"	"
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,10円
27	共 通 語 化 の 過 程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類 義 語 の 研 究	"	"
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	"	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	"	"
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	"	"
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	"	"
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	"	"
30-6	日 本 言 語 地 図 (6)	"	"
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	"	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	"	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	"	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	"	450円
36	中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究	"	5,000円
37	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査	"	品切れ
38	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅱ)	"	2,800円
39	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅲ)	"	700円
40	送 り が な 意 識 の 調 査	"	1,500円
41	待 遇 表 現 の 実 態 ——松江24時間調査資料から——	"	900円
42	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅲ)	"	1,200円
43	動 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究	"	5,000円
44	形 容 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究	"	3,000円

45	幼 児 の 読 み 書 き 能 力	東京書籍刊	4,500円
46	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (IV)	〃	3,000円
49	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (V)	〃	900円
50	幼 児 の 文 構 造 の 発 達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VI)	〃	1,000円
52	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言 語 使 用 の 変 遷 (1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VII)	〃	1,000円
55	幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	品切れ
56	現 代 新 聞 の 漢 字	〃	3,000円
57	比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類	〃	6,000円
58	幼 児 の 文 法 能 力	東京書籍刊	5,500円
59	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (VIII)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	〃	2,500円
61	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (IX)	〃	1,300円
62	研 究 報 告 集 (1)	〃	1,700円
63	児 童 の 表 現 力 と 作 文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	2,000円
65	研 究 報 告 集 (2)	秀英出版刊	3,000円
66	幼 児 の 語 彙 能 力	東京書籍刊	8,000円
67	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (X)	秀英出版刊	1,500円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語 彙 調 査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	〃	〃

4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	品切れ
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,800円
7	動詞・形容詞問題語用例集	"	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	"	500円
9	牛店 雑誌 安愚楽鍋用語索引	"	1,500円
10-1	方言談話資料(1) —山形・群馬・長野—	秀英出版刊	6,000円
10-2	方言談話資料(2) —奈良・高知・長崎—	"	6,000円
10-3	方言談話資料(3) —青森・新潟・愛知—	"	6,000円
10-4	方言談話資料(4) —福井・京都・島根—	"	6,000円
11	日本語語地図語形索引	大蔵省印刷局刊	

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	"	"
3	ことばの研究 第3集	"	"
4	ことばの研究 第4集	"	1,300円
5	ことばの研究 第5集	"	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	13	昭和36年度	160円
2	昭和25年度	"	14	昭和37年度	220円
3	昭和26年度	160円	15	昭和38年度	250円
4	昭和27年度	160円	16	昭和39年度	品切れ
5	昭和28年度	品切れ	17	昭和40年度	250円
6	昭和29年度	200円	18	昭和41年度	300円
7	昭和30年度	品切れ	19	昭和42年度	300円 増刊
8	昭和31年度	"	20	昭和43年度	品切れ
9	昭和32年度	"	21	昭和44年度	"
10	昭和33年度	"	22	昭和45年度	"
11	昭和34年度	"	23	昭和46年度	450円
12	昭和35年度	350円	24	昭和47年度	450円

25	昭和48年度	品切れ	29	昭和52年度	非売
26	昭和49年度	600円	30	昭和53年度	800円
27	昭和50年度	700円	31	昭和54年度	
28	昭和51年度	非売			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和43年版	品切れ
昭和30年版	〃	昭和44年版	1,500円
昭和31年版	〃	昭和45年版	1,500円
昭和32年版	〃	昭和46年版	2,000円
昭和33年版	〃	昭和47年版	2,200円
昭和34年版	〃	昭和48年版	2,700円
昭和35年版	〃	昭和49年版	3,800円
昭和36年版	〃	昭和50年版	3,800円
昭和37年版	〃	昭和51年版	4,000円
昭和38年版	〃	昭和52年版	4,500円
昭和39年版	〃	昭和53年版	4,600円
昭和40年版	〃	昭和54年版	4,800円
昭和41年版	〃	昭和55年版	5,200円
昭和42年版	〃		

日本語教育教材

1	日本語と日本語教育	国立国語研究所 文化庁 共編	大蔵省印刷局刊	650円
	——発音表現編——			
2	日本語と日本語教育	——文字表現編——	〃	850円
3	日本語の文法(上)	——日本語教育指導参考書4——	〃	450円
4	日本語教育の評価法	——日本語教育指導参考書6——	〃	〃
5	中・上級教授法	——日本語教育指導参考書7——	〃	500円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
-------------	----------------------	-------	------

青年とマス・コミュニケーション 日本新聞協会 共著 金沢書店刊 品切れ
 国立国語研究所

国立国語研究所三十年のあゆみ 秀英出版刊 1,500円
 —研究業績の紹介—

日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

巻	題 名	プリント価格
第1巻	これは かえるです —「こそあど」+「は～です」—	30,000円
第2巻	さいふは どこにありますか —「こそあど」+「～がある」—	〃
第3巻	やすすくないです、たかいです —形容詞とその活用導入—	〃
第4巻	なにを しましたか —動 詞—	〃
第5巻	しずかなこうえんで —形容動詞—	〃
第6巻	さあ、かぞえましょう —助 数 詞—	〃
第7巻	うつくしいさらに になりました —「なる」「する」—	〃
第8巻	きりんは どこにいますか —「いる」「ある」—	〃
第9巻	かまくらを あるきます —移動の表現—	〃
第10巻	おかねを とられました —受身の表現1—	〃
第11巻	どちらが すきですか —比較・程度の表現—	〃
第12巻	もみじが とてもきれいでした —です、でした、でしょう—	〃
第13巻	きょうは あめがふっています —して、している、していた—	〃
第14巻	そうじは してありますか —してある、しておく、してしまう—	〃
第15巻	おみまいに いきませんか —依頼・勧誘の表現—	〃
第16巻	なみのおとが きこえてきます —「いく」「くる」—	〃
第17巻	みずうみのえを かいたことがありますか —経験・予定の表現—	〃
第18巻	あのいわまで およげますか —可能の表現—	〃
第19巻	よみせを みに いきたいです —意志・希望の表現—	〃
第20巻	てんきが いいから さんばを しましょう —原因・理由の表現—	〃
第21巻	さくらが きれいだ そうです —聞伝・状態の表現—	〃
第22巻	あめに ふられて こまりました —受身の表現2—	〃

第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画

VTR価格1/2インチオープンリール21,000円、3/4インチカセット20,000円

1979—1980
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1979 to March 1980

A Descriptive Study of Modern Japanese Grammar

A General Survey of Modern Japanese Vocabulary

A Sociolinguistic Study on Japanese Honorifics

A Stylistic Study of Modern Japanese

Contrastive Study on the Variations of Language Behavior between
Various Social Groups

Fundamental Study for Analysis of Verbal Behavior System

Information Processing in Visual Pattern Perception and Reading

A Study of the Physiological Process of Japanese Pronunciation
through Dynamic Palatography

A Nation-Wide Survey of the Phonetic and Grammatical Features of
the Dialects

Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji Period

A Study of the Development of Terminology in Modern Social Sciences

Study on the Relation between Acquisition of Word Meaning and
Cognitive Development in Children

Statistical Investigation of High School Textbook Vocabulary

Research on the Actual Condition of Writing-Form Variation and the
Mental Attitude of Writers in Modern Japanese

A Study of Writing in Modern Japanese

An Analytic Study of Language Data by Computer

Contrastive Linguistic Study of Japanese

A Contrastive Study of Patterns in Japanese Language Behavior

A Contrastive Study of Fundamental Vocabulary for Japanese Lan-
guage Teaching

A Study of the Current State of Japanese Language Teaching
—Contents and Methodology—

A Collection and Classification of Reference Materials in the Teaching
of Japanese as a Foreign Language

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO